『私の生きてきた時代』

～技術革新のながれの中で～

中川　利男

目　次

１．はじめに.....5
２．ラジオとテレビ.....6
　１．１ スーパーヘテロダインラジオ.....7
　１．２ テレビジョンを組み立てる.....8
２．アマチュア無線（ハム）.....9
　２．１ ハム資格受験.....9
　２．２ ハム局開局へ.....10
　２．３ ハムから無線通信士を目指す.....12
３．社会人になって.....13
　３．１ 初めて勤めた会社.....13
　３，２ 生活のために就職.....15
４．メーカーに転職.....16
　４．１ 万国博覧会.....17
　４．２ 第三級無線通信士の資格をとる.....18
　４．３ 忘れられない事柄.....19
　４．４ 写真を趣味に.....20
　４．５ 第五福竜丸.....21
５．NY 事務所勤務.....22
　５．１ 初めての渡航.....22
　５．２ 米国での仕事.....23
　５．３ シカゴでの話.....24
　５．４ バーモント州へ行く.....25
　５，５ ライカを買って.....26
　５．7 帰国へ.....27
６．帰国後.....29
　６．２ パソコンとの出会い.....30
７．スキーとバイク.....31
　７．１ スキー.....31
　７．２ バイク.....32
８．結婚.....33
　８．１ 初めての自家用車.....34
　８．２ ラジコン.....34
　８．３ ラジコン・ヘリが楽しめた理由.....35
　８．４ アマチュア無線再開.....36
　８．５ モービル運用へ.....37
　８．６ 上級ハム資格へ.....37

８．７ ハム仲間の思い出 38
９．パーソナル・コンピュータ 40
９．２ ハムとパソコン 41
９．３ ハムの業務日誌 43
１０．富士通ゼネラルに 45
１０．１ 無線装置の開発 45
１０．２ 新しい環境で 45
１１．次の転職 47
１１．２ 阪神淡路大震災と Windows95 50
１１．３ 携帯電話 51
１１．４ クラシック音楽を体験 52
１２．襲ってきた大病 53
１２．１ それは咳からはじまった 53
１２．２ 初めての入院生活 54
１２．３ 退院してから 55
１３．ハローワーク 56
１３．１ 商社はこんなもの 56
１３．２ 負債を背負い込むことに 57
１３．３ 逝ってしまった母 58
１４．Movie に目覚める 59
１４．１ 高校教師に 59
１４．２ Ｍｏｖｉｅに目覚める 60
１４．３ 高校を退任後 60
１４．５ ビデオカメラ遍歴 61
１５．自己破産 1
１５．自己破産 64
１５．１ 苦しかった大島での生活 64
１５．２ 真空装置の会社に就職 65
１６．ソフトウエア開発 67
１６．１ 打ち合わせ 67
１６．２ デバッグ作業 69
１７．AutoCAD を学ぶ 69
１７．１ 就職できたものの 70
１７．２ 開き直りも 70
１７．３ 再びＫ社に 71
１７．４ 東日本大震災発生 72
１７．５ 携わった仕事 73
１７．６ 帰省 74

１７．７ リタイヤ 74
１８．さらに Movie に 74
１８．１ 横浜市営電車 75
１８．２ 横浜の水道など 76
１９．古稀を迎えて 77
１９．１ 老後の生活 77
１９．２ 自動者運転免許について 78
１９．３ シルバー人材センター 78
２０．気になる政治・経済 78
２０．１ 安部政権誕生 79
２０．２ 日本国憲法と集団的自衛権 79
２０．３ 特定秘密保護法 80
２０．４ 原発問題 終息と輸出 80
２１．おわりに 81
２１．１ 最後の帰省かもしれない 81
２１．２ 親友 F 君のこと 83
２１．３ おわりに 84

１．はじめに

終戦前の昭和 18 年 10 月、私はこの世に生を受けました。出生地は兵庫県尼崎市となっていますが、同市での生活の記憶はほとんど無く、ものごころがつく前に父の実家に移ったからです。近くに高架の電車が走っていた風景の記憶がおぼろげにありますが、この風景は後で訪れた時のもの、あるいはほかの風景が混同しているのかもしれません。実家があるのは、空海（弘法大師）ゆかりの善通寺(四国八十八ヶ所霊場の 75 番札所)の門前町に近い吉原町です。町内には 72 番札所、曼荼羅寺と 73 番札所、出釈迦寺があります。

写真 1 曼荼羅寺と出釈迦寺のある我拝師山

昭和 20 年 8 月 15 日、天皇の玉音放送で国民は敗戦したことを知らされました。母は、まだ幼かった私を、叔母に預けてのヤミ行商とか、娘時代の着物を売って生活費に当てていたようです。実家は農家でしたが、農地は狭く、それでも家族が食べてゆける程度の収穫はあったはずでしたが、なぜか、私たち親子は祖父母に虐げられていたようで、私自身、楽しかった様な思い出はありませんでした。

父の実家と書きました。実家には父はいなく、両親（私から観れば祖父母）が生活していました。その父は、戦前に満州に移り住む計画をしたらしいのですが、母は幼かった姉（姉弟の一番上）の教育面とかを心配して同行を拒否しました。結局、父は単身で移住し、何かの事業をしていたらしく、そのまま、陸軍に徴兵されたようです。退役後、満州でナンパした女性と共に大阪に引き上げて暮らし始め、二人の娘（私にとっては異母兄妹ですね？）をもうけました。その暮らしに、姉も一緒でした。

たまに、父が帰省したときなど、母は幼い私を父のそばに寝かせ、夫婦の絆を主張したかったようでしたが、私はいやだった事を覚えています。

昭和 29 年 3 月、中多度郡善通寺町を中心とした、1 町 4 村が合併し、善通寺市が誕生し、私の実家は、吉原村から吉原町となりました。当時小学校５年生であった私は、他の生徒達と、新しく出来た善通寺市の小旗を持って市内を行進したことを覚えてます。

ほかに、小学校時代の思い出は、低学年だった頃、下校時、児童同士で手をつないで列をつくって校門あたりまで帰るのですが、好きだった女の子に、手をつなぐ事を、半ば強要したことを、おぼろげに覚えています。また、高学年になってからの事と思いますが、身体検査の折り、女の子と一緒で裸で検査をうけるのですが、そのうちの一人の女生徒の胸が膨らんでいるのを見つけました。別に他意はなかったのですが、「よし子ちゃん（仮名）、乳が大きいぞ！」と叫んでしまいました。担任の先生に怒られたのは言うまでもありません。末恐ろしい餓鬼だったのです。あるとき、体育館で集会が行われているとき、地震がありました。

みんな一斉にグランドに飛び出したのですが、地震が収まって体育館へ戻るとき、一人の女の子が起き上がれないで泣いていました。その女の子の腕は肘から手首にかけてぐにゃっと曲がっていました。骨折したのでした。その女の子こそ、私が乳が大きいと叫んだよし子ちゃん(仮名）で、その泣き顔をおぼろげに覚えています。可愛い女の子で、帰りに手をつなぐ事を強要した女の子だったかもしれません。

私は 4 人姉弟の末っ子で一番上に姉が、そして次ぎに兄が二人います。姉は、父の家族？（妾とその娘）と大阪で生活していました。その姉は、25 歳のころ、父親の元で病死しました。私には詳しい話はわかりませんでしたが、どうやら病院で手術中に亡くなったようです。小学校の体育館で、映画会が開かれた夜、母の元へ、電報が届き、急遽兄達と夜行列車で大阪で駆けつけました。母はその亡骸を目にして、さぞ悲しかったことでしょう、亡骸の頬に手をあて、「氷より冷たい」と涙を流していたことを覚えています。葬儀がおわり、姉の形見の品や遺骨を胸に、実家へ戻ったとき、母は遺骨に向かって「千枝子（姉の名前)、帰って来たよ」とささやいていました。その母も平成 12 年の節分に 90 歳でなくなりましたが、法要を姉と合同で執り行ったのですが、檀那寺のお坊さんは、60 年も前になくなった姉を、母の娘と思わず、おばあさんと誤解されたようでした。

平成 25 年 10 月、満 70 歳となりました。考えて観るに、私の生きてきたこの 70 年間は敗戦の苦難の時代から、高度成長期、バブル期をへて、交通、文化、科学技術が大きく発展してきた時代ではないかと考えています。

２．ラジオとテレビ

小学生のころ（昭和 20 年代）はラジオが各家庭にあった程度で、テレビジョン放送は夢の話でした。テレビジョン放送が始まったのはずっと後のことでした。その頃のラジオといえば、戦後間もない時期で、「国民型」とか言われるストレート型ラジオであったと思われます。今の主流であるスーパーヘテロダイン方式ラジオはまだ一般家庭に普及していなかったようでした。

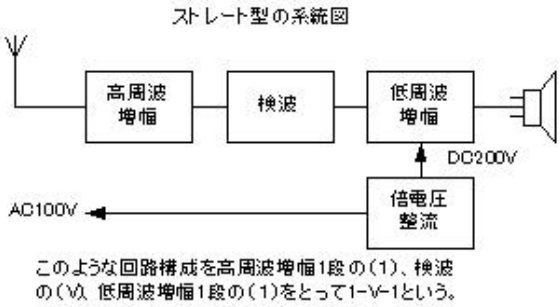


図 1 ストレート受信機の系統図

ストレート型ラジオは、高周波増幅、検波、低周波増幅、それに倍電圧整流の 4 球式でした。この手のラジオは放送受信のためのダイアルとは別に、再生用（フィードバック）の可変コンデンサのつまみがありました。このつまみをまわして、感度のいいところに合わせるのですが、まかり間違って、発振してしまうと、隣近所のラジオに妨害を与えてしまう恐れがありました。勿論、すべて ST 管と呼ばれる達磨型の真空管式で、電源トランスなど高価なものは使わず、ヒーターは直列接続し、100V 電源に接続していました。また、真空管の動作電源（通常 B 電源という）は 100V を倍電圧整

流して 200V を得ていたのです。

当時、よく聞いた放送番組は、ほとんど NHK 大阪で放送されていた、「花菱アチャコ・浪花千栄子」のラジオドラマ「アチャコほろにが物語」などを聞いてた記憶があります。何せ、６０年も前のこと、記憶もさだかではありませんが、面白くて楽しみにしていた記憶があります。ほかに、やはり NHK の子供むけ番組で、「笛吹き童子」「紅孔雀」「オテナノ塔」などがあり、その主題歌をくちずさんだもので、今でもその歌詞とメロディは不完全ですが忘れていません。特に感動ものだったのが、ラジオ東京 (TBS)で放送された「赤銅鈴の助」で、後に大スターとなった、吉永小百合さんが、千葉小百合（主役の赤銅鈴の助の師、北辰一刀流の千葉周作の娘）を演じていたことでした。

ラジオは、その後の真空管の発達やトランジスタの登場によって発展していきました。真空管は ST 管と呼ばれる、達磨型、GT 管と呼ばれるガラス管や金属管を使った円筒形のもの、小型化されたミニチュア管、さらに小型化され、電極からリード線が引き出されたサブミニチュア管などがあります。

回路方式ではストレート型の高周波増幅ー検波ーオーディオ増幅（1-V-1とも呼ばれ、高周波増幅を省いたものを 0-V-1という）に変わって、スーパー・ヘテロダイン方式が主流を占めました。スーパー・ヘテロダイン方式は構造が複雑ですが、そのマイナス面を払拭する利点があります。

１．１ スーパーヘテロダインラジオ

ヘテロダインとは、合成とか混合という意味で、アンテナから入ってくる電波（放送波 526.5～1606.5kHz）を局部発振回路で発生させた信号と混合し、アンテナからの電波を

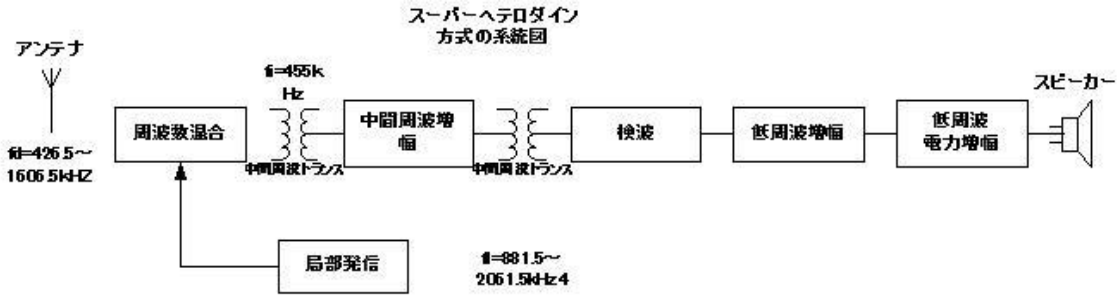


図 2 スーパーヘテロダイン方式の系統図

より低い、単一周波数の中間周波数の信号（455kHz）に変換します。なぜこんな複雑な処理をするのかと言うと、広い放送波の帯域を安定に増幅するのが難しく、低い単一周波数の中間周波数信号に変換すると、安定に増幅出来るからです。また、同調回路が単一周波数ですので、シャープな選択度がえられますので好都合です。この方式は受信機の基本構造で、いろいろ改良され、通信型受信機には発展型が採用されています。

東京通信工業（現ソニー）は、当時のトランジスタは低い周波数帯域でしか使えないだろうとされていたのですが、1954 年日本初の高周波トランジスタの試作に成功し、トランジスタラジオを試作しました。翌年（昭和 30 年）には、SONY のマークをつけた日本初のトランジスタラジオ「TR-55」を製造・販売開始しました。このラジオの回路構成は、トランジスタ 5石（せき）使ったスーパー・ヘテロダイン方式です。141mm(W)×89mm(H)×38.5mm(D)と小型で、それまで家庭用に据え置き型だったのに対し、携帯使用出来るようになりました。

写真 2 東京通工業(現ソニー)の TR-55 オールトランジスラジオ(日本の技術 100 年 第 5 巻：筑摩書房

中学に入って（何故だか、私立の中学でした）から、仲良しの友人ができて、その彼の影響をうけ、私も「ラジオ少年」の仲間入りをしました。「ラジオ少年」は、不要となったラジオがあると聞けば、頂いてきて、きれいに分解して、部品を集めていきました。

５球スーパーはいつ頃から一般化したのか記憶にありません。どうやら、現パナソニックが昭和２７年（１９５２年）頃、発売したらしいのです。というのも、その当時から、アマチュア無線に心を奪われたからでしょうか？ラジオに対する関心が薄かったようです。

テレビ放送が始まったのが、１９５３年（昭和 28 年）NHK が、そして日本テレビがこれに続きました。当時のテレビジョンは３０万円くらいしたそうで、高価で、家庭に普及しなかったため、街頭テレビジョンで大相撲、プロレス、野球などの中継が公開されました。それは首都圏でのことで、地方では街頭テレビジョンは見た記憶は無く、街の電気店の店頭でのことだったと思います。

１．２ テレビジョンを組み立てる

高校２年か３年の時、隣の市（し）、丸亀市の大きな電気店で、テレビジョンキットメーカーから、１台取り寄せてもらい、学校をサボって組み立てました。当時、キットでも数万円したと思いますが、兄のへそくりやらで、私の勉強になると思ったからか、捻出してくれました。しかし、残念ながら、一発では映りませんでした。勿論自分で直せるわけがなく、取り寄せてもらった店へ持ち込んで、映るようにしてもらいました。原因は忘れましたが、決して誤配線では無く何かの部品不良だったらしいのです。私自身の名誉のためにも、断言しておきます。

その後のラジオ、テレビジョンはトランジスタや IC の実用化と相まって、めざましく、小型化や、また大型化などニーズに沿った製品が生産されるようになりました。現在では、テレビジョンのカラー放送が当たり前、アナログ放送から地上デジタル放送に代わり、より精細な放送が楽しめるハイビジョン放送が一般化しています。ハイビジョンでは３D テレビや、ついに 4 倍の解像度を持つ、４k テレビジョンが普及しつつあります。日本のアナログ

放送はNTSC方式で、米国で開発された方式を採用し、画面の縦横比は4：3、走査線が525本でした。そして、2003年12月から、アナログ放送と平行して、デジタル放送が開始され、2011年7月24日にはアナログ放送は完全に停波しました。

デジタル放送は、地上、衛星放送ともにハイビジョンとなり、1440×1080ドット、1920×1080ドットで放送されています。いずれも、受像機側では画面の縦横比は16：9で受像機がフル・ハイビジョンの場合、1920×1080ドットで表示されます。さらに4Kテレビと言われる画面は3840×2160ドット、つまり縦横ともハイビジョンの２倍のドット数で面積では４倍になります。4Kテレビと云われる所以は、面積が４倍の意味でなく、水平ドット数が3840ドットで約4000なので4k（1k(キロ)は1,000を表します）と呼ぶようです。ちなみにキロを表す単位は"k"で国際的に小文字です。従って、4Kでは無く4kと表現するのが正しいでしょう。画素数が増え、より、より精細な画像が表示されます。

２．アマチュア無線（ハム）

中学に入ってから、親友となった、F君の影響で、すっかり「ラジオ少年」になり、そして「ハム少年」になりました。知識はF君から吸い取り、３年間で初級のアマチュア無線技士の資格を取るべく、学業そっちのけで没頭しました。その頃からだったと思う、将来は船舶通信士になろうときめていて、その関連から、まずアマチュア無線局を開局することにしました。F君はすでに開局していたか、その直前だったと思います。

アマチュア無線局を開局するには、国からのお墨付きが必要で、アマチュア局を運用する人の無線従事者免許、通称「従免」と、無線機、アンテナなどの無線設備の免許状で通称「局免」の両者が必要なのです。無線従事者免許はアマチュア無線業務用でそれに対し、業務用の無線従事者免許があり、いずれも国家試験に合格しなければならないし、いずれも排他的要素を持っています。一方無線局免許状も同様で、国の行う完成後の落成検査に合格しなければなりません。

なぜ、こんな複雑な手続きが必要なのか？電波法第１条にこう謳われています。

（目的）

第一条　この法律は、電波の公平かつ能率的な利用を確保することによって公共の福祉を増進することを目的とする。

とあります。

つまり、有限な資源である電波を国民に公平かつ能率的に使用せしめるため、勝手に使っちゃいけないよ！ということなのです。

２．１ ハム資格受験

そして、中学３年生の秋、当時初級者向けに新しく出来たアマチュア無線の資格「電話級アマチュア無線技士」を受験申請しました。１級、２級アマチュア無線技士の資格しかなかったのですが、電信級、電話級アマチュア無線技士が新設され、その２回目の国家試験でした。試験は愛媛県の松山市にある四国電波監理局（現在は郵政省が廃止され、総務省の管轄

となって、四国総合通信局となりました)、で実施されたのです。私はただ一人、予讃線多度津駅から夜行列車にのり、松山へ向かいました。試験会場には、年配や年長者がほとんどでした。どんな問題が出たか？もう４０年以上前のことで内容はあまりよく覚えていないのですが、電波法と無線工学各々５問、時間は２時間３０分間の格闘であったと記憶しています。ただ一つ次のようなひとつの設問をおぼえています。

香川県
中川利昌
郵政省

写真 3 電話級アマチュア無線技士免許証

電流の３作用について記せ。

でした。(正解は、熱作用、磁気作用、そして化学作用です。）後日、合格通知が舞い込んできました。学校から帰ると、兄が「おめでただよ」といって、合格通知書を渡してくれました。ちなみに、前出のＦ君は第１回目の国家試験の合格者でした。合格通知をもらってから、すぐに無線従事者免許症の交付を申請し、写真の無線従事者免許証を手にしたのでした。

アマチュア無線局を開局するには、無線従事者と無線設備が必要なことは先に述べたとおりで、「無線局とは無線設備、および無線設備の操作を行うものの総体をいう。」と規定されており、アマチュア無線局もしかりです。

無線局免許を受ける人を免許人といいますが、アマチュア無線局の設備の免許人は無線従事者資格をもった、本人である必要があります。

無線従事者の免許は得ました。これから設備を調達しなきゃいけません。昨今のアマチュア局はメーカー製の機器が主ですが当時は「トリオ（現在のケンウッド)」から、４バンドの受信機が販売されていましたし、ほかのメーカーからも送信機が販売されていました。しかし、高価で手が出ません。受信機も送信機も自作に頼るしかなかったのでした。

アマチュア無線局の免許を得るには、「無線局免許申請書」、設備の設置場所や電波の型式、空中線電力などを記した「アマチュア局事項書」、無線設備の内容を記した「工事設計書」、送信機および受信機の系統図と空中線（アンテナ）の構造図に申請手数料と同額の収入印紙を添えて地域を管轄する電波監理局に提出します。審査の結果妥当であると認められた場合は、呼出符号（コールサイン）や空中線電力、周波数、無線局工事の落成の期限を指定して「予備免許」が与えられます。それから無線設備の工事を開始し、完了して、落成届けを提出しますと電波管理局の職員によって落成検査が行われ、合格すればその場で免許状が交付されます。

２．２ ハム局開局へ

高校生（同じ私立の学校の高等部に進学）になって、アマチュア無線局を開設に必要な書類の作成、無線機の制作に取りかかりました。Fig３および Fig４が申請当時の系統図です。受信機に使った真空管は6ZP1がST管でそれ以外はミニチュア管でした。高周波増幅無し、中間周波増幅 2 段のスーパー・ヘテロダイン方式で、自作が困難な高周波コイルなどは、

TORIO が発売していた、RF コイルキットと、中間周波トランス（IFT)2 段用を購入しました。もう、50 年近く前のことで記憶も定かではありませんので当時のデーターが見つかるかな？とネットを検索してみると、両者ともネット上で検索できました。

高周波コイルは S シリーズの S-B 型、IFT は T-21 型があてはまります。両者とも、TORIO Technical Data Sheet から転載されており、それぞれ No.17, No.H81-124 でした。今時、こんな古いデータが見られるなんてネットの威力はすごいものがあります。

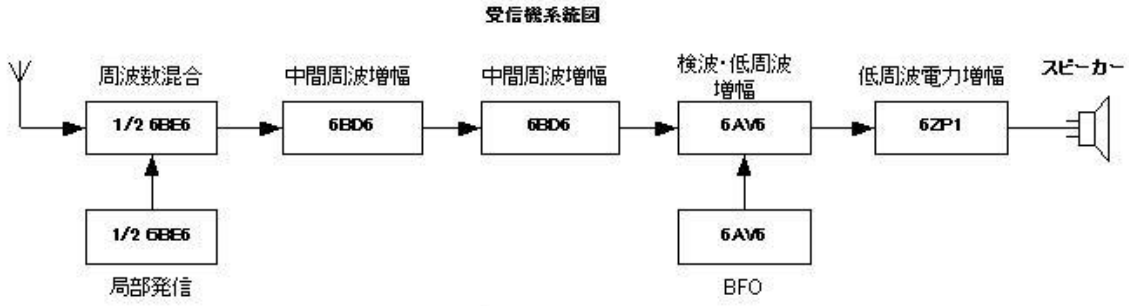
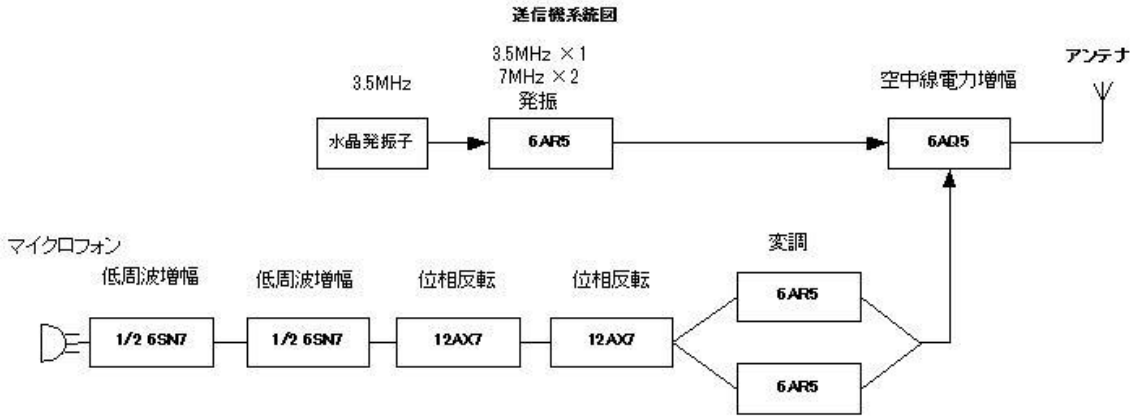


図 3 受信機系統図



4 送信機系図統図

送信機はすべてミニチュア管です。高周波コイルは自作出来ました。系統図から見ると変調回路は、6AR5 のプッシュプルですので、高価な入力、出力トランスが必要です。出力トランスはどうやって調達したのか記憶にありません。6AR5 の入力はトランスを使わず真空管を利用した位相反転式でした。AM の変調回路は、当時「ハイシング変調」と言われる回路がポピュラーで、変調出力段は UY-807 などのシングルで出力トランスは、チョークコイルなどを流用していました。

送信周波数は水晶発振子 FT243 型の 3,520kHz1 個しか入手出来なかったようで、7MHz の場合は 2 逓倍して 7,040kHz になります。

昭和 35 年（1960 年）2 月のこと、一式の書類を添えて申請したのですが、朱記訂正され、返却されてしまいました。当時、空中線電力 10W を希望したのですが、工事設計で出力管

に「6AQ5」を使っていたのですが、これは、5W しか認められない為でした。すぐに訂正して、提出したのですが、ほかに、いろいろあって数回提出、返却が繰り返されましたがその頃には送受信機の制作は完了していました。

その頃、日本アマチュア無線連盟（JARL）において、アマチュア局の開局を容易にするため、また会員を増やす事業の一環か、「保証認定制度」が出来ました。この制度は、申請書は、いったん JARL に提出します。JARL で審査し、ok となれば所轄の電波監理局へ転送され、落成検査が省略され、免許状が送られて来ます。この制度を利用して、昭和 36 年(1961 年）1 月 18 日付けで免許状が交付され、アマチュア無線局 JA5ZZ が誕生した訳です。

アマチュア局準備期間の高校生当時、放送部の活動をしておりました。新たにアマチュア無線にクラブ局の開設が認められるようになりました。本来、アマチュア局は免許人以外、その無線局を運用することが出来ませんが、クラブ局では、無線従事者免許の有資格者であるクラブ構成員であれば運用することができます。

そこで、学校でも開設しようと前出の F 君達と、学校側に働きかけました。学校側は難の問題も無く同意をえられましたが、大変なのは手続きで、申請書類一式に、クラブ局の約款を添えなければならず、JARL のひな形を見本にして作成して、JARL に提出しました。
自分のアマチュア局の免許申請が行ったり来たりしている内にあっさりと高校のアマチュア無線クラブ JA5YAC が免許されました。今は時効でしょう、告白しますと、そのコールサインを使って、自分の無線局から交信していました。現在は JA5YAC は活動していないようです。

中学、高校を通じて自転車で通学しました。片道 3km 程度ですが、雨が降ると、傘をさして自転車を運転するのは、当時の道路は砂利道でとても危険でした。雨の日は、バスを使えばいいのでしょうが、皆が、そう思うのでしょう、1 時間に 2 本程度のバスでは混雑して大変でした。自転車といえば、当時、課税対象でした。納税に対して「鑑札」という認識番号が記載されたアルミの板を後輪泥よけに取り付けていました。この制度は昭和 33 年に廃止されました。私が中学 2 年生のころでした。

２．３ ハムから無線通信士を目指す

高校卒業後、入学した詫間電波高校（後に詫間電波高専を経て現在は香川高専に統合され、詫間キャンバスとなった）の第一別科という、3 級無線通信士コースに入学し、電気通信術をみっちり仕込まれ、その年の 10 月期の国家試験では、予備試験と英語、電気通信術実技試験に合格しました。この学校はその昔、詫間海軍航空隊があったところで、その施設が使われていました。その名残というか、海に面したところに、水上機が離水するための、海への入口の傾斜路がありました。

この学校は、実家からバスを乗り継いで通いました。全国から、生徒が集まっており,寮や、食堂が完備しており、多くの教授は構内にある官舎にすんでおられました。もともと、海軍の施設をそのまま使用したため、施設は充実していたのでしょう。大きなアンテナ鉄塔が目に焼きついています。

この時代には淡い思い出があります。同い年の女性（県立の名門校を卒業）T 子さんが、

同じバスにのって、学校への途中にある銀行へ通っていました。話し合うきっかけは何だったか忘れましたが、お茶しながら話するなどのそんな時代ではなかったのです。学校を卒業して上京し、数年間は文通したり、帰郷したときにデートにさそいました。一度など、夜遅くなって送っていった時、母親が、飛び出してきて、T 子さんを怒鳴りつけました。私は驚いて、私のせいでと、謝ってその場を立ち去りました。帰京して、すぐ、お詫びの手紙を書きました。その後数年で、私が身を引きました。結婚できる経済力がなかったこと、遠距離恋愛だったことが原因でした。T 子さんとの文通の中で彼女が書いた好きな短歌は

『大海の磯もとどろに寄する波
割れて砕けてさけて散るかも 』

源実朝の歌ですが、これが力強くて好きだとのことでした。また、20 歳の誕生日だったと思いますが、オルゴールを送ってくれました。曲は『トロイカ』で、確か 20 年くらい前まで持っていましたが、ぼろぼろになって、どこかへきえてしまいました。

話がそれてしまいましたが、詫間電波高校を卒業するまでの間、モールスが出来るようになったことで、無線機を改造して、学校で使っていた電鍵（モールス信号を発生するキー）を接続して、電信で交信しました。これも電波法違反ですが、もう時効でしょう。この頃に強く印象に残った事がありました。兄の友人で船舶通信士の方が遊びに来ていて、私の背後でなにやら話していました。そのとき、私は神戸港に入港していた、船舶に設置したアマチュア局とヘッドフォンを耳に交信していました。「後ろに、船舶通信士の方が来ています」なんて送信していましたところ、その兄の友人は、私からキーを取り上げ、なにやら交信していました。通常、ヘッドフォンにはキーでモールスをたたくと、ピーピッと連続音で聞こえますが、周りには、カッカッとしか聞こえません。それをモールスとして聞き取るのですから驚きました。

詫間電波高校を卒業後、東京の会社へ就職しました。海運界の不況から、無線通信士の需要が減りつつあった時代、あこがれていた仕事をあきらめることになりました。（それだけで無く、この道の資格を取るための勉強が追いつきそうも無かったからかも知れません）そしてアマチュア無線局も廃局となりました。その後、昭和 53 年(1978 年)に再開する事になります。

３．社会人になって

３．１ 初めて勤めた会社

就職した会社は、秋葉原にあった、T 電気精器です。この会社に就職したのは、船舶通信士の道が閉ざされてしまったように感じ、あきらめて陸上業務に就くことにして、学校に張り出してあった就職情報をみて応募したのでした。面接の折り、将来の技術展望などを問われ、「無線による電力の送電が出来ないか？」と答えた記憶があります。入社したのは、昭和 38 年春のことです。電波高校の同級生のT君といっしょでした。わたしたちは、工業高校を卒業して同期入社した人より１級上になりますので、前年入社した人と同じ年でしたが、その人達はやはり先輩です。ちょっとやりにくさも感じました。

このＴ電気精気は、マイクロウエーブ関係の測定用機器や電磁コイルを使った大きなマグネットを生産していまして、私はマイクロウエーブの仕事を担当しました。大きなマグネットは、何に使うのかは判りませんでしたが、マイクロウエーブの測定用機器は大学とか、どこかの研究室に納められてました。測定用機器は、クライストロンをマウントした発振器、空洞波長計、定在波測定器、方向性結合記などで、10GHz から 30GHz までのもので、機械加工された製品の試験データをとり、成績表に記入して納品されます。

ある日、ある先輩と Ｙシャツの首回りの話になって、「首回りをメジャーで計る時、指一本分の余裕をとるけど、それで、計られた首回りはどのくらい大きくなるか？」と言う話になりました。答えは「大差ない」とのことでした。ちなみに、「地球の赤道の上空 1m 上へ紐をぐるりと巻き付けた時、赤道の長さと、その紐の長さの差はどれくらい？」と言う問いになりました。私も次の様に計算式をたてました。

赤道の半径をｒとすると

$2\pi(r+1)-2\pi r=2\pi$（m）

あれれ！こんなに短いの？この計算、合ってるのかな？と思いつつ、答えると、正解でした。たかだか、6.28mしかありません。直感的に感じる長さより、ず～と短いとは思いませんか？

運転免許は、この会社に入って、時々外回りの仕事もあり、必要になって取得しました。といっても、当時の同期の社員のバイク好きの影響もあって、自動二輪免許を取りました。当時の国産自動二輪車はホンダ CB350 で、府中市にあった、運転免許試験場の隣にあった、教習所で、2 時間ほど練習して、本番に臨んだところ、合格しました。その自動二輪車免許で、会社にあったダイハツ軽四輪トラックで外回りに出ました。その後、やはり普通免許が必要となり、山手線三田駅近くにあった教習所に通い始めました。2、3 回、通ったところ、「直接、受験したら？」と薦められましたので、直接府中免許試験場でトライしたところ、2 回目で合格しました。その夜、無断で、会社のダットサンのライトバンを持ち出して、開通したばかりの首都高速に本町で乗り、鈴ヶ森を往復したことを思いだします。

帰省は当時、東海道新幹線もなかった時代で、寝台列車、急行「瀬戸」とか、特急「富士」がありました。両方とも、東京-宇野間を走っており、四国連絡には便利でした。しかし費用の関係で、夜行急行「よど」を使って大阪で準急の宇野行きに乗り換えました。年末などは混雑がひどく、デッキに座り込むのはいい方で、客席の通路に新聞紙を敷いて横になったりしていました。トイレに立つ女性には迷惑だったかも知れません。その頃に、今では普通となった「コカコーラ」が販売されており、東京駅で列車の発車を待つあいだに、買って飲んだことがありました。その味は、何かの薬みたいな味であまり美味しいとは感じませんでした。

正月休みが終わり、東京へ戻る時、近所に住んでいた同級生の女の子と一緒に電車で帰ろうと、「瀬戸」に乗った時の事、女の子は駅員に抱えられ、窓から車内へ入った事がありました。当然ボックス席に四人が腰掛けているど真ん中でした。それから、通路へ移動したと記憶しています。結局、その同級生の女の子とは東京駅で分かれましたが、余りお話が出来なかったように記憶しています。このＴ電気精器のビルは、つい最近まで、秋葉原で、他の会社のものとなって実在していましたが、今では取り壊されて、跡地は駐車場になっています。

３，２ 生活のために就職

この会社は、一年で退社しました。何が不満で、どうしたかったのか、覚えていないのです。そのとき、お名前は忘れましたが、年配の梱包や出荷担当の方がもう一人の女性社員と3人で送別会を開いてくれた事を覚えています。

退社後、いったん実家に戻り、暫くして、再び上京し、T電気精器と取引のあった、仙台の会社にお世話になったものの、あまりにも東京と環境が激変したため、東京に舞い戻ました。実家には戻らず、新聞広告をみて、池袋のラーメン屋で履歴書を書いて、蒲田にあるM貸衣装店へドライバーとして入店しました。本来なら、実家へ戻って、出直すところでしょうが、そのまま、3年あまり勤めました。そして、いろいろ職をかえ、生活場所を変え現在に至っています。

すこし、封建的なこの呉服業界では、顧客に応対する態度は厳しく戒められおり、一度失敗して、危うくクビになりそうな事もありました。接客する場は畳敷きの広間に毛氈のような敷物が敷かれており、常に正座でした。ここでは、和服の絵柄を見せたり、羽織ってもらうため、タンスから何枚もの打ち掛けや留め袖、訪問着などを出して、気に入った柄を選んでもらうのでした。そんなわけて、お客様が帰られたあとは、広げた着物が、散らかっており、それをたたんでタンスに仕舞わなければならないのです。皆で、協力して一斉にたたむのですが、おかげで、着物の能率的なたたみ方を習得しました。今でも、かなり狭いスペースで、たたむことができるはずです。

その頃、配達や取り下げに使った自動車はトヨタ自動車のパブリカ・ライトバンでした。パブリカは空冷2気筒の約700CCエンジンで、エアコンなどは無く、暖房はエンジンを冷却した空気を車内に取り込むと云う画期的？なものでした。夏は、当然ながら窓全開でした。当時1000ドルカーとして発売され、当時1ドルのレートは360円でしたので、36万円でした。

東京オリンピックが開催されたのはこの頃で、昭和39年のことでした。なんと言っても印象に残っているのは、バレーボールチーム「東洋の魔女」の優勝でした。決勝戦は対ソ連戦で、サイドアウトをくりかえし、日本側にサーブ権が回ってきたとき、放送するアナウンサーは、マッチポイントといわず「金メダルポイント」と放送していました。何度かのサイドアウトの後、あっけなく、タッチアウトか、何かで、あっさりと優勝をものにしました。

M貸衣装店の社長は社員一同に、洋食のテーブルマナー教育を兼ねた夕食会を開いてくれ、その時学んだマナーが、今の私にも生きています。その夕食会が、開かれたのは、「大田区民会館」のレストランでした。その折、講師をされたのはマネージャーだったと思いますが、その講師の話してくださった話が今でも記憶にあります。

それはある著名なかたの主宰したホテルでの宴会の席で、客の一人がフィンガーボウルの水をのんでしまったそうです。すると、主宰者は、咄嗟に自分もフィンガーボウルの水を飲み、客に恥をかかせないようにと配慮したという逸話が残っているということでした。

この会社でも、恋人らしき女性がいました。その女性は優しくて、私に思いを寄せてくれましたし、周りの社員達も見守ってくれていたらしいのですが、私は先の失恋のショックが大きかったのか、私のわがままだったのでしょう、成就しませんでした。

約３年が過ぎた頃、やはり、電気関係の仕事に就きたいと言う思いで、M 貸衣装展にお暇をいただきました。M 貸衣装店側は、長期に勤めてもらえると思っていたらしいのですが、そんないきさつの話をすると、快く承諾して頂けました。退職した次の日は、忘れもしません、雪が降り積もった寒い日だったのを覚えています。どこかのメーカーに就職する事も決まっていない状態で、よくもまあ、あっさりと、就職浪人の道を選んだものでした。就職活動もそこそこに、やることがない日が続き、パチンコに通うこともしばしばでした。お金がなくなれば、大事なテープレコーダー（モールス練習用に母が買ってくれた）を質草に質屋へ持ち込み、そのお金でパチンコにつぎ込むといった、すさんだ生活を送ったのもころころです。一時しのぎの仕事として、自動車で都内の洋装店を回り、裏地やチャック、釦の御用聞きを約半年続ました。この頃、知り合った年上の女性とのロマンスがありますが、この話はあの世への土産話とします。

大切なテープレコーダーは、Sony 製の５インチオープンリールのもので、後出の写真「通信術の練習環境」に写っています。無線通信士を目標にしていた私は、このテープレコーダーには愛着があり、三級無線通信士の資格に合格するまで愛用していました。その後は、誰かに譲ったと記憶しています。

４．メーカーに転職

そんな折、新聞広告で、川崎にある電機メーカー(株)ゼネラルが社員を募集していました。もともと、ラジオ少年でしたし、好きな道へ進みたくなり、浪人したばかりでしたので、早速応募しました。普及し始めていたテレビジョンの修理の仕事部門の募集でしたが、面接時に「通信機部門」があるとわかり、是非そちらの仕事にへと、申し出ました。それならと、応募が受け入れられ、筆記試験（専門と一般常識だったと思う）と再度面接をうけ、運良く採用になりました。筆記試験の専門での試験の設問の一つは、

B 級プッシュプル回路の特徴を述べよ。

だったと思います。

後日、M 貸衣装店へお礼の挨拶に伺った時、店長であった、U さんが話してくれました。(株)ゼネラル側から、採用にあたり、身上調査の問い合わせがあったそうです。そのとき、「彼（私のこと）は電気の道へ進みたいと思いながら、当社でも頑張っていました」と、答えておいたよとのことでした。このＵ店長は小柄なかたでしたが、、社長の右腕とし働いており、私はずいぶん可愛がられました。このときの挨拶の訪問以降、訪れる機会も無く、別件でお店の前を通る事があっても、気後れして店の扉を開けることができませんでした。今では、ずいぶん立派な自社ビルの中で営業しています。社長であったＧ氏のこと、私は顔をはっきりと覚えていますが、道で会っても私の事は分からないでしょう。お元気でいらっしゃればいいのですが・・。いまでも、当時の社内旅行とかの写真が残っていて、見ると当時の事が思いだされます。

(株)ゼネラルは、八欧電機（やおうでんき）から社名変更（昭和 41 年）したばかりの、中堅の家電、通信機メーカーでした。家電製品は白物家電と云われる冷蔵庫、洗濯機などを生産する家電事業部

と、一般的には知られていなかった通信機部門そして電子部品部門がありました。

通信特機部門では、特機部と通信機部に分かれていて、特機部では映像関係とか、輸出用機器など開発、生産されていました。通信機部で生産されるのは、消防用、タクシー用それに警察用などに使われる FM 通信機が主でそれらの調整、検査部門の仕事につきました。入社したての頃は、世の中はまだ、真空管がはびこり（入社試験の試験問題に B 級プッシュプルの問題が出るのですから)、小信号回路にはトランジスタがや一部 IC などが使われてきたころでした。タクシー用の 60MHz 帯の無線機はすべて真空管式のものもあり、図体が大きくて、車両のトランクに格納しなければなりませんでした。それに対し、セミ・トランジスタ式と呼ばれた 400MHz 帯の無線機は送信出力段以外はトランジスターで構成され、大きさも、何とか運転席のシートの下とかに収納出来る大きさになりました。この頃のタクシー用無線機の電波型式は F3（周波数変調方式）で送信出力は 4W でした。送信終段の真空管は 6939 と言う双ビーム管で、その出力が 4W だったということで、フルトランジスタ化（全固体化という言い方で表現された)後もタクシー用無線機の規定送信電力は、暫くは 4W に定められていました。

全トランジスタ化された 4W の無線機が登場しました。半導体メーカから発売された送信出力用トランジスタはまだ 150MHz 帯まででしたので、150MHz 帯で 8～10W 位を得て、バラクターダイオドを使用して 3 逓倍して 450MHz を得る方法でした。これは 450MHz に逓倍されていてもその中の高調波などを取り除くため、フイルターが必要で、この調整がやっかいだったことを覚えています。

４．１ 万国博覧会

1970 年（昭和 45 年)、入社して 3 年目の年に、日本万国博覧会が大阪で開かれました。その年、納入した無線機の不具合が発覚し、その対策の為に、入社したばかりの若手社員 2 名を引き連れて、大阪・神戸へ出張しました。私だって、入社して 3 年目で、若手でしたが、中途入社なので、年は食っていました。そのときは、昭和 39 年に開通した「東海道新幹線」で参りました。ちょっと重い測定器を新人 2 名に持たせて、私は自分のカバンのみで、東京駅から一路、大阪営業所に向かいました。後になって、二人から嫌みをいわれました。「重い荷物を持たされてたいへんだった」と。

写真 4 万博のシンボル
太陽の塔

仕事が終わり、休みをもらって、一日だけ万博見物をさせてもらいました。あまりにも,前のことで、印象に残ったことと云えば、「太陽の塔」とアポロ 11 号が持ち帰った「月の石」を展示したパビリオンの行列の長さで、並ぶことをやめ、比較的すいていた日本電信電話公社のパビリオンへ入り、クロスバ交換機のリレーを動作させ、開閉動作する接点の開閉音がリズミカルな音を発生させていたくらいです。

出張での仕事が終わって、ご苦労さんの食事会を、その当時の大阪・神戸営業所所長の T さんが開いてくれ、馳走になりました。引き連れて行った若手社員の飲むこと、食べること、T 所長も驚いていました。その T さんこそ、後に転職することになった会社、E 社の社長です。それにしても連れていった若手社員は当時はまだ未成年だったかも。

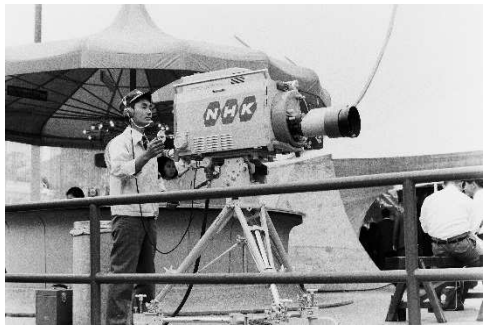


写真 5 NHK の TV カメラ

４．２ 第三級無線通信士の資格をとる

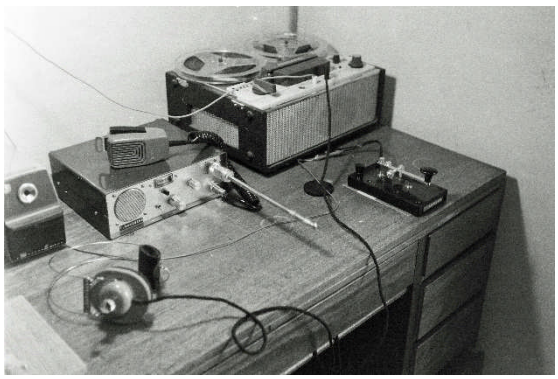


写真 6 通信術の練習環境

昭和 44 年、詫間電波の在学中に合格していた、三級無線通信士の予備試験（無線工学の基礎、英語）の有効期限、10 年があと 2 年で満了となることに気がつき、資格を取っておこうと受験勉強を始めました。国家試験は予備試験と本試験に分かれており、予備試験は合格すれば、10 年間有効でその有効期間中に本試験に合格すれば良いのです。また、本試験は、科目合格が認められており、学科（無線工学、法規）は 3 年間、電気通信術（実技）は 3 年間有効でその期間内にすべて合格すれば資格を得ることが出来ます。私の取得した『第三級無線通信士』は資格制度が変更され、現在の『第三級総合無線通信士』にあたります。

写真 7 縦振り電鍵

まず、学科試験合格を狙います。三級の場合、学科は、無線工学、法規（電波法および国際電気通信条約）、英語（当時は予備試験に含まれており、免除であったと記憶している）の 3 科目で、すべてに合格点をとらないと、学科合格となりません。仕事を終え、アパートへ戻り、過去に出た問題を中心に学習しました。受験申請は昭和 44 年の 9 月期で、その結果、無線工学、法規とも合格し、後は「電気通信術」の実技試験のみです。

目標を、翌年の昭和 45 年 9 月期に合わせ、毎日の練習を開始しました。和文 70 字/分、欧文コード 80 字/分、欧文プレーン 100 字/分の送受信を 3 分
間行います。これらは 80 点以上で合格です。欧文コードとは、暗号文で 5 文字ずつ組み合わされたアルファベットの羅列で、欧文プレーンは通常の平文です。和文は電報型式で、当

時の船舶で送受信に使われたもの同じ型式でした。試験と同じ条件で練習するので電報形式の電報文例集と受信紙が必要で、それは電気通信術教材として、電波振興会（現情報通信振興会）から購入して使っていました。練習は毎日 30 分～1 時間行うことを基本にして、会社が終わると、飲み会などは極力断り、アパートへ帰って、まず練習でした。電報文例集の電文を送信し、それをテープレコーダーに録音しました。それを再生し、受信紙に書きとる練習の繰り返しでした。それ終えてから、TV（その当時は勿論、白黒）を見たり、のみに行ったりで、こんな生活が 1 年間もよく続けられたものだと、我ながら感心しております。その成果で合格することができました。実技試験（手送り送信）が終わり、担当官に『中野か？』と聞かれたことを思い出します。『中野』と言えばその昔、スパイ学校があったと聞いていますが、決してそういう意味で聴いたのではありません。試験会場は上野にある「千代田テレビ技術学校」でしたが、当時、中野に優秀な通信士を教育する学校（中野高等無線電信学校だと思う）があり、そこの卒業生かと訪ねられた訳で、私は「独学ですと答えました。素養は詫間電波で鍛えられたので、ウソをついたことになります。

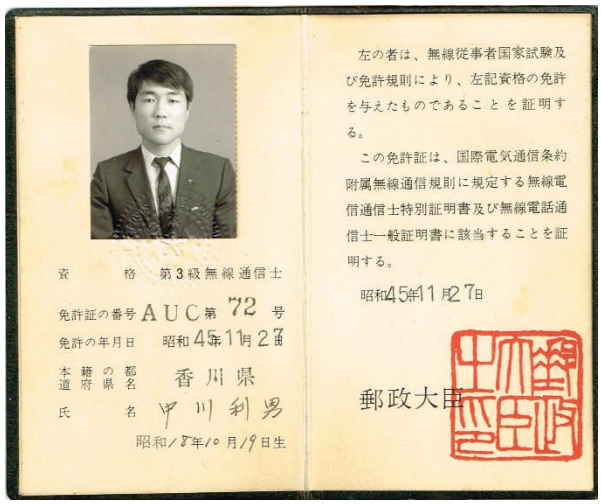
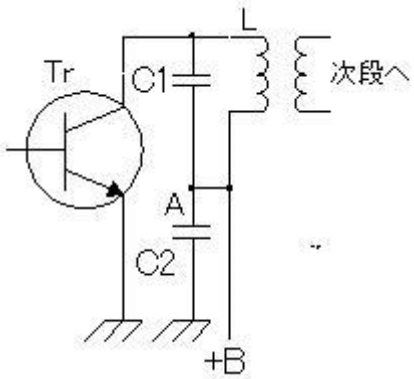


写真 8 第三級無線通信士

合格通知を受け取った時、こんなにがんばったのだから、合格して当たり前と云う気持ちがあり、特に感動も無かったことを覚えています。ただ、少しうれしかっただけでした。第三級無線通信士の免許証はその年の 11 月に受け取りました。

4．3 忘れられない事柄

生産されている無線機も、タクシー用、消防用、時には輸出用の CB バンドと呼ばれる、市民バンド無線機もありました。これについて、忘れられないことがありました。組み上がった無線機を測定器を使用して、受信感度や送信出力を調整します。その中に、どうしても、送信出力が得られないものがありました。熟練の経験者がトラブル解決を試みるのですが、一行に解決しません。2，3 日経った日、私が挑戦してみました。ヤンガーステージ（周波数の、逓倍、増幅を繰り返す段をそう呼ぶ）から真空管電圧計を使って交流電圧をプリント基板の半田付け面で計って行き、どこで、異常があるか、探して行きました。そうすると、あるところで、信号電圧の異常な箇所を見つけたのです。



図が概略の接続図です。L と C1 で同調をとっています。真空管電圧計で Tr のベース側には小さな信号電圧が認められていますがコレクタ側に増幅されていない程度の信号電圧しか現れていません。A 点に電圧計を当ててみると、信号電圧が認められました。ここは、C2 でアースにバイパスされており、アースと同じ電位で交流が現れてはいけない点です。そこで、部品面側で爪で C2 をさわってみるとグラウグラしており、C1 の片側がポロッとはずれてきました。世に云う「芋半田付け」でちゃんと半田付けされていませんでした。A 点の半田付けを確実に行うと正常に動作するようになりました。そのときは、拍手喝采で、「神様だ！」と言われ、鼻高々でした。

４．４ 写真を趣味に

その頃だったと思う。会社の後輩に当たる、E 君と仲良くなってか、あるいは何かのきっかけで写真の興味を持つようになり、思いついたらたまらなくカメラが欲しくなり、カメラ屋へ行きました。当時、私にとってカメラの最高峰は Nikon F で、周りの人も、E 君も勿論そうでした。そのカメラ店は会社の生協に参加している店でカメラは Nikon は、品薄だったと思いますが、CANON、PENTAX などがずらりと並んでいました。が、しかし、何せ、安月給の私にとって、Nikon F には手が出ず、とにかく一眼レフをと思い、手頃な値段の「ペトリ」を月賦で購入してしまいました。

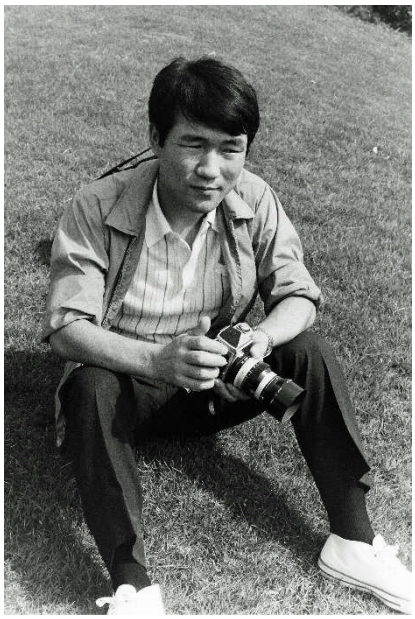


写真 9 向ヶ丘公園撮影会にて

このカメラはシャッターボタンに特徴があり、カメラ全面のレンズの横に斜めに押し込むように配置されていて、シャッター時のぶれが少なくなるようにとの触れ込みだったような気がします。そのカメラの詳しい仕様等はまったく記憶に無く、しばらくは喜んで使っていましたが、やはり Nikon が欲しい！・・・でした。

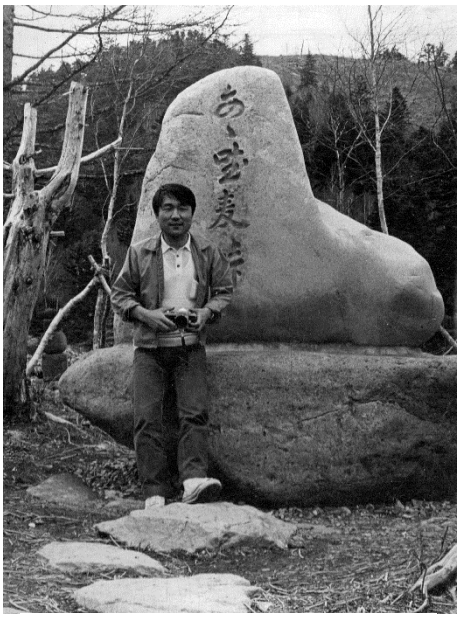


写真 10 野麦峠にて

そんな Nikon F でしたが、購入した年月や、店、それに金額は全く記憶にありません。買ったのは、支給されたボーナスを注ぎこんでのことだったでしょう。当時の東急大井町線（後に田園都市線となったが、渋谷〜長津田間が開通し、現在は又、大井町線に戻った）の二子玉川（ふたこたまがわ）駅近くの高島屋ショッピングセンターに開店した、カメラのキムラ（だったと思う）に、写真材料などを求めて、よく行ったものでした。購入した

Nikon F は標準レンズ 50mm f 1.4 のキットでした。露出計は内蔵していなく、オートフォーカスも一般化していない頃で、標準のアイレベルファインダーを高価な CDS 露出計を内蔵したフォトミックファインダーに取り替えることにより、手動で、シャッター速度、絞りを調整して露出指示に針を遭わせることで露出を決める事ができました。

その後は撮影にたびたび出かけるようになりました。モノクローム撮影がほとんどで、自分のアパートの部屋を暗幕を張って暗室にしつらえ、焼き付け、プリント用具 1 式を準備して、自分で DPE をやった物でした。フィルムも、コダックの TRY-X400 の 100 フィート巻きを購入して、写真屋さんで頂いた使わなくなったパトローネに 36 コマ分を巻き、撮影に使っていました。撮影対象は、美女も勿論ですが、やはり「リアリズム写真」にあこがれていました。

後に、Nikon F をもう一台と、望遠 Zoom、Wide の 24mm もそろえ、社会性のある題材を求めて、積極的に活動しました。会社には写真の同好会があり、撮影会や撮影旅行、そして社内の運動会などの催しなどにも、参加し、社内の展覧会にも出品しました。個人でもテーマを決めてあちらこちらを歩き、写真を撮り歩きました。

４．５ 第五福竜丸

そんなとき、ビキニ環礁で米国の水爆実験で被爆した、第五福竜丸が、夢の島に放置され、余生を送っていることをしりました。昭和 45 年の年末でした。寒いなか、夢の島へ向かいました。なぜ、この船に執着したかと云いますと、私はその昔、船舶通信士になりたかったこと、そして、なりより通信長だった久保山愛吉さんが、被爆して亡くなったことでした。なぜ、こんなゴミだらけの夢の島に放置されているんだろうと、悲しい思いをしながら、撮影したことを覚えています。後に、保存館が出来、そこに永久保存されていることをしりました。

写真 11 昭和 40 年頃の第五福竜丸

平成 26 年 3 月 1 日、第五福竜丸が、被爆して丁度 60 周年を迎えたことを、ニュースで知りました。早速、ビデオカメラをもって夢の島、第五福竜丸展示館へゆきました。 紛れもなく、40 年前に撮影した第五福竜丸が、そこにありました。当時は整備されていなくゴミの中でしたが、当時の係留されていたあたりに保存館が建てられていました。館内には、第五福竜丸の経緯が詳しく展示されています。

写真 12 第五福竜丸展示館

ニューヨークへの駐在の話が持ち上がりま

した。それは受けるとしましたが、問題は、当時、Nikon 製品は米国に持ち込める数は、自己使用でも 1 台限りでした。考えたあげく、前出の E 君にボディ 1 台を、泣く泣く引き取ってもらいました。

5．NY 事務所勤務

生まれて初めて、飛行機に乗ることになたのは、1971 年(昭和 46 年）のことでした。それも初めての海外渡航で New York 行きの JAL002 便だったと記憶しています。なぜ、私が選ばれたのかわかりませんが、主な仕事は、現地の取引会社のサポートで、時には後で述べる、輸出品の QC 関係での開梱、再検査でした。もちろん、英語堪能どころではありませんので、不安もいっぱいでした。

5．1 初めての渡航

羽田を離陸したのは午後 5 時頃だったと記憶しています。その後、機内食を食べ、一眠りして目覚めたとき、夜が明けていて、窓から見える雲海がとてもきれいで、その上を歩けそうな感じでした。日付変更線を越え、DC8-62 型機はまずサンフランシスコに到着し、トランジットルームで、ニューヨークへの出発を待っていました。機に戻って、席へつくと、前席シートのポケットにしまっておいた日付変更線越えの記念カードがありません。やはり持って降りるべきだったな？と後悔しました。ニューヨークまでの約 5 時間、上空からアメリカ大陸を眺めていると、砂漠や山脈、グランドキャニオンがジオラマの様に見えていました。サンフランシスコからニューヨークまで飛行機で 5 時間もかかるこんな大きな国と戦って、勝てるわけないな？と妙な納得をしてしまいました。ここで、機内食にはしばらくお目にかかれないだろう、日本食を出してくれました。

写真 13 初めての海外 JAL002 便

ニューヨーク上空で、どんどん高度を下げて行くのですが、それが意外と気持ち悪かったのを覚えています。サービスで、マンハッタン島や自由の女神上空を旋回してくれたようで、無事、J・F ケネディ空港に到着しました。空港には、会社の上司 Fr 氏が迎えに来てくれていて、タクシーで Queens（long Island）の契約してくれていたアパートに入りました。次の日、Fr さんの都合で、ワシントン DC で開かれていた、エキシビション・ショーを、何が何だかわからないまま、見学し、ニューヨークへは電車で帰ってきました。

このアパートには、ルームメイトがいました。もちろん同じ会社の人ですが、家電事業部の TV 開発関係の担当者でした。私が赴任するまではホテル住まいだったようですが、私と一緒にアパート暮らしをするようになり、部屋代も折半でした。仕事上での行動は全く別々

でしたが、休みには、マンハッタンへ遊びに行ったり、ボーリングをしたりしたものでした。

５．２ 米国での仕事

私の毎日の仕事は米国のディストリビュータである U 社へ通い、持込まれた製品を修理する事がほとんどで、社員の Mr. Clark と席を並べていました。U 社は日本で云うところの工業団地にあり、昼にはハンバーガーやホットドック、飲み物をいっぱい積んだフードトラックがやって来るので、それを利用したり、近くのレストランを利用していました。ハンバーガーなどばかりで、食べ物はやはり、日本のそばとかラーメンが恋しかったですね？通勤はこれまた、不自由で、アメリカ人なら、自家用車ですが、我らジャパニーズは鉄道と駅から団地まではタクシーしかありませんでした。

写真 14 Hicksville 駅

まず、アパートをでて、近くの地下鉄の Elmhurst Av.（エルムハースト・アベニュー）駅から Jamaica（ジャマイカ）駅まで行き、そこから Long Island（ロングアイランド） 鉄道に乗り換えて Hicksville（ヒックスビル）まで行き、乗り合いタクシーで West Mall（ウエストモール）というところで下ろしてもらいました。
タクシー料金は、日本の様に走行距離では無く、区域で決まっていまして、一人あたり 2 ドルくらいだったかな？それとチップ 25 セントでした。交通費は会社持ちなので、痛手はありませんが、帰りも事務員の女性にタクシーを呼んでもらっていました。

アメリカの列車事情は日本とは違い、いい加減で、こんな事もありました。Jamaica 駅ホームで列車を待っていると、ある男性が「電車はこのホームにくるのか？」と英語で訪ねてきました。「I don't Know！」と答えると、怪訝そうな顔をして去って行きました。事実、反対側のホームに入ってくることもしばしばでした。その男性は常に列車をつかっていなかったのでしょう。

今度は私自身の語学力の話です。ホームに入ってきた列車が目的の Hicksville に行くかどうか、車掌とか駅員に確認したかったのですが、どう聞けば良いのか悩みました。「Dose this train goes to Hicksville？」でいいのかな？なんて考えましたが、面倒なので、駅員に切符をみせて、「OK?」とやったら、「Yes」と返ってきて安心して列車に乗り込みました。他のアメリカ人が、車掌に、ただ単に列車を指差し 「Hicksville?」と聞いていましたが、それが正解でしょうね？

驚きました。Google map で検索すると、その経路がたどれまして、私の記憶が正しかった事がわかりました。

U 社には、女性事務員が数名いて、その中の 3 人が同じ名前のメアリーでした。と言っても、私にそう聞こえただけで、一人は本当に Mary、もう一人は Marion で最後の人は

Mari Ann でした。

クリスマスには、U 社で Luncheon Party がひらかれ、招かれてご馳走になりました。そのとき、なぜか、フランス系の女性スタッフにキスをされました。そのときの嬉しそうな顔をした写真がのこっています。当時は私も可愛いかったのでしょうか？

写真 15 キスされちゃった

恐ろしい事件が駐在中に発生しました。日本人が、銃で狙撃されたのです。それも、我が社の Manhattan にあった NY 事務所近くででした。今となっては当時の記憶も定かで無いのですが、そのニュースが日本で流れた後、日本の知り合いや友人から「おまえ、大丈夫か？」の手紙をもらいました。私の場合、事務所に顔を出すのは週 1、2 回でマンハッタン地区ではあまりうろうろしませんでした。休みの日は、時にはセントラルパークや、エンパイヤーステートビルにゆきました。

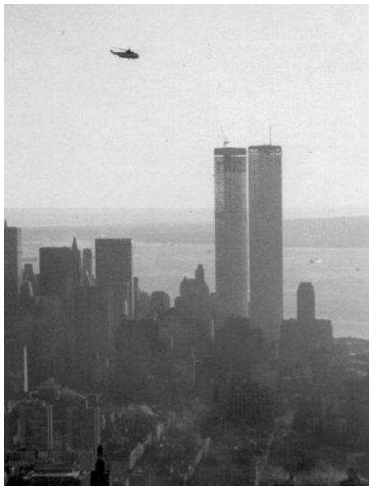


写真 16 貿易センタービル

エンパイヤーステートビルといえば、その屋上から、ダウンタウン方面を見ると、貿易センタービルが建設中でした。その写真がのこっています。ご存じの様に 2001 年 9 月 11 日に発生したアメリカ同時多発テロで犠牲になったビルです。

5．3 シカゴでの話

シカゴは冬はとても寒いところですが、夏に、開梱の仕事が入って、一人で出かけました。我が社に他の部門から来ていた人や、商社の担当達と現地で合流しました。滞在したのは、ミシガン湖のほとりにあるモーテルで、そこから、B&H 社の工場に出向きました。交通機関は電車（地下鉄かな？）とバスでした。このシカゴの運賃システムは便利で、トランスファができました。つまり電車の切符を買うと、バスにそのまま乗り継ぐ事が出来、その逆も OK だったのです。つまり、都営地下鉄と都バス相互間で乗り継ぎが自由になったようなものでした。

写真 17　シカゴ ミシガン湖畔にて

開梱作業は、QC でアウトになった製品を開梱、調整後、再検査しなければいけません。その作業を、数千台の製品すべてについて実施しなければなりません。
QC とは、検査で不良品を排除しようとする手法ですが、私の現役時代はその運動が盛んでした。現在はどうでしょうか？

本来、製品は不良品はゼロが理想ですが、工程平均として十分だと考えられる不良率の上限や、合格することのできる最低限の品質を指す水準を AQL（Acceptable Quality Level）と称しています。この考えはアメリカの MIL 規格(Military Standard)が元になっており、後に JIS や ISO に取り入れられ、現在は ANSI 規格に引き継がれています。実際の運用はサンプル数の内、何%の不良を許容するか？とし、AQL=何％とか表現します。サンプル数 100 を抜き取り検査し不良品が 1 個を許容する場合は AQL＝1％といいます。しかしその不良内容がメジャー（重欠陥）なものかマイナー（軽欠陥)なものかによっても変わってきます。で、我々の製品は確かマイナーが 1%、だったと記憶しています。それでも契約上、そこで開梱、全数検査し、不良品は調整、修理を余儀なくされましたが、それ以外に欠陥は見つからなかったと記憶しています。

納入先の QC 管理のボスの話を聞いたことがありました。QC に関して、「我々は輸入し、しっかり QC で管理すれば良いのだ」と言ったことが印象的でした。そんな考え方が、アメリカ人経営者に多かったかもしれませんが、デトロイトの自動車工業が不景気になり、最近になって、「物作りの基本」を日本から学んで、盛り返したという話を耳にした様な気がします。

開梱作業の休憩時間に、イタリヤ系の社員と話した事を思い出します。その彼が、新聞（もちろん英字新聞ですが）を持ってきて、「これを読んでみろ」といいました。私はすらすらでもないですが、読んでみると、「おまえ達は英語を読めるのに、なぜ話せないんだ？」と不審そうでした。加えて「日本はこの国（アメリカ）と戦争した。だが、いまおまえ達はこの国にいる」と不思議そうでした。

この出張に、中国系アメリカ人とちょっと仲良くなりました。名前を「ラン・チェーン」といいました。正確な英語スペルや名前の漢字はわかりません。車で送ってくれた時など、道行くアメリカ人女性の胸を見て「Elbow」と言いながら両肘を胸の前に突き出すのです。それをみて、私も「Yes！」といって同じように肘を前に突き出しました。そして二人で大笑いをしました。また彼は私が何気なく言った「カセットレコーダが欲しい」の言葉に応じて、1 台手渡してくれました。それはもちろん新品では無く、その辺に転がっていたものでしょう、駐在が終わり帰国するときの荷物に積み混みました。

５．４ バーモント州へ行く

駐在中はいろいろありました。上司だった Fr 氏は奥さんが米国人ですのですでに永住権を持っていました。私が日本から来て、いろいろ不自由で、寂しいだろうとスケートにつれていってくれたし、なにより、氏の奥方 B 夫人の実家が Vermont 州（細かな所在地は不明）にあり、夫妻で招待してくれました。カナダ国境にに近いので、かなりの距離がありましたが、Fr 氏の自家用車で行きました。とても静かなところで、大きな湖がありました。

B 夫人の家族からも歓迎されましたし、翌朝は子供達が、付近を案内してくれた風景、湖に浮かんだ『ハウスボート』や『製粉所』そして、『渓谷』などの景色が思い出されます。メープルの木が多くメープルシロップがとれるとの話もきかされました。この Vermont 旅行の写真が残っていました。

写真 18 バーモント州にて

ニューヨークへ帰る時、B 夫人は家族との別れが悲しくて、泣いていましたっけ。帰りの車の中で、B 夫人は涙ながらに Fr 氏に感謝の言葉「私を連れてきてくれてありがとう」と行っていました。この B 夫人の言葉には感激しました。日本人もこの辺は見習う必要があると思った次第です。

5，5 ライカを買って

また、仲良くなった、貿易会社の担当とマンハッタンを歩いていて、カメラ屋を覗いたとき、「ミノックス」というスパイカメラが、日本よりずいぶん安いので、つい買ってしまったのです。後に買ったライカ M4 とともに、国内に持ち込む時の税金が課せられるかどうか不安でしたが、ええい!っままよと使い続けました。

写真 19　ライカＭ４

私の渡航は当時、B 1 と呼ばれるビザで、有効期限が 6 ヶ月でした。入国が 1971 年 7 月 1 日でしたので、12 月には期限切れ目前でした。この場合、たとえばカナダに出国してナイヤガラの滝でも見物して、再入国すれば、期限が 6 ヶ月伸びることになるのですが、それを許可してくれるわけでなく、移民局へいって、手続きをしてこいと云われました。語学も不安のまま、仕方なく一人で行きました。受付で、持っている限りの英単語をならべて説明しました。とにかく、給料は日本から送られてくるし、米国企業では働いていない。期限延長してくれと申し出ました。その後、ずいぶん待たされ、担当者が数枚の書類を持って現れ、パスポートに延長のスタンプを押してくれました。何が何だか、判らず仕舞でした。でも無事、滞在延長が決まりましたが、現地の上司たちもいい加減な物だと、思いました。今になって、考えると、期限切れで、帰国させても構わないと思っていたのかもしれません。

５．６ テレアビブ空港乱射事件

帰国する前、日本赤軍がテレアビブ郊外にある、ロッド国際空港において http://ja.wikipedia.org/wiki/Vz_58 自動小銃を旅客ターミナル内の乗降客や空港内の警備隊に向けて無差別乱射する事件が勃発しました。この無差別乱射により、乗降客を中心に 26 人が殺害され、73 人が重軽傷を負ったのでした。

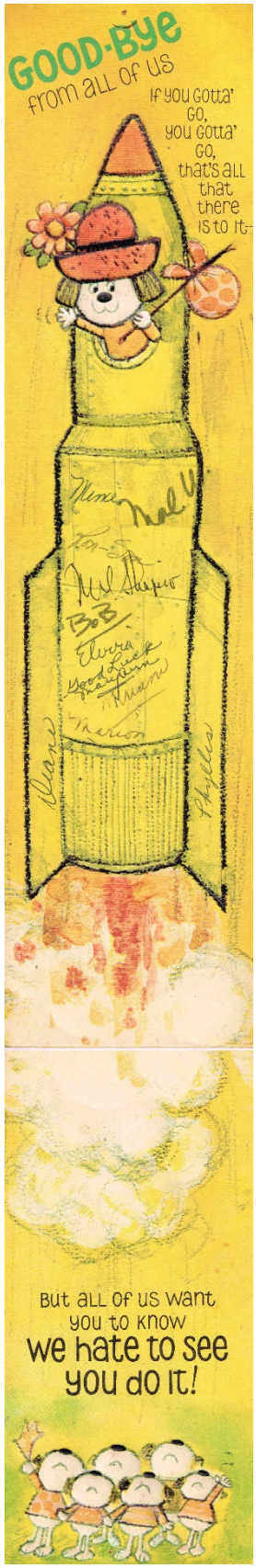
その頃は、すっかり環境になれて、住んでいたアパートの隣の家に住むスペイン系の少女と、仕事から帰って来た時などに逢うと、話をするようになりました。スペイン系でしたので、スペイン語の１，２，３などと発音したりして話しているとき、少女は近くにいた母親に「この人、スペイン語が出来るよ」なんて言っていました。母親も笑顔でうなずいていましたが、この事件が報道された翌日、その少女と話していると、母親が出てきて、少女を急いで家へ連れて帰りました。また、会社の営業マンが出張で、航空機に搭乗するとき、乗客からの視線が冷たかったと話していました。

日本でも連合赤軍が長野県の浅間山荘に立てこもった事件がありましたが、これもこの年の２月の事でした。この時代、日本ではイデオロギー闘争とでも云うべきでしょうか、殺戮や暴力事件が多かった様に思います。
http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%86%E3%83%AB%E3%82%A2%E3%83%93%E3%83%96%E7%A9%BA%E6%B8%AF%E4%B9%B1%E5%B0%84%E4%BA%8B%E4%BB%B6 -cite_note-takayama-1

５．７ 帰国へ

赴任から、ちょうど１年、1972 年の６月末、日本に帰ることになって、U 社の皆さんに挨拶に行きました。”Don't you like New York?”と聞かれ、思わず”No"と答えてしまいました。はっと気がついた時はすでに遅く、やはり日本人だなぁと思った次第。でも日本のことをよく知ってくれている人たちだから、大丈夫だと信じていました。そして、皆さんがサインしてくれた、記念のカードをわたしてくれました。

帰途は LaGuardia 空港から出発、西海岸の Los Angeles へ飛び立ちました。航空券は往復を手配されており、復路は open にしてありました。駐在終了の Vacation が認められ、New York～Los Angeles～San Francisco ～Honolulu～Tokyo と経路を変えてもらいました。



Loss Angeles では、モーテルに一泊し、駐在中に仲良くなったＫ氏夫妻とディズニーランドを楽しみました。まだ、東京ディズニーランドが開園してなかった頃です。印象に残ったのは、"Small World" で、やはり一日では足りないですが、そこは我慢して、ご夫妻の家へ招かれ、夕食をご馳走になりました。そこで悪のりをして、酒をぐいぐいいってしまいました。翌日空路で San Francisco へ向かったのですが、前夜の酒がたたり、観光バスに乗ったものの、ほとんど寝ていました。坂の多い San Francisco のケーブルカーや、Golden Gate Bridge、Fisherman's Wharf を見て回りましたが、その翌朝まで酒が抜けなかったのでした。

画 1 Goobye カード

翌朝、United Air line で Honolulu へ向かいました。それは、アメリカ土産の酒、たばこを買うためで、ほかの土産は New York の日本語が通じる土産店で仕入れておりました。

羽田空港へは、日本時間の７月３日の昼頃でした。会社の上司（有名なタレントの弟さん）一人が迎えに来てくれていました。羽田に降り立った時は、やはり日本は蒸し暑さが感じられました。そして、借りていたアパートへ戻ったとき、ドアや天井の低さに圧迫されてしまいました。

帰国後は、駅や電車の中で、周りから日本語が聞こえてくるのが、とても不思議に感じました。一年間でしたが、英語や、スペイン語などが周りから聞こえてくるのが当たり前だったからでしょう。それから、TV ドラマをみていて、俳優が話す台詞が、とてもわざとらしく聞こえて仕方なかったのでした。

写真 20 サンフランシスコのケーブルカー

６．帰国後

元の職場に復帰しました。当面は英語の癖が抜けなくて、苦労しました。たった一年間でしたので、そんなに話せるようにはなっていなかったのですが、やはり、日常のアメリカでの生活感が抜けなかったのでしょう。周りの人からは、「変なやつ」と思われたことでしょう。駐在中に購入したカメラの顛末ですが、ミノックス、ライカ M4 は、持ち出した Nikon F とともにカメラバッグのなかへしまったまま通関しました。酒、たばこを制限枠以上に持ち込んだので、当然納税しました。

米国から持ち帰ったカメラのうち、ミノックスは小型カメラの収集していた写真部の先輩に、買った値段を日本円に換算した金額で譲り、とてもよろこばれました。ライカは当時住んでいた大井町の写真屋さんが欲しいということで、これも先方の言い値でゆずりました。ちなみに、赴任するときはドルとの為替レートは固定で 360 円でしたが、駐在中に変動制になりました。駐在費は、ドルだてで支払われていましたので、受け取り額は変更なしでした。

帰国したのち、「写真なんて被写体を追いかけ、作品を完成しても所詮、自己満足にすぎない」と思い始め、積極的な撮影旅行や、テーマを設けた撮影などにかける時間が少なくなり、段々とカメラを手にする機会が少なくなりました。後に、デジタルカメラが登場し、入手するまでは、記念写真の為のオートフォーカスのカメラを使うのみでした。

６．１ デジタル化の波

1976 年（昭和 51 年）8 月、NEC がマイクロ・コンピュータ(パソコンのいわば心臓部の IC の事）としてのその性能がどの程度のもであるかを評価してもらうことを目的とした「マイコン・キット TK-80」が売り出されました。本来は技術者向けの評価キットで、売れても 2000 台程度だろうと予想したそうですが、その予想は見事に外れ、6 万台もうれたそうで、販売価格は、88,500 円でした。

私は当時のマイクロコンピュータには余り興味がなく、むしろデジタル化への道に興味を覚えました。最初の遭遇は、TTL と呼ばれた、テキサス・インスツルメント社の IC でした。それまでは、制御ロジックはトランジスタやダイオードもしくはリレーで組まれ、複雑な制御回路は無かったように思います。何より、扱う 2 進数が理解しがたかったようで、また、AND、OR などのロジックを理解しようとしなかった者が多かったように思います。私はなんだかとても興味が湧いてきてそのデジタル回路と向き合うようになりました。丁度、入社以来担当してきた、製造部門の「調整検査係」から「設計係」へ移動になったころでした。

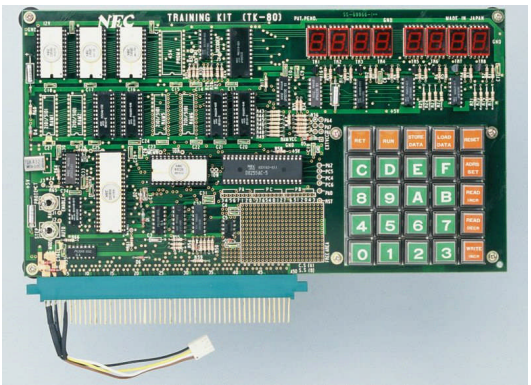


写真 21 NEC TK-80 (ascii.jp より転載)

設計係では、無線機を制御する装置の開発・設計が主で、デジタル IC として、DTL(Diode Gate Transistor Logic) や TTL(Transistor Gate Transistor Logic)のゲート IC、カウンタ

ーなどが豊富に出回ってきて、設計もやりやすくなってきましたが、それなりに問題も発生してきました。 TTL は約 50MHz の高速動作で、電源のノイズや、ヒゲと呼ばれる、回路で発生する、周期の短いパルスで誤動作し、その要因を見つけるのに一苦労したり、高速動作故の消費電流が大きいことで、後に開発された、消費電流の少ない、CMOS(Complementary Metal Oxide Semiconductor)型ロジック IC に替えてしまいました。その技術を応用した製品の一つは、無線による遠隔制御で、電波の届く範囲の広い、山頂などに基地無線局を置き、本部の無線局から無線で遠隔制御を行います。当時から、マイクロ波を使った多重無線設備がありましたが、高機能で、私たちの顧客のニーズには合わなかったのです。

本部と基地無線局との中継回線は、音声通信と、遠隔制御回線を併用していました。従って、制御信号に対して結果を通知するアンサー信号の処理などを、複雑なロジックを組んで行っていました。ロジック設計にも、漏れや誤りがあり、組み立て、調整、検査に何度も徹夜作業を余儀なくされました。次の技術はマイクロプロセッサによるコンピュータ制御が導入されてきます。

６．２ パソコンとの出会い

パーソナル・コンピューターとの出会いは、昭和 58 年頃のことでした。そのまえに、富士通から発売された OASYS というかなり大きなワードプロセッサ（以下ワープロと表現します）が導入されました。この OASYS は、グリーンディスプレイ、8 インチ・フロッピードライブ２基をそなえ、日本語変換システムは OAK と呼ばれる、神田泰典氏の開発したシステムを搭載していました。これにより、業務上必要な「取扱説明書」「販促資料」などの作成、管理を行え、ずいぶん便利になりました。それまでは、原稿を書き、文書課へ依頼すれば、数日後には出来あがってきたものでしたが、ワープロを使って、自分でやるものですから、返って手間がかかるようになったかもしれません。でも、ひな形となる文書を利用して、一部訂正しながら、新たに作成する方法が採れるので、便利と云えば便利でした。

販促資料といえば、市町村防災行政無線システムや消防通信システムなどに関する資料作成が多かったようでした。その中で、重要なファクターとして、回線設計が必要でした。「回線設計」は想定した基地無線局と、対中継局、対移動局との間にどれくらいの良好な通信品質が得られるかを算出するものでした。これを国土地理院発行の白地図上に設計する２点間を直線で結び、地図上の等高線をプロットし、それを垂直面から見たプロフィールを作成してゆきます。

そのプロフィールは丘や山を超えたりしながら、電波が伝搬して行く様子がうかがえます。この２点間の距離における損失、障害物を越える時の損失を算出し、送信電力やアンテナ特性を加味しながら、得られる電界強度を、電波法に定められた計算式に則り算出します。この作業を、必要な地点の数について算出するのですが、これを電卓で行っていてまして大変な作業量でした。これを当時、導入された沖電気製パーソナルコンピュータ (if800 model50)の「Oki-BASIC」でやってみようというもので、昭和 61 年(1968 年)頃のことでした。

入力項目は、送受信区間距離、使用周波数、空中線電力（送信出力）、送受信アンテナの高さおよび利得、アンテナの利得、回折や遮蔽の損失等を入力し、計算させます。計算完了後、その結果を印刷出力します。これには、かなりの期間がかかりましたが、私にとっては、後に担当するコンピュータソフトを設計（アセンブラ、C 言語にて）するための、いい勉強になりました。

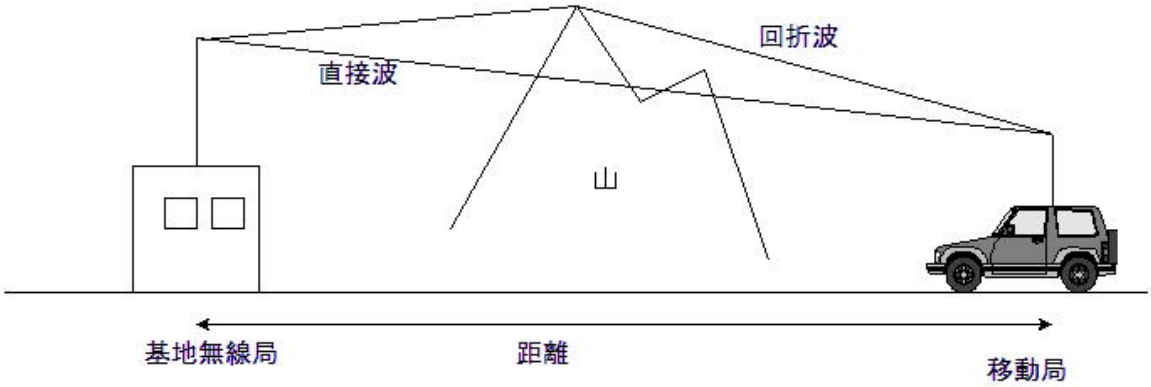


図 5 回線設計のプロフィール図

そう言えば、回線設計でちょっとしたトラブルがあったことを思い出しました。山陰地方の消防署が開設するための無線局の免許申請書に添付する、回線設計書を作成した時の事でした。まだ、コンピューターによる回線設計が出来る前で、手計算で作成、提出したものでした。中国電波監理局（当時）で審査していて、計算値が異常であることを電話で指摘されました。確かに間違っていましたが、それをこっぴどく非難され、若い一担当者の私が平謝りでしたが、上司達の、誰もが知らん顔でした。そんなものだったのですね？

7．スキーとバイク

もう、30 歳近くになって、バイクを買うことになりました。これは会社の後輩に影響されたもので、いろいろと影響されたものだと思います。バイクに限らず、スキーに熱中したのも、彼のせいでした。

7．1 スキー

どちらが先立ったろうか？スキーは、会社のスキー旅行がきっかけでした。雪山の写真でもとるつもりで、スキー用具も持たず、会社が仕立てたスキーバスに乗ったのでした。山へ着いて、みんなが流行のスキーウエアに身を包んで颯爽とゲレンデへ出て行きました。一緒に、カメラを持ってゲレンデに出るには出たのですが、スキーを履かずにゲレンデに立つなんてこんなつまらないものはなかったので、一丁やってみ

写真 22 栂池にて

るかと、貸しスキーを借りてやってみたのです。何とか、なだらかな雪面ですべれても、十分な停止は出来ず、またサイドステップで傾斜を昇るのに苦労したり、プルークボーゲンのマネをして、それなりに愉しんだのでありました。山から戻ってきて、スキー道具一式をそろえたのは言うまでもありません。
それからというもの、一人前のスキーヤーを気取って、夏頃から、次のシーズン用具の展示会や、ウインドーショッピングに出かけたりしたものでした。

この趣味は後まで続きました。息子が幼稚園に通う年頃になって、同じ幼稚園に通う園児を持つ親同士が懇意になって、グループで、北海道へツアーで数回行きました。クラブメッド・サホロで、帯広からバスで約１時間半でリゾート地に到着し、リゾートに入れば滞在中は、すべての費用（リフト・ロープウエイ、スキー-スクール料金などでアルコール飲料は除く）が含まれますので、子供達も楽しく過ごせました。雪質も良く、スキーの腕前が上達したようにさえ思えます。

私の最後となったスキーはガーラ湯沢でした。一人で朝早く出て、東京からガーラ湯沢へ向かいました。スキー場に入ってから、滑り始めたのですが、昼食タイムも、リフトが空いて来たので昼抜きで思う存分滑りました。そのせいで午後３時頃にはへとへとになって引き上げました。

７．２ バイク

バイクは最初、Dax ホンダ 90CC を月賦で購入しました。免許は 19 歳の時、自動二輪免許を取得しておりました。当時は、普通自動車免許があれば、排気量 250cc までの、今で言う小型二輪免許になるのかな？が含まれていました。その Dax ホンダは高速道路も走れず、中途半端で、不満になりました。後輩が CB750Four を購入し乗っていたので、私も大きいのが欲しくなったのです。しかし足が短い（背も 165 センチと低い）ので、ぎりぎり、足が届く、CB550 Four をこれまた月賦で購入しました。バイクは買ったものの、後輩とツーリングに行ったのは長距離ばかりで、九州一周、志摩半島一周だけで、ほとんど一人で、比較的近距離のツーリングを愉しんでいました。

写真 23 初代のバイク Dax ホンダ 90cc

長距離ツーリングは、九州一周が思い出されます。明確な記録がないのですが、会社の夏休みのことでした。出発は、自動者１台とバイク２台が、カーフェリーで日向へ、そして上陸後鹿児島へ向かいました。仲間の一人が、鹿児島出身で、彼の親戚の種子島でお世話になるということで出かけたわけです。鹿児島で一泊の後、種子島へフェリーで渡り、彼の親戚の家で一夜おせわになり、翌朝には、再び日向で合流することとして、解散しました。種子

島には、「宇宙センター」があり、そこを見学したかったのだけど、たどり着けずに「西之表港」に引き返し、バイクとともにフェリーで鹿児島につき、鹿児島では、仕事で泊まったことのある旅館へチェックインし、翌朝、早出したのでした。その日のうちに長崎に着かなければならず、国道３号線を熊本方面へひた走りました。途中天草パールラインを走り、フェリーで島原へ渡ったと記憶しています。長崎ではユースホステルを予約してあったので、そこで列車で旅行中の勤務先の知り合い女性R子さんと合流したのでした。ご存じの通り、ユースホステルでは、夜 10 時には消灯で、R子さんには、思い入れがあったけれど、あまり話が出来ずじまいでした。翌朝、R子さんは帰省中だったR子さんの友達と落ち合うことになったので、彼女たちと別れ、また、一人でバイクを駆って、福岡へ帰省していた会社の後輩の家へと向かいました。

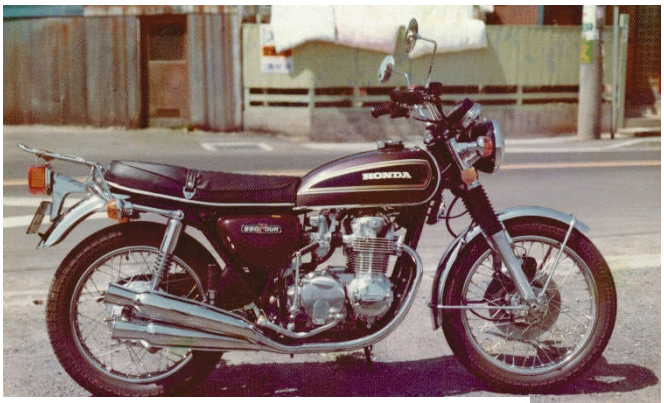


写真 24 ２代目のバイク HONDA CB550 Four

どんなルートで走ったかは定かでは無く、近づく台風の影響が出始めていたように思います。後輩は、近々結婚の予定でしたが、親からは反対されているようで、そのことに付き、ご両親へ説得というか、彼の助成することになってしまいました。彼の意中の女性は、私も好感を持っておりました。結局、あとになって、彼の結婚披露宴の司会を仰せつかったわけでした。披露宴の後、彼のお父さんから、お礼の言葉と記念品を頂きました。

翌日は、日向で集合です。福岡をでて、やはり阿蘇を経由して日向に向かうことにしましたた。阿蘇は台風の影響で視界も悪く、せっかく登ったのだけれど、景色も視界不良でいいとこ無かったのです。かなりの風で、バイクが左右に押しやられ、走行は危険だっのですが、何とか無事、日向の集合場所に皆より早く着きました。問題は、フェリーが出航するか、否かでしたが、台風は船の進路をはずれたようで、川崎へと出港しました。しかし、その余波で、揺れに揺れ、大人でさえ、トイレに駆け込む人が多く、特に小さい子供立ちがかわいそうで、泣き叫ぶ声が耳に残っています。我々の仲間は、馬鹿の集まりだったのか、皆、無事で、やっと海が静かになったのは、フェリーが東京湾へ入ってからでした。

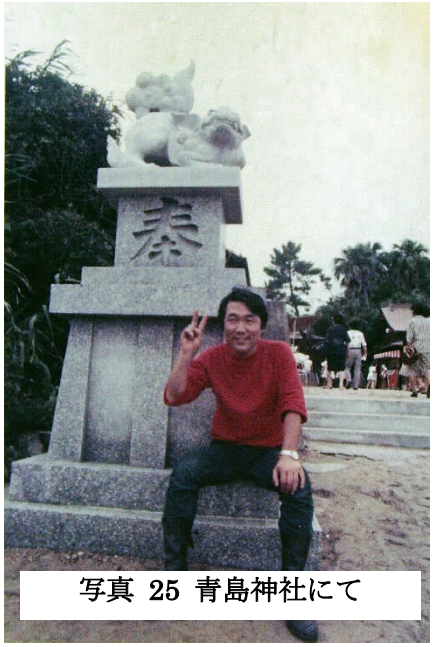


写真 25 青島神社にて

8．結婚

私にも遅かった春が訪れました。昭和 51 年（1976 年）32 歳でした。それまでは、故郷

の母が心配して、何度かお見合いをしましたが、断ったり、断られたりで、いちどなど、婚約成立直前までこぎ着け、見合い相手の彼女が上京し、逢うことになりました。逢って、ビールなど飲みながら話しているうち、ちょっと、気になる事があり、私の住んでいたアパートを見たいというのを断り、滞在していたホテルへ送りました。そのとき私のアパートへ連れて帰ると（今で言うおもちかえり？）きっと彼女と結婚する羽目になっていたでしょう。でも彼女は結婚する積もりだったようで、仲人には「申し訳ありません」とお断りしました。彼女には、いまでも私のわがままを大変申し訳なく思っています。

妻となった女性は同じ会社につとめる人で、いわば社内結婚でした。スキーや、バドミントンなど、社内行事を一緒に楽しんでいましたが、あるきっかけで結婚が決まりました。

結婚を決めた後も、いろいろありましたが、私の給料をすべて貯金し、彼女の稼ぎから、私の生活費をもらう、そんな生活を一年続けて資金を作り、仲人を会社の先輩にお願いして結婚にこぎつけました。彼女を時々、後ろにのせて、近場を連れまわしていたバイク、CB550 Four は結婚前に売り、自動車,シビックに乗り換えました。

８．１ 初めての自家用車

シビックを選んだのは、忘れもしない、東京府中で『三億円事件』が発生した日に、川崎の溝の口でばったりと出会った中学時代からの親友、F 君と、再びつきあいが始まり、その後に、自動者を買うという彼に、私がバイクを購入し、親密になった営業マンのいるホンダの販売店を紹介し、そこでＦ君が買ったシビックを私も気にいったからでした。

写真 26 初めての自家用車 シビック 1500 RSL

納車の日、バイクは軽トラックの荷台に積まれ、引き取られてゆきました。そのシーンをみて「なんだか可愛そうね？」とは妻（正確には結婚前の彼女）の言葉でした。納車されたシビックは RSL グレードで、1500CC、5 速マニュアルトランスミッションの 2 ドアタイプでした。この車は、当時の排ガス規制に、後処理式でなく、エンジンに CVCC 技術が導入されたもので、副燃焼室などを備えたいわば画期的な物でした。特徴として、アクセル・オフしたときにエンジン回転が、なだらかに下降します。エンジンブレーキは？と心配しましたが、実用上、問題なかったように思います。

８．２ ラジコン

新婚時代は、川崎の武蔵小杉近くの多摩川に近い６畳一間に住んでいて、夏など、日が明るい内に会社から帰って、ラジコンバギーを持って河川敷に行ったものでした。走らせて、遊んでいると、夕食の用意が出来たと妻が呼びに来たことを思い出します。

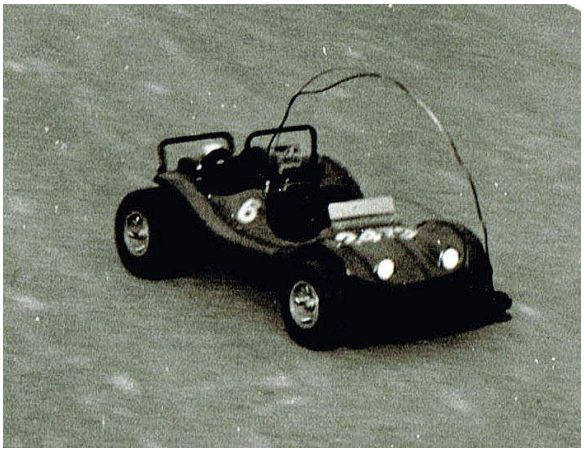


写真 27 RC バギー

このRCバギーはグロー・エンジンを積んで、2チャンネルプロポでコントロールします。
河口湖など、車で行くときは積んで行き、適当な場所があると、走らせたものでした。やはり、住まいの近くでは、河川敷などでないと、音が大きく近隣に迷惑がかかります。

結婚の翌年、待望の公団住宅が当たりました。横浜・本牧近くの団地の2DKに引っ越しました。6畳一間とは比較にならない広さと、何より風呂がとてもうれしかったです。やっと一人前の社会人になれたように思えました。この団地は、横浜港に近く、山下公園ももちろんのこと、港の見える丘公園が近く、すべて徒歩でゆける距離でした。

ラジコン趣味が拡大して、RCヘリコプターにも手をだしました。写真の機体はKALT製バロンで、50エンジンを積んでいました。ローターは固定ピッチで入門用のヘリでした。練習は川崎・登戸近くの模型店が取り仕切るクラブに参加し、毎週末といえるほど、参加していました。

この趣味は、資金が必要でした。資金の捻出は、仕事が忙しく、残業の連続で稼いだ残業代をあてました。当初、5〜6万円が跳んで行ったとおもいます。結局のところ、やっとホバリングが出来るようになったところで、飛行練習場所がなくなり、やめざるを得なくなりました。数年後、機体や、エンジン始動バッテリや始動モータなど一式をオークションで売却してしまいました。

写真 28 RC ヘリコプター

近年、電動の室内ヘリが安価に売られているものの、まだ手を出さずにいます。凝り性の私のこと、年金暮らしの私には資金が続くわけありません。

8．3 ラジコン・ヘリが楽しめた理由

資金の必要なこの趣味が楽しめたのは、多忙の貯め稼げた残業代金のおかげでした。その、忙しかった仕事は、東京消防庁向けの携帯型無線機で、周波数 150MHz、水晶制御式 4 チャンネル、電波形式 F3、出力 1W の防水型でした。大きさや、重さも制限があり、まして、細かな電気的仕様を満足させるにはかなり苦労しました。設計段階での、構造やデザインの検討、電機部品の基板のサイズの確定、部品の配置そして、バッテリの装着法など、機構設計担当としのぎ合いでした。

一番大変だったのは、社内の製造完了後の「立ち会い検査」で、全数すべての定格について検査します。その準備で、泊まり込みで対応したものでした。この対応に一緒に苦労した人に、後に取締役まで上り詰めた方がいました。第一ロット（100 台）だったかな？
出荷したのち、一緒に苦労してくれた後輩にバトンタッチして、私は、無線機の開発の仕事を離れました。

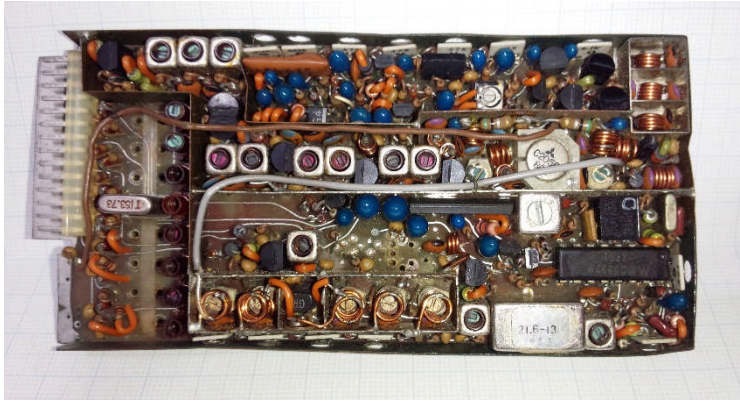


写真 29 携帯型無線気第一次試作品。開発終了後、廃棄物を記念品として保存。

８．４ アマチュア無線再開

アマチュア無線の再開もこの頃でした。会社のスキー仲間で、自家用車数台でスキーに行ったことがありました。そのとき、電気通信大学卒業の秀才の S 君が、何の機種だったか忘れたが、傍受用受信機を車に積んでおり、その受信機から流れる情報を元に、混雑した、帰り道の抜け道を案内してくれました。それから、彼はアマチュア無線が便利と言うことになり、開局しました。彼は学校卒業まえに、第一級アマチュア無線技師の資格を取得していたのでありました。私もやろう、ということになって、私は元のコールサイン JA5ZZ を生かして、再開局したのでした。

アマチュア無線のばあい、無線局の常置場所と設置場所と言う概念があり、常置場所は、実家のある本籍地に、

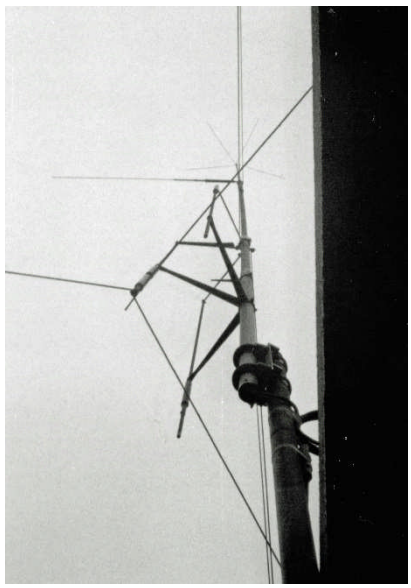


写真 31 再開局当時のアンテナ

写真 30 再開局時の無線機

設置場所は現住所（神奈川県）にし、全国どこでも移動出来る無線局として開局しました。再開局に際して、機材（アマチュア無線では Rig と云います）はトリオの TS820V 1.8MHz 帯～28MHz 帯の 10W SSB トランシーバー（送信機と受信機を一体化したもの）

とルソーというメーカーが販売していた垂直アンテナでした。アンテナは、団地４階のベランダ取り付けました。そのとき、S 君が手伝いに来てくれたのですが、彼は高所恐怖症でベランダでの作業がつらかったそうです。局の免許申請は JARL の保証認定制度を利用して簡単に免許を受けました。

この TS-820Vは、終段が S2001、励振は 12BY7A の２本が真空管で、そのほかは、トランジスタで構成されています。非常に良く出来たトランシーバで、PLL で局部発振が構成されていて、100W 改造キットをつかって、簡単にパワーアップできます。

免許を受け、アンテナを設置後、再開局後、初めての QSO（交信）は、横浜市内の局と、21MHz の電信で交信しました。今度は違法ではありません。3 級無線通信士の資格で、2 級アマチュア無線技士の操作範囲での開局ですから・・・。

８．５ モービル運用へ

開局してから、毎週末には 14MHz でラグチュー（とりとめもない話で盛りあがったり、無線に関する意見交換などで交信すること）していましたが、モービル移動局と交信する機会があり、親しくなって、私もモービル運用することにしました。当時の写真をみると、井上電気（アイコム）の IC-720、トリオの TS-50,八重洲無線の FT-707 が写っていまして、どういう順序で導入したのか、今となっては不明です。でも、旅に出るとか、帰省するときなどは、シビックのリヤ・バンパーにアンテナを取り付けて運用しておりました。今考えると、当時そんな資金がよくあったなあ、と恐ろしくなりましたし、何よりアマチュア無線を運用しながら、東名高速など走るのですから、よく事故を起こさなかったものだと思います。現在、携帯電話で通話しながら運転することは道路交通法で規制されていますが、無線の運用は平気なんでしょうか？

写真 33 モービル・アンテナ

写真 32 モービル機器

８．６ 上級ハム資格へ

昭和 58 年、一人息子が妻のお腹にいたころ、ラグチュー仲間から、「偽アマチュア」だと、しきりにからかわれていました。ほかにもプロの資格で、アマチュア無線局を開設している

方はたくさんいるのですが、仲間内では、記憶に残る方はお一方だけでした。そんなことでしたので、それでは本物の「アマチュア無線家」になってやる！と１級アマチュア無線技士の資格を取ろうと、勉強を始めました。

試験は、無線工学と法規それにモールス通信術の実技試験がありますが、私は３級無線通信士の資格があったので、モールスは免除されました。法規は電波法と国際電気通信条約から出題されます。また、無線工学はこれまた、相当難しい問題がでます。過去に出題された問題を中心に勉強し、会社の優秀な後輩に、教えを乞うて、何とか合格することができました。その問題は今でも保存していますが、いまとなっては、合格点は取れないでしょうかね？

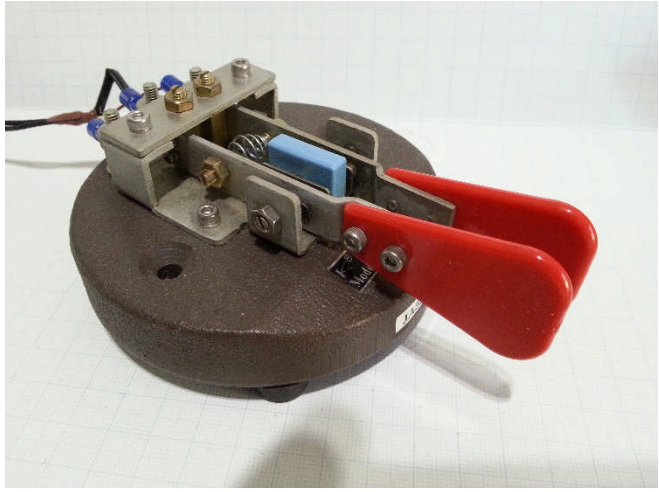


写真 34 交信に使うエレキー・パドル

試験会場は大田区蒲田にある日本テレビ工学院で、ほかの受験者との話のなかで、知ったのですが、最も難関は通信術みたいでした。「私は免除です」といったら、ずいぶん羨ましがられました。

一級アマチュア無線技士に合格しても、事実上何の変りもありませんでした。一級ともなれば、その操作範囲のうち空中線電力の制限が解かれます。何キロワットでも申請出来ますが、それはアマチュア無線のこと、必要の無い電力と見なされれば免許は下りません。当時は 500W が事実上の上限でした。しかし、リニヤアンプを準備する資金のほか、面倒な手続きがあります。たとえば 500W の電波を発射すれば、近隣の TV やラジオそして、ステレオ装置など、電子機器に障害を与えないか、一軒一軒調査しなければなりません。街中のアマチュア局にはハードな足かせになります。　アマチュア局を運用していますと、いろんなことがあります。驚くことや、悲しいこと、楽しいことがあります。親しくなった方とは頻繁に交信をします。

悲しかったことは、ハム仲間が亡くなって仕舞うことです。ハム仲間では「サイレントキー」といいます。所以はオペレーターが亡くなってしまうと、キー音（電信音）が聞こえなく（サイレント）なってしまう事からといわれているようです。

８．７ ハム仲間の思い出

"JA5BV"は、高知県で オンエア（On the Air：放送局などでは放送中の意味で、ハム界では運用し
ているほどの意味）しておりました。私は、彼を含む仲間とよくラグチュウをしていました。一度など、帰省のおり、高知まで足を伸ばして、彼の家をたずねました。土佐の一本釣りで有名な久礼港近くで、漁船の無線機保守をやっていました。彼は、古い軍用無線機などを集

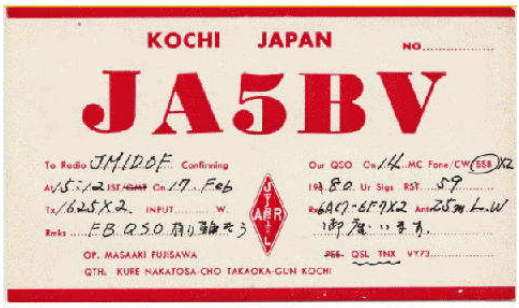


写真 36 JA5BV の QSL カード

めるのが趣味で、それを、アマチュア無線用に改造して運用していました。後に、何かの用で上京し、横浜港に近い「バンド・ホテル」を紹介しました。横浜港や中華街を歩いたあと、別れましたが、後に訃報をうけとりました。

"JA1EN"は元々、船舶に乗務していた、私のあこがれの職業、船舶通信士でした。その頃は乗船機会が無かったようで、三崎港に近い家で本屋を営んでおられました。一度、三崎港に行った折り、お目にかかったのですが、優しそうな方でした。帰る時、冷蔵庫から「マグロの味噌漬け」を出してきて、持たせてくださいました。とても美味しかったことを思い出します。訃報を受け取り、ハム仲間の人とお通夜にお参りさせて頂きました。前の"JA5BV"とよくラグチューしていましたが、その内容は「おつむの薄さ」を嘆きあっていたように思います。現在でも、時々、「まぐろ鉄火巻き」大会に参加の為、三崎港へ行くのですが、その折り、本屋さんを探すのですが、見つかりません。亡くなってしまったので、本屋さんをたたんでしまったのでしょう。

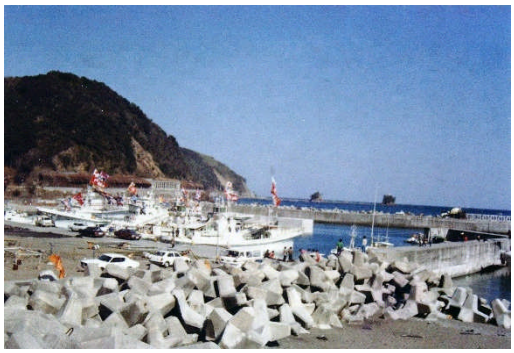


写真 35 JA5BV 局近くの久礼港（高知県）

写真 37 JA1EN の QSL カード

"JA6AYO"は長崎県の中学の教諭でした。一時、隠岐の島の学校へ赴任されており、そこからオンエアしていました。私とは、毎週末と云っていいくらい、たびたびラグチューしておりました。隠岐の島で醸造された焼酎を送っていただいたり、息子の誕生祝いに、バギーを贈って頂いたり、はたまた、長崎出張の折りには、お目にかかり、一晩泊めていただきました。お世話になりっぱなしでした。余り交信する機会が亡くなってしまいましたが、お元気で活躍されているようです。

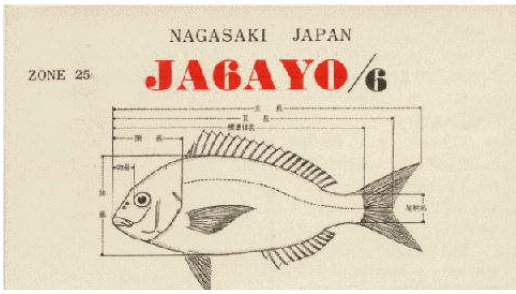


写真 38 JA6AYO の QSL カード

"JA4EGF"は山口県の歯医者さんでした。ヨットを設計製作して、航海していたようで、そのうち、横浜にも寄港するなんて話もありましたが、それも実現しないまま、旅だたれました。彼とは、無線での交信は言うにおよばず、ハム仲間のミーティングで何度かお目にかかりました。

"JR1UJT"は、武蔵小金井にお住まいでした。元電波監理局職員で、且つ私の電波高校の先輩になります。彼は本科生で先輩とは云えないかもしれません。アマチュア無線家としては、無線機器の自作が得意で、数少ない、自作派のハムでした。彼の設計した 14MHz トランシーバの設計図が残っていまして、腕に覚えのある方が制作に取り込んでいます。住まいが東京なので、お宅を訪問し、製造過程などを見せてもらったり、技術的な話をたくさん聞かせて頂きました。

1979 年 5 月のこと、富士山へドライブに行ったときの事です。まだ、HF のモービル無線機は搭載しておらず VHF のみでした。CQ 呼び出しを 144MHz SSB モードで行うと、浜松市の JA2OT（丸尾さん）から応答がありました。丁度、富士山五合目の駐車場に停車でしたので、電波は浜松まで届くんだなと関心していました。丸尾さんと交信してお聞きした内容は、香川県で開局当時の私と交信した事があるとの事で、驚きました。18 年ぶりの再交信となり、助手席の妻も驚いていました。こんな思い出話は尽きないほどあります。

9．パーソナル・コンピュータ

パーソナル・コンピューター（以下パソコンと呼びます。）との出会いは、昭和 58 年、if800（沖電気製）が初めてで、無線器開発業務を離れたことは先にのべました。その後は、無線通信システムというか、市町村防災無線システムとか、消防署向けの無線通信システムとか、統制台（運用制御卓）の設計、開発の担当が主な業務でした。

9．1 デジタルデータを扱うプログラミング

当時は、無線通信は音声に限らず、データ信号を重畳させて、情報（位置とか、状態）を送受する通信が発展しつつありました。たとえば、消防関係ですと、出先の消防車の状態（進行中、消火作業中、消火など）を伝送して、消防活動の円滑化、効率化を計るものでした。そのため、音声通話の間隙をぬって、データー信号を送受します。データーは、サブキャリヤを使った MSK 方式で、1200Hz と 1600Hz の信号を"1"、"0"のデジタル信号に対応して、送出します。伝送速度は 1200bps となります。

写真 39 if800-20
http://museum.ipsj.or.jp/computer/personal/0005.html より転載

この信号の制御はマイクロコンピューターを使って制御しますので、制御回路およびその制御を行うマイクロコンピュータの制御ソフトウエアが必要になります。制御回路に使うマイクロコン

ピュータはモトローラ系のシングルチップ HD-6303 を使ったもので、ソフトウエアはまだ、アセンブラが主流でした。一番やっかいだったのは、伝送中に発生するバーストノイズ（主として自動者やバイクのエンジンの点火装置から出るノイズ）などによるエラーや欠如に対する訂正方法を組み込むことでした。エラー訂正はいろいろありましたが、ハーゲルバーガー方式が採用され、その生成や解読はデーターの長さに対応出来るようにサブルーチン化して、いろんな種類に対応出来るようにしました。この数学的理論は確率していますが、ソフトウエアにインプリメントするには大変だったように思います。事実、若い技術者の努力によって完成したのでした。

エラー訂正ルーチン以外に、無線機の送受信制御、受信データの解析と表示、制御項目の取り込み、データ生成などを行うソフトウエアを組み込んでゆきます。ソフトウエアはマイクロコンピューターが解読出来る言語（一般的に機械語といいます）を作成しますが、人間には難解です。そこで各命令を人間に判りやすい言葉、ニーモニックでプログラミングし、それを、コンピュータで動作する"アセンブラ"というソフトウエアを使って、マイクロコンピュータが実行可能な、機械語データーに変換（アッセンブル）してマイクロコンピューターを動作させます。

ソフトウエア開発は、プログラミングはパソコンのエディターと呼ばれる編集ソフトで記述され、アセンブラーでアセンブルし、動作チェックを繰り返します。当時のマイクロコンピューターのプログラムは、EPROM(Erasable Programmable Read Only Memory：消去可能なメモリ)に書き込みツールを使って書き込まれて実行されます。不具合点が見つかるとプログラミングを修正して、アセンブル、書き込み、実行の作業が繰り返されます。当時、この作業にほとんどの時間を費やしました。アセンブルなどの作業は、当時社内製のパソコンで、型名は忘れましたが、ＯＳは CP/M と云うデジタル・リサーチ社製の８ビットパソコンで動作するものでした。当時はプログラミング言語というと、アセンブラーが主流でしたが、その後は有名なＣ言語が脚光を浴びました。ただし、それは、パソコンで動作するソフトウエアで、ファームウエア用（機器組み込み用ソフトウエア）に至ってはもう少し時間が経過してからでした。

マイクロソフトの 16 ビット OS で動作する、MSC8086（後に i8086）CPU を搭載した MS-DOS マシンが NEC から発売され、日本中のパソコンと云えば、PC-98 といわれるほど、PC-9801 シリーズが主流となった期間が続きました。

写真 40 FM-16β と無線機

９．２ ハムとパソコン

富士通からも FM-8 とか、FM-11（イレブン）など８ビットマシン（CPU は 6809：オリジナルはモトローラ）が発売されていましたが、OS は積んでなく、FBASIC が基本プログラムでした。その後、富士通からも 16 ビット

マシン、FM-16β(ベータ)（CPU は i80186：インテル製）が発売されましたが、OS は、CP/M86 で、CP/M を 16 ビット化したものでした。そのころ、私も個人用にアマチュア無線に関連して、パソコンが欲しくなり、社内販売で入手しました。まだ、富士通との合併前でしたが、協力態勢ができていました。後に、FM-16βにも MS-DOS が積まれるようになりました。この、FM16βは CP/M86 の頃は、サブシステムと云われる、サブ CPU6809 を積んだビデオ回路をもっていて、メイン CPU の負担を軽くしたかったのでしょう。しかし、よく故障しました。横浜にあった富士通の支店に持ち込みました。MS-DOS になってからは、サブシステムをパスして、メイン CPU でビデオ回路を制御するようになりました。

ハムとコンピュータ、この組み合わせは重要でした。ハムの通信には、電話、電信、スロースキャン TV、データ通信などがありますが、そのデータ通信に興味を持ち始めました。RTTY とか AMTOR と云われる通信方式です。これに対応するハードウエアは、無線機とのインターフェース（ターミナル装置）として発売されていた PK-232 を購入して使用しました。コンピューターとのインターフェースは汎用のインターフェース RS232C を使いますが、あいにくそれを制御するコンピューター側のソフトウエアがありません。ならば作ろうと云うことで、自作することにしました。

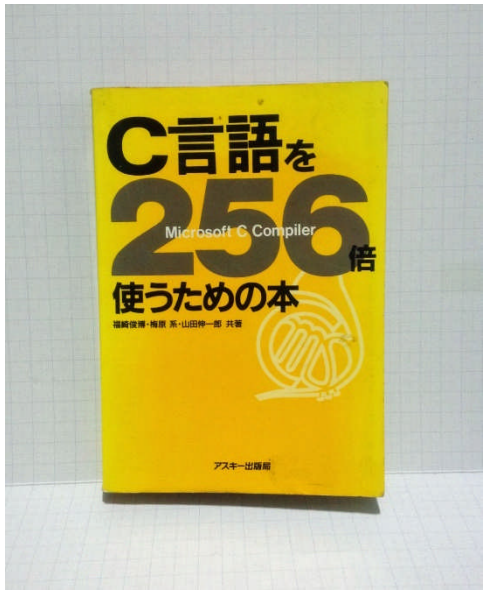


写真 41 C 言語の参考本

FM-16βの MD-DOS 上で動作するもので、C 言語で開発しますが、開発ソフトはマイクロソフト C（以下 MS-C と表記します）と、富士通から販売された FMC 関数ライブラリを購入しました。このライブラリは、MS-C には含まれない、FM-16β特有のライブラリの集まりです。

このソフトウエアは、"RTTY"と名付け開発してゆきました。ある程度使える段階になって、実行しながら不具合点が見つかれば修正し、改良点が見つかれば改良するという作業で進めてゆきました。事実、交信中に不具合が見つかってしまい、即、交信を終了して、改良作業に入るという具合で、ろくに交信を続けることが出来なかったようです。このソフトは、はっきり言って未完成のままで、終了しました。というのは、安価で動作が軽い、「秀たーむ」というシェアウェア・ソフトがあることを知り、それを使うようになったからです。この未完成の「RTTY」は、希望される方がおられて、お嫁に行きました。確か、富士通関係の方だったと思います。執筆にあたり、「RTTY」のソースリストを探して見ましたが、どこにも残っていませんでした。有ったからどう云うわけではないのですが、残念としか言いようがありません。当時、C 言語がはやっていると云うか、注目されていた時代でした。たくさんの月間誌、単行本が出版されており、中には”猿にもわかる C 言語”なんていうふざけた様なタイトルで発刊されている本もありました。私がプログラム開発の参考にした本はたくさん

ありますが、現在手元に残っている物の中に、アスキー出版から”C 言語を 256 倍使うための本”があります。軽妙なタッチで描かれたこの本は、頭を休めによく読んだものでした。

９．３ ハムの業務日誌

写真 42 Microsoft Access による Log

一方では、ハムに欠かせない業務と言うか、作成しなければならない書類に、業務日誌があります。船舶にも航海日誌があるようにです。この航海日誌のことをログ（log）といいますが、なぜ航海日誌をログというのでしょうか？本来 log は丸太のことで、その昔、船の速度を測るのに、ロープで縛った丸太を船首から海へ投げ込み、船尾に到着するまでの時間を測定して、速度を計算し、航海日誌に記録したといわれています。その関係から航海日誌をつけることを、ログをつけると云ったのでしょう。ハム界でも業務日誌を、それにちなんで、ログとよびます。

ログは、交信した日付、開始時刻、終了時刻、交信した相手局の呼び出し符号、使用した電波型式および周波数、空中線電力、相手局の信号強度、報告された自局の信号強度、相手局の所在地、運用者の氏名などです。以前は業務日誌抄録として運用した時間の合計などを当時の電波監理局に提出する義務がありましたが、現在は廃止されています。

この抄録を作成するためだけでなく、QSL カードと呼ばれる「交信証」を発行したり、受け取ったことを管理するため、あるいは、アワードと云われる色々な交信形態の条件を満足した局に与えられる賞を申請するための条件管理などに利用されます。これは日本アマチュア無線連盟が発行する専用ノートなどに記入する方法が主でしたが、最近はコンピュータを使った管理が一般化しているようです。私もコンピューターを導入しました。ログをコンピュータ管理しない手はないと思い、当時の「dBase３」なるソフトを使ってみました。このソフトは、単にデーターベース管理に限らず、プログラミング言語をふくんでいて、検索方法などが、自前で作成出来るソフトでした。しかし、過去の交信データの登録を、1 件ずつ行うので、莫大？な量のログの項目を入力するのはたいへんで、毎日 10 件づつとか、コツコツとやって行くしかありませんでした。

世の中は Windows 時代にはいり、dBase3 はうまく Windows に対応出来なかったそうで、私はマイクロソフト・アクセスに切り替えました。この切り替えは、データーをアクセスに容易に移管出来たことがラッキーでした。現在では、ハムの間では有名な『ハムログ』というソフトが無料で利用出来るようネット上で公開されています。このソフトは、使った事はないのですがハムに特化したソフトで必要な機能はすべてそろっているようです。

話が前後しますが、2014 年現在の私の無線局の構成は、トランシーバはアイコム製のIC7000（出力 50W、3.5MHz～435MHz）とアンテナチューナーAH2 に接続した垂直アンテナ（長さ 10mのグラスファイバー・ポールに線材を通したもの）と簡単なものです。運用はほとんど 14MHz 帯の SSB による電話ですが、この頃は電波の伝搬コンデションが良くないようで、週末に限られます。日曜日などは、無線機の電源を入れ、ワッチ（聴視）してみるとほとんど交信が聞こえない事が多く、それでも運良く交信できる事がありますが、九州や北海道の局がほとんどです。そんな訳で、ハムの世界での活動は、アクテブとは云えません。かろうじてアマチュア無線局を保持しているというところでしょう。で、現状のライフワークといえば、後で述べることになりますが、これも友人からそそのかされ、ビデオカメラを購入し、その世界にどっぷりとつかるようになりました。それに関連して、デジタルカメラを入手し、写真の世界にも再び舞い戻りました。

ハムは短波帯を多く使います。その伝搬は太陽の黒点活動の影響を受けるようで、このところ、伝搬コンデションがよろしくないようで、あまり活動しておりません。特に夏など、スポラデック E 層という電離層が発生し、超短波帯（50MHz など)を反射するので、地球との間で反射を繰り返し、遠くまで届くことがあり、そ
れを期待して、50MHz を始めたのですが、まだ、その条件に遭遇したことはありません。

写真 43 2014 年現在の Rig

写真 44 現在のアンテナ
10m 垂直アンテナ

１０．富士通ゼネラルに

1984 年（昭和 59 年）富士通株式会社と業務提携、資本提携による増資がなされ、翌年には、社名が株式会社富士通ゼネラルに変更されました。富士通の増資により、5 階建ての研究棟が敷地内に竣工しました。

１０．１ 無線装置の開発

その頃、私は消防用基地局の無線装置の新規開発に取りかかっていました。この基地局用無線装置はラック（無線装置架）に収容された、現用機・予備機を時間ごと切り替えて運用する形式のもので、且つ送信出力、受信感度をチェックして、異常があれば正常の機器に切り替え、アラームを発生するもので、『自動切替型』と称されていました。その制御はデジタル IC により構成されたロジック制御方式で、製造工程が複雑でした。そこで、その制御をマイクロコンピューターにゆだね、機能向上を狙い、且つ製造工程の簡略化を狙った装置として開発しました。

新自動切替型無線装置は現用・予備機の 2 組の無線機が旧型の半分にシェープアップされた 1 本のラックに収納されており、その異常検出は送信部の送信出力を常時検出し、正常時のおおむね半分の出力に低下した時点で異常を通知します。また、受信部では一日一回、通信回線を予備機側に切り替えて、装置内に収納された、SG（信号発生器）をつかって、現用機側の受信感度を測定します。その結果 S/N（信号対雑音比）が約 30dB 悪化すると異常を通知します。これらの異常はラックの監視部で表示されると同時に警報音を発生します。この装置は、ほとんどの場合、機械室などに設置され、リモートコントロールされますので、これらの情報は、コントロール元にも通知されます。

こういった、一連の制御や通知もしくは表示などを、8 ビット CPU、HD6303 で行いました。このプログラミングはまだ、C 言語環境がなく、アセンブラで記述しました。

このラックを開発するにあたり、コストダウンを狙った点がいくつかありました。そのうちの一つとして、送信出力検出があります。通常、送信出力など、高周波回路を切り替えるには、専用のリレー（継電器）が使われますが、これをゲーム機として、TV のアンテナ切り替え用に使われたリレーが使えるか否かを、メーカーに検討してもらいました。耐電力に関しては 20W 切り替えに耐えられるか？そして、100 万回程度の動作に耐えられるか？をです。メーカー側も思いのほか良好であったことに驚いていたようです。そのリレーをプリント基板で作成した送信出力検出用回路に取り付けて、一つのユニットを構成しました。旧型機に比べて幅が半分にシェープアップされた、新自動切替型無線装置は機能別にアレンジされ、全国の消防署に出荷されました。

１０．２ 新しい環境で

研究棟が竣工して、私たちの事業部はそちらへ引っ越す事になり、専門の委員会が設置され、検討されたようです。社員がそれぞれ、台車などを使って何日かを掛けて行われました。新しい環境は、各フロアは実験室と事務室に分かれており、設計などの業務は事務室で、実

験や試作などは実験室でおこなれました。実験室、事務室の入り口は社員カードがキーとなり、それを通して入室することになりました。また、自販機コーナーもあり、新社屋はすこぶる快適でした。そういえば、自販機コーナーでのこと、1988年韓国で開かれた、ソウルオリンピック記念に、コカコーラ社が実施したキャンペーンにボトルやカップのマークを集めて応募すると、賞品が当たると云うことで、一生懸命集めて応募しました。すると、「電動模型のラジコンバイク」が当たりました。今では、ニッカド電池が使えなくなり、走らせることは出来ませんが、仕舞ってあります。電動バイクは走らせるのが難しく、まともに走らせることが出来ないままでした。

写真 45 コカコーラ・ソウルオリンピック記念賞品 RC バイク

直接関わった訳ではないのですが、別グループに AVM を開発する係がありました。われわれのグループとは、データー伝送技術に付いては関連があり、担当者同士では意見交換などがおこなわれました。

AVM とは、”Automatic Vehicle Monitor”の略で、タクシー配車システムや消防の車両動態表示装置の為の車両の位置を知る装置です。今でこそ、車両に GPS ナビゲータが付いていることは珍しくありませんが、当時は GPS は、まだ普及していませんでした。しからばどうやって、位置を把握するかと云えば、首都圏のタクシーについては、サインポストという、位置信号を微弱な電波で送信する装置を、必要な場所に設置します。その近くを通過するタクシー車内に設置されたサインポスト受信機でその信号を受信して位置を知ります。

AVM はどの様に構成されたか？タクシーの無線配車は、配車センターから、音声で探索し、顧客からの要望に対応して配車しておりましたが、それをタクシーから任意に発信する位置情報を拾い集め、配車センターのコンピュータ画面に表示します。配車係はその画面から、顧客に近い位置にいる車両に配車を指示します。このように、音声探索に比べ、スピーディに探車、配車でき、タクシーの実車率の向上が見込めるのです。問題もありました。サインポストのエリアの広さと設置される数によって車両の位置精度の問題、各車両の発信する位置情報信号のぶつかり合いでの読み取りエラーなどですが、これは、コンピューターのソフトウエアで解決したようです。近年は、GPS を利用したナビゲーターが発達し、AVM にも取り入れられて成果をあげているようです。

この技術はわれわれが手がけた、市町村防災行政無線・移動系にも生きています。この移動系とは、市町村の防災行政無線装置と庁舎内の各課に設置する有線で接続された端末装置と、所有する車両に設置する移動局（無線機）と通信可能なシステムです。平常時は、行政上の連絡などが行えます。複数の庁舎内端末相互間において、簡略的な選択呼び出しが出来るとともに、庁舎内端末、移動局相互間で選択呼び出しが可能となっています。

特に、選択呼び出し（セレコール）では "8.コンピュータ"の項での技術の延長で、変わった事と云えば、自分でも所有していた物と同じコンピューター、FM-16βが使えるようになり、アセンブル速度が抜群に早くなった点くらいです。

1985 年、日本電信電話公社が民営化されました。同公社が所有する一般加入電話回線とは別の専用線は、当時は遠隔地との制御回線として借りて、利用することの多かったのですが、これが NTT となりました。公社時代は、”親方日の丸”よろしく、利用申請も設計も厳重でした。これが、民営化にともない、やや利用しやすくなったように感じられました。翌年には、NTT 株が公開され初値は 160 万円でした。1 株だけ購入した人が]多かったようですが、営利目的なのか、売るか保有するかを判断は難しかったのでしょう。事実、損した人、得した人の話は余り聴いた事はありませんでした。

1989 年、転職のきっかけの一つとなった事案が発生しました。当時の課長であった MD 氏が私本人に、他部門への臨時移動を事前に本人に通知、了承をとらず、打ち合わせの席でいきなり発表したのでした。私にとっては、全く寝耳に水でした。臨時移動といっても一旦移動したら、元へ戻る事はまず、無いのが通例で、事実上配置転換です。なぜだか、その場では反論しなかったのが自分自身、不思議でした。同じ頃、別の元上司から、会社の OB の経営する会社への転職の打診があったので、転職することが心の片隅のあったかも知れません。前出の、神戸へ出張したときの、当時の営業所所長 T 氏が経営する会社で、主に首都圏のタクシー会社に無線機を販売する富士通ゼネラルの代理店で、新たに新製品を開発するための人材として、白羽の矢がたったのでした。

１１．次の転職

1989 年 1 月 7 日、今上天皇（のちの昭和天皇）が崩御され、テレビジョン放送は 2 日間の特別放送体制にはいり、ニュースと追悼番組に限られていました。迎えた年号は『平成』でした。

約 21 年間勤めた、富士通ゼネラルを退社しました。そして、転職を世話してくれた元上司の取り計らいで、E 社に入社しました。大喪の礼がとりおこなわれた 2 月 24 日は確か小雪が舞っていたとおもいます。その様子を、仕事をほったらかして TV 中継を観ていたことを思い出します。

富士通ゼネラルで得た知識や体験は、その後の私の生活に大きな影響を与えています。入社した当時、Y 先輩にお世話になりました。その先輩は製造工程の内、受信機の調整・検査チーフで、問えば答えてくれる方で、その工程における、ほとんどすべての技術・知識を伝授してくれました。また、仕事を離れても、スキー・テニス・バドミントンを一緒に楽しみました。また、転職のきっかけを与えてくれた上司も、一緒に営業活動したり、顧客との対応の仕方を教えてくれました。周りの同年代の社員諸兄の中には、数学や無線工学、実地回路計算などを教えてくれる人がたくさんいました。何より、パソコンのプログラミングに関して、その機会を得られたこと、時間的にじっくりと取り組ませてもらえた事などです。私の技術や知識は富士通ゼネラル時代に培われた物ばかりと云っても過言ではありません。

１１．１ 新しく就いたＥ社

Ｅ社は、本社は東京目黒にあり、営業・事務だけのスペースしかなく、富士通ゼネラルの首都圏の代理店であったため、その保守の拠点となっていた、横浜の小さなスペースの出張所で業務を開始しました。業務開始にあたり、社長の目標であった製品を開発するための、パソコン関係のツールの準備を開始しました。

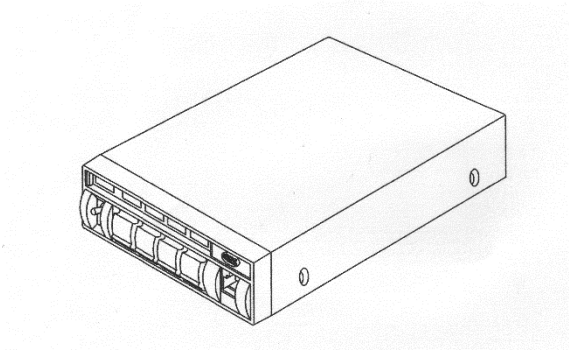


図 6 ポーリングＩＤ移動端末外観

主に、新製品の開発が主でしたが、営業サイドの企画に基づき、提案書をつくったり、見積書を作成するのも重要な業務でした。私はそれを担当する"課長”でしたが、当初は部下はおらず、後に、新たな若いスタッフが増え、プログラム開発などを分担させる事で、業務を遂行して行きました。のちに、専務なる人物も同居するようになり、無線保守担当を含み、五名の世帯になりました。

Ｔ社長の開発目標の製品は、「ポーリング ID」システムと命名され、比較的小さなタクシー会社向けの配車システムでした。このシステムの概要は後ほど説明するとして、Ｅ社が取り扱いの商品に先出の AVM システムがあります。首都圏のタクシー会社に対して、無線機、AVM 装置を一手に引き受けていましたが、地方の小規模のタクシー会社向けに、先出の「ポーリング ID システム」を販売しようと企んでいたわけです。Ｔ社長は北海道大学出身の技術屋でアイデアマンでもあり、敬虔(けいけん)なクリスチャンでもありました。（後に、お亡くなりになったとき、お通夜に参列して、クリスチャンであることを知りました。）

仕入れた情報に「デッカ航法(Decca Navigator System)」がありました。船舶関係の方ならよくご存じの航行援助システムです。これを陸上で利用しようと思いつき、あるデッカ機器のメーカーを引き込んで、実験を開始しました。私と無線保守担当はこのシステムを陸上で使うには位置測定精度の点で疑問視していましたが、それを AVM システムに組み込んた配車システムを都下のタクシー会社、Ｃ社に販売契約を結んでしまいました。富士通ゼネラルには、サインポストの信号に替えて、デッカで測位した位置情報を渡し、それに対応した AVM 配車システムの開発を発注したのでした。デッカ受信機はそのメーカーに発注し、AVM 端末とのインターフェース装置は、私が開発を担当しました。

デッカシステムは使用する電波の周波数が 70～130kHz の連続波の位相差を用いて測位を行う（双曲線航法)もので、海上保安庁の管轄するものです。ネックは海上では比較的安定に測位できますが、陸上ではビルや山などの影響が大きいようでした。 これと平行して、当時からポツポツと話題になっていた GPS（Global Positioning System)についても Ｔ社長は感心を持っていて、当時開発していたソニー株式会社にアポをとって、話を一緒に聞きに行きました。

2014 年現在、GPS はスマートフォンにも内蔵されているくらい、当たりまえの機能ですが、やっと入手したサンプルは今とは比べものにならない大きさと、アンテナでした。そし

て、衛星の数も 10 個に満たないほどでした。したがって、常時測位できる訳ではなく、測位出来そうな時刻をねらって、入手した GPS 装置とインターフェース、ノートパソコンを車両に積み込んで受信データをパソコンに取り込んで、帰って来てからそのデータを検討していました。まだ、リアルタイムに位置を表示出来る装置は、我々は持ち合わせていませんでした。

帰社して、データを解読し、国土地理院発行の白地図にプロットして行くと、かなり正確に道路上をトレースしていました。笑い話ではないのですが、同じコースを走っていても、道路の上り下りで、ちゃんと左側をトレースしておりまして、それを見て思わず笑ってしまいました。でも時にはとんでもないところをプロットしたり、トンネルの中や高速道路の下ではデータが欠落するのも仕方ないことでした。（この辺は後に、自立航法と呼ばれるメソッドに助けられるようになりました）

2001 年 4 月 1 日、デッカの運用が停止されました。デッカ運用停止のアナウンスがあったときは、すでに、デッカに替えてソニー製の GPS ユニットが使える様に端末の試作が完了しておりましたので、急遽端末の製造に取りかかり、GPS ユニットを発注しました。旧端末との入れ替え工事もスムーズに行え、顧客には迷惑を掛ける事はありませんでした。実は、タクシー会社 C 社からは、測位誤差や、動作不安定のクレームが多く、事態収拾に躍起で、入れ替え後は私たち技術関係の社員にとっては、デッカのクレームがなくなり、枕を高くして眠れるようになりました。

私の開発していた「ポーリングＩＤシステム」は一応完成し、近県の小規模タクシー会社に販売が決まりました。このシステムは、顧客の要求する場所を指定して「音声」による探車(空車を探すこと）を実行します。それに応じて、要求場所近辺を走行中の空車または空車予定の乗務員が、釦をおします。するとその車両番号が、配車担当のコンピューター画面に表示され、トップ表示された車両に配車します。この時、複数の車両が配車希望の釦を押したとき、信号がぶつかりあい、消し合ってしまうことがあります。このため、各車両の端末が､釦を押した瞬間に 0 から 15 までの間の乱数を発生させます｡､その発生した乱数のうち、0 を除く乱数を自分の順番とします。0～15 の順番で 1 秒間隔で、0 はボタンを押した車両が一斉に信号を送出し、1～15 秒の間の自分の順番のタイミングで信号を再度送出します。先の AVM の説明のなかで､｢各車両の発信する位置情報信号のぶつかり合いでの読み取りエラーを回避するための方法の一つの考え方です。そして、一斉送信は混信で信号が読み取れなくても信号が送出されている、つまり探車に対して応答があったので、基地局側では後の 15 秒間､応答信号を待ちます｡しかし､このタイミングに応答がなければ､応答無しとして､探車呼び出しを終了し、再度、もしくは次の探車を実行します。

しかし、営業担当の説明不足から、設置工事が終わったにもかかわらず、残念ながら契約破棄になってしまいました。というのは､後日 GPS ユニットを追加することで正確な探車位置を把握出来るシステムになるというところが､最初からこの GPS ユニットが付属していると顧客が勘違いして契約したのでした。

１１．２ 阪神淡路大震災と Windows95

1995 年(平成 7 年)1 月 17 日早朝の 6 時前、地震がありました。いわゆる阪神淡路大震災でした。あまり、ＴＶも見ないまま、会社に出て、車にＧＰＳデータ収集機材を積み込み、東京方面を走行しておりました。車の中で流れるニュースで被害が流れていました。怪我人、死者の数が段々と増えて行き、災害の甚大さを知ったのでした。ＴＶで流される被害状況が映し出され、阪神高速が横倒しになった情景、バスの後ろ半分がやっと道路が高速道路上にとどまり、今にも落ちそうな状況、そして、火災の炎や黒煙が立ちのぼる情景に、幼い頃見た山火事の恐ろしさが重なって、恐怖を感じました。翌年の３月頃、車での帰省で神戸市内を走りましたが、勿論復旧も不完全で道路事情も悪く、渋滞している箇所がたくさんありました。改めて、いつ襲ってくるかわからない自然災害の怖さを垣間
見た気がしました。

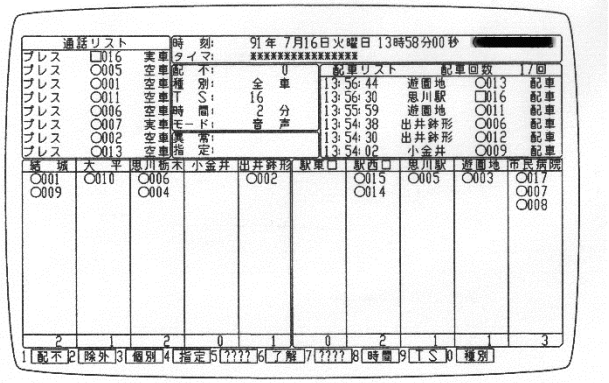


図 7 手作りの配車画面

この年はパソコン業界にとって話題の年となりました。11 月 23 日、日本で「Windows 95 日本語版」が発売されたのです。秋葉原の電気街と呼ばれた販売点では、日付変更の 0 時にあわせた深夜販売も行われ、たくさんの人々が殺到し、TV でもその様子が放映されました。それまでの Windows 3.1 から大幅に改良され、MS-DOS と Windows を統合し、使いやすさと性能を向上させた OS で、パソコン起動時は MS-DOS からでなく、直接、Windows が立ち上がるようになりました。また、ネットワーク機能の充実が、インターネットの拡大に大きく貢献したのではないでしょうか？

インテルの CPU（マイクロプロセッサ）はマイクロソフト社の OS との相乗効果で発展してきたようでした。Windows95 が発売された 1995 年頃は、1993 年に発売された Pentium や intel486 が主だったようで、この年に Pentium Pro が発売され、後に PentiumⅡなどへ発展して行きました。

遡ること数年、私が「ポーリング ID」システムを開発中は、まだ、OS は MS-DOS でした。開発に使用したパソコンは、富士通製の FMR-70HD でした。これは FM-16β の後継機種で、後に Windows 3.1，や OS2 なども移植されましたが、動作はいまいちでした。「ポーリング ID」システムは画面制御が大変で、先出の”FM-C 関数ライブラリ”を利用して手作りで、図 6 のような表示画面を作成してゆきました。Windows であればかなりスマートに作成できたのでしょうが。

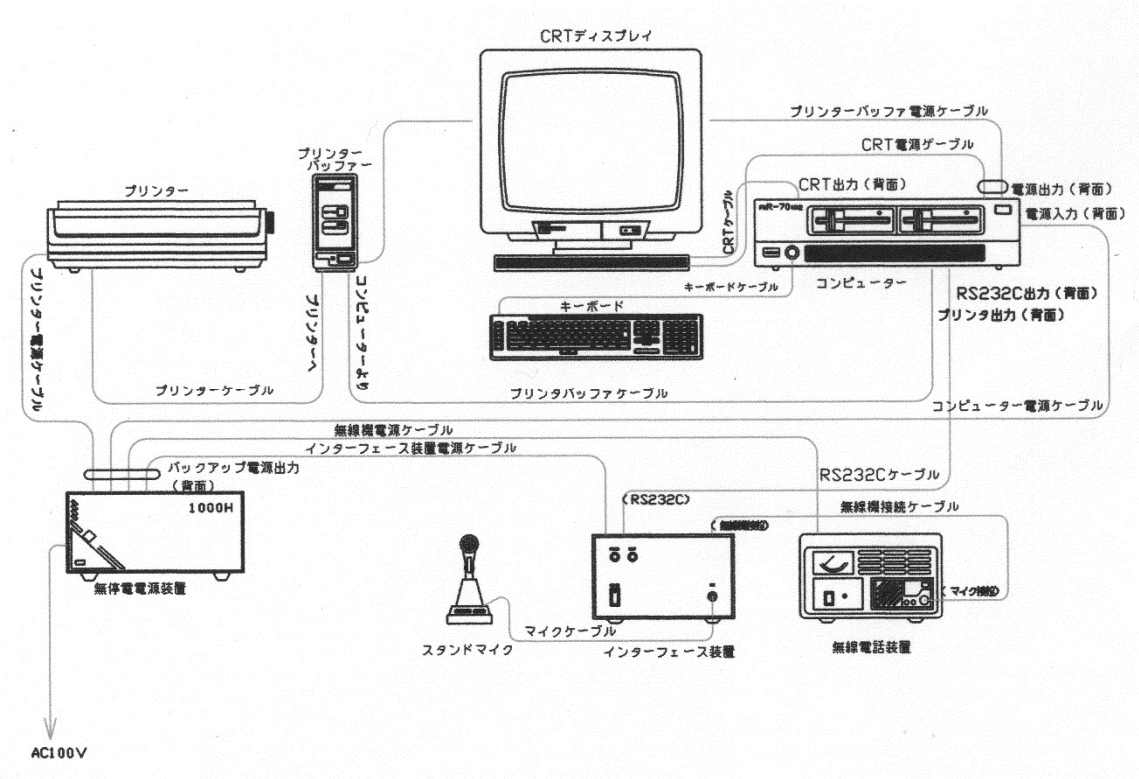


図 8　開発を進めていたシステム

開発環境は、MS-DOS 上で RED、MASM、MS-C、X-ASM でした。MASM と MS-C でパソコンのアプリケーション「GPSID」を、X-ASM は移動端末のファームウエア開発用でした。MS-DOS はシングルユーザー・シングルタスクの OS で、実行中のアプリケーションから次のアプリケーションへ移るには、実行中のアプリケーションを終了して MS-DOS へ戻り、新たに別のアプリケーションを立ち上げる必要がありました。ですから、RED でソースプログラムの記述を行い、ファイルを保存・終了してから、おもむろに MS-C を起動して、ソースファイルをコンパイル、リンクして実行プルグラムを作成します。MS-C を終了して、実行プログラムを起動・実行して動作確認をします。
このように、終了、起動を繰り返して作業をおこないますので、これは今の Windows 時代には考えられない事かも知れませんが、それが現実でした。私の命（いのち）ある内に、マルチタスクのパソコンを使いたいと言う願望がありましたが、これが Windows 95 の登場により実現しました。

１１．３ 携帯電話

この会社に勤めていたとき、携帯電話を初めて使ってみました。と言っても、それは会社の持ち物で、無線の保守担当に持たせて、急ぎの連絡などに利用して、サービスの向上を図ろうと、社長がもくろんだ物でした。社長自身は自分が使う営業車兼自家用の自動車に当時、注目されていた”自動者電話”を設置し、使っていました。当時、見栄でアンテナだけを取り

付けて、自動者電話のユーザーらしく見せかけていた人もいたらしいとか。

初めて、携帯電話に遭遇したのは、いつだったか、明確ではありませんが、東京モノレールのなかで、誰かがいきなり大阪弁で大声で話し始めました。それが携帯電話での通話でした。そのときの携帯電話は、本体は肩掛け式で、送受話器で通話するものでした。

会社で用意した携帯電話は Docomo 製で二つ折りでモノクロ液晶でした。メールの機能はなかったと思います。物珍しさもあり、本来使うべき者より先に使う機会がありました。それから、自分の携帯電話を持つようになったのは、数年後の事で、今ではスマートフォンのユーザーになってしまいました。肩掛け式携帯電話から、スマートフォンまでへの進展は、ユーサーが増えてゆくと、参戦したメーカーの技術競争になり、製品の質が向上し買い換え需要が増え、ユーザーが増えると云うような相乗効果で発展が、加速度的に進んだのでしょう。その影には、部品メーカーの恩恵も大きかったと思います。

私が無線機の開発に取りくんでいた頃は、受信機のフロントエンドには、ヘリカルフィルタや中間周波増幅には水晶フィルタが必須でしたが、スマートフォンに限らず、ガラパゴス携帯でもそれらの部品はチップ化され、小さな部品になっているのでしょう。スマフォンなど、分解した経験はなく、機会があれば、分解して構造を見てみようと思っています。

１１．４ クラシック音楽を体験

Ｅ社社長は、クラシック音楽のマニアでもありました。自宅にはすばらしいステレオ装置がどんと据え付けられて居たようで、かといって、ご自分の趣味を吹聴したり、自慢したりする方ではありませんでした。ある年の年末に、”イタリア合奏団”の来日公演が上野（文化会館だったと記憶しています）で開かれる事になりました。クリスマスプレゼントにとでも言いましょうか、社長は社員全員をその演奏会に招待してくれました。私はあまり、クラシック音楽には興味がなく、買ったレコード（まだ、ＣＤは持っていなかった）もほぼポップスや、日本の演歌がほとんどでした。そこで、演奏される予定の”ヴィバルディーの四季”を購入し、パソコンだったか小型のＣＤプレーヤーで聴きました。そのとき「ああ、この曲か！」と、どこかで聴いたことのある調べに聞き惚れました。いまでも、スマートフォンにコピーして聴くことがありますが、バイオリンの音が心を和ませてくれます。

写真 46 ”四季” CD ジャケット

しかし、演奏会の数日前に、何が原因だったか忘れましたが、社長と意見が合わず口論となり、私は無視するような状態になりました。演奏会前、集合場所などの連絡がありましたが、「私は参加しません。」と宣言してしまい、さらに直前になっても固持していた私に「せっかくＣＤまで買って準備したのだから」と説得され、渋々参加しました。

イタリア合奏団の演奏は「素晴らしかった」と言う以外に表現しようがなかったほどで、勿論はじめての生の演奏を聴く機会でした。演奏の間は、私もそうですが、観客は息を殺す

ように聞き入っていましたが、幕間になると、一斉に咳払いが始まるのが、多少滑稽でした。舞台にはピアノらしきものが置いてあり、途中から演奏者が合奏し始めましたが、ピアノと思っていたのは実はチェンバロ（英語ではハープシコード）で初めてその形とその音を耳にしました。演奏会が終わり、上野駅へ向かう道すがら、社員たちいろいろ意見を言っていましたが、中には「あの場面は、思わず目をつぶりたくなった」と表現する者もいて、私は勝手に目をつぶればいいじゃないかと思った次第でした。その後はレストランで食事をごちそうになったと記憶していますが、社長とは一切口をききませんでした。

1990 年（平成 2 年）11 月頃から始まったと云われているバブル崩壊の兆しのなか、会社の経営も苦しくなり、1995 年(平成 7 年）の夏、開発部門を解散することになり、退職金もなく、会社を離れる事になりました。私にとっては、この会社に移ったときが、私自身の人生のターニングポイントであり、その後の再就職もままならず、大病をしてしまいました。52 歳の冬のことでした。

１２．襲ってきた大病

Ｅ社を退社した私は、失業保険の手続きをしながら、就職活動を始めました。バブル景気はどこへやら、５０歳を過ぎた私に、おいそれと仕事が見つかるわけはありませんでした。知り合いの小さな下請け専門の会社にお世話になる事にしました。１０月のことでした。失業保険の手続きをしていた関係で、保険金支給期限中でしたので、就職が決まった事での就職一時金の手続きをして、その後、うけとりました。この時得た収入が、Ｅ社の退職金かもしれません。

１２．１ それは咳からはじまった

川崎市の多摩区にあるその会社は、下請けの加工組み立てが主の業務でしたが、Ｏ電気工業のある部門の試作品の評価ツールをつくる仕事も請け負っていて、その仕事を担当していました。その担当者は、体が不自由な方でしたが、頭の切れる方でした。そうでしょう、それくらいでないと、責任ある立場には成れないでしょう。私は何が問題だったか忘れてしまいましたが、強烈な叱責を受けてしまいました。忘れてしまったのはそんなに大きな問題では無かったような気がします。そのときは、風邪を引いた様な状態で、声が出ず、黙って叱責を受けていましたが、それがまた、担当者のさらなる怒りを買ったようでした。

その年の年末あたりから、妙な咳が出始めました。特に熱はなく、夜寝ているときに咳き込んで苦しくて、睡眠不足になったり、体がだるい毎日が続きました。いちどなど、苦しさのあまり、寝ている部屋の壁に当たり散らし、蹴飛ばして大きな穴をあけてしまったり、あまりにも苦しくて、寝られず、ずっと起きていたり、またまた、当時住んでいた団地のベランダから飛び降りようか！とさえ思いました。体力が落ちて行く私に、妻が高価な栄養ドリンクを買ってきてくれたりしたのですが、効果はありませんでした。

1996 年（平成 8 年）の年が明け、出勤したその足で会社近くの病院へ行って診察をうけました。ドクター曰く、「この頃の風邪は咳がとまらないんですよ」と云いながら、「念の為

胸部レントゲンを撮ってみましょう」と云うことになりました。ドクターはレントゲン写真をみて、「これは大変だ！病院を紹介するから、そちらに行ってください」と宣告されました。実は、レントゲン写真には、大きく肥大した心臓が映っていたのです。

会社へ戻り、事情を話して、紹介された病院、稲田登戸病院へ行きました。病院の医師は、診断書とレントゲン写真をみて、即入院することを決定しました。人生で初めての入院でした。それ以前は病院のあの消毒薬の臭いと雰囲気がキライで、風邪など引いても病院は敬遠していました。

１２．２ 初めての入院生活

早速、車いすに乗せられて、病室へ連れこまれ、ベッドへ寝かされました。衣服ははぎとられ、何人もの看護婦さん（当時はそうよんでいたので、以降この呼び方をします。）集団暴行されるように、腕には点滴の針を刺され、パンツを脱がされて、おちんちんには暴行、いや膀胱まで管を通されて常時尿が排出出来るような処置をされ、やっと落ち着きました。

写真 47 稲田登戸病院（現在は廃業）

要するに、心筋に水がたまり、肥大し、その結果肺を圧迫して、咳が止まらなかったのではないか？心臓のパワーが落ちて、血液の循環も悪くなり、尿として排出出来ない為、心臓に戻り、心筋に水がたまる・・の悪循環だったのでしょう。心房細動も発生し、ますます心臓のパワーが落ちていたようです。

落ち着いて、一眠りしたのち、電話でこの状況を妻に報告しました。翌日、妻は着替えや、パジャマを持ってきてくれましたが、私の財布からほとんどのお金を抜いて持ち帰りました。「ここではお金はいらないでしょう？」と言って。

闘病生活がはじまりました。点滴と尿袋と、鼻には蒸留水を通した酸素吸引のパイプを入れた状態が一週間ほど続いたでしょうか？主治医が時々、いきなり断りも無く採血して血液中の酸素量を調べ、その量が正常になってから、酸素のパイプはとれ、すこし、心臓がちいさくなってから、常時排尿袋がとれました。膀胱から管をぬくときが痛いとのことでしたが、美人の看護婦さんの手当の恥ずかしさで痛みもどこへやら。やっと風呂に、入った時は、体には垢がずいぶん溜まっていました。点滴が終わり通常の薬の服用にかっわってからは、検査のためのレントゲン室、採血場、心電図をとりにいったり、屋上で日向ぼっこなど、院内をうろうろする毎日でした。「生きてこの病院からでられるのかな？」なんて考える事もありましたが、ＴＶをみたり、本を読んだりの生活のなかで、院内食がダイエットにはよかった

ようで、かなり体重も減りました。

その後、ＭＲＩ検査のため、福生市にある病院へ行き検査してもらいました。往復は妻に付き添ってもらい、検査後は、レストランで食事をしました。ずーっと病院飯でしたので、久しぶりの娑婆の食事とコーヒーをたのしみました。

一番つらかったのが「造影検査」で、造影剤を注入して、心臓の状態を撮影するもので、これは拒否するつもりでしたが、妻が承知してしまいました。検査当日の前の夜、看護婦さんに陰部を剃毛されてしまいました。足の付け根の動脈からカテーテルを挿入するためのアナをあけるからです。当日、麻酔は局部麻酔で、主治医により開始されました。パイプが心臓まで挿入され、造影剤が注入されると、首から尻まで液体（熱い）が流れるのが分かります。医師の指示に従って、呼吸をとめたり、深呼吸したりして撮影が行われました。撮影がおわって、心臓の組織を検査用に採取し、検査、撮影は終了したのですが、医師はたいへんです、開けた穴を塞ぐため、30 分ほど、押さえておくのです。その後、傷口は何かの重しを乗せられて、ICU へ運ばれました。ICU で 12 時間すごすのですが、これは患者が苦しいのです。カテーレルを挿入した足は動かせないので、腰が痛くて溜まりませんでした。その代わりではありませんが、看護婦さんがご飯を食べさせてくれました。

造影検査ののち、主治医から妻と二人で説明を受けました。撮影は 8mm フィルムで行われたようで、心臓を前から、後から撮影しておりました。結果、冠動脈の二カ所に石灰化して、細くなっている部分が見つかりましたが、バイパス手術の必要は無いとの判断でした。サンプル採取した、心筋の組織検査は専門機関で行うとの事で、結論は出ていませんでした。組織検査で、心筋症と判明すれば、心臓移植が必要になるなんて脅かされていましたので、気が気ではありませんでした。その後、造影検査のショックでなのか、心房細動も良くなり、尿の排出が進み、かなり良好になってきて、約一ヶ月半の入院生活を終えることができました。退院時は、それまで着用していたスーツや、パンツのウエストが緩くなり、顔もやせ細り、見分けがつかないほどとは言えないけれど、スマートになりました。退院に際し、生きて出られるかと心配してたのが、そんな思いもどこへやら、退院が嬉しくもあり、一抹の寂しさもありました。というのは、夜など、寝ているうちに咳き込んで、見回りの看護婦さんが、優しく手を握って見守ってくれていた事もありましたが、そんなことはもうおしまいです。

１２．３ 退院してから

退院後は、我が家で、のんびりと療養しました。久しぶりの我が部屋も初めて入る様な感覚でもありました。車を動かそうと機械式パーキングを開き、車に乗り込んで、エンジンキーを回しても「カクン」と音がするだけでエンジン始動はままなりません。知り合いの方の車のバッテリから、ブースターケーブルで私の車のバッテリーと直結して、始動し、車庫から脱出できました。この時の私の車は「ホンダ・アスコットイノーバ」2.3Si でした。私としては初めての”３”ナンバー、オートマチック車でした。

話がそれてしまいますが、初めてオーナーになった CIVIC 1500RSL から数えて５代目までが CIVIC でした。６代目がインテグラで 1600cc、５速マニュアルトランスミッションで

VTEC エンジンを搭載し、出力は 160PS で、初めてエンジンの排気量１リッターあたり100PS を実現した物でした。VTEC はエンジン回転数によってバルブタイミングを替えるもので、高回転時には甲高い金属音のエンジン音が魅力的でした。

仕事の方はといえば、会社の好意で、しばらくはのんびりと働かせてくれましたが、最終的には意見が合わずお暇をいただきました。

１３．ハローワーク

ハローワークで求職活動を開始しました。K 社という、小さな商社で技術部門の従業員を募集していました。今までの経験が生かせる仕事で、早速応募しました。この会社はある意味、面白い会社でした。

１３．１ 商社はこんなもの

商社として、自衛隊や警察の備品を開発、販売する会社でした。微弱電波を利用した無線機、映像伝送装置をも開発・販売していましたので、私は、それらの保守をしたり、開発援助の仕事を担当していました。微弱電波といっても、電波法に規定される範囲であるべきですが、その範囲を超えるものもあったようです。ある地方でのこと、伝送実験中、携帯電話への混信、妨害が発生したこともあったようで、コンプライアンスが欠如しているのか、無知だったのでしょう。私としても無線従事者としてその辺のアドバイスをすべきところでしたが、新人の立場で何も言えなかったのでした。

ほかに、技術面のサポート以外に、かなり重要な作業がありました。それは取り扱っている商品のカタログを作成することでした。そのために、パソコン一式が用意され、エプソンのスキャナー、発売され始めたばかりの、エプソンのデジタルカメラとともにあてがわれました。この頃のパソコンは、NEC の PC9821 で OS が Windows 95、CPU は i486 で、ディスプレイも 1024×768 ドットだったと記憶しています。このころから、PC-98 シリーズは IBM の PC/AT 互換機に勢力を奪われ始めた時期のようでした。

カタログは、デジタルカメラで撮影した商品に特徴、用途、簡単な使用法などの説明文を加えて、マイクロソフトのワードで作成し、カラー印刷、製本しました。なぜ、こんな手作りのカタログを作成したかというと、世間一般に公表出来ない、悪く言えばうさんくさい商品や、特殊用途の商品が多く、印刷所に依頼する事で情報が流出することを避けるためでした。

この会社は１年に満たず退社してしまいました。スキー旅行なども経営者の所有するリゾートマンションが利用できたり、社員の海外旅行、忘年会旅行など、厚生面でも、待遇面でも優遇されていましたが、さきのコンプライアンスの点を含めて、どうしても私の肌に合わなかったのです。まだ、現在も営業しているのでしょうか？どんな営業をしているのでしょうか？

１３．２ 負債を背負い込むことに

また、職探しが始まりました。ある会社など、面接時、履歴書をみて、「こんなすごい経歴の持ち主は使いこなせません。」と云われて、体よく断られた事もありました。年齢も 60 歳を過ぎており、無理もないことでした。

そんな訳で、ゼネラル時代の部下であった S 君が開業した会社 A を訪ねました。1997 年（平成 9 年）4 月のことでした。雇ってもらえる様にとの交渉です。A 社は富士通ゼネラルの製品をいわば設計開発 OEM 生産する会社なので、何とか仕事をすることができました。しかし、結果的には無残な結果となってしまいました。

主に、防災行政無線の統制卓とよばれる遠隔制御器を開発・設計していましたが、わたしは、富士通ゼネラルの担当部所に働きかけ、消防系の無線指令卓を受注し、その開発・設計を行っていました。時には、顧客を訪ね、対応したり結構忙しく働いていました。

他に、S 君が直接関わった会社の紹介で、八王子の豊田にある F 社の受注物件の孫請仕事を引き受けた事がありました。これは結構苦しい仕事でした。中部地方の電力会社の原発に携わる作業員の被爆状況を把握するため、出退時に自動で、作業員が装着した線量計のデーターを、ゲートで収集するための、微弱電波の送受信装置で、元請けの会社が、線量計関係で、私ともう一人の社員との二人がかりで、無線部の開発に取りかかりました。発注元の会社も、元請けの会社も、無線部門が不得意なようで、依頼がまわってきたのでした。

開発といっても、旧型機の更新で、旧機種の開発担当も居なくなってのことだったのです。進捗状況の報告やら、電波関係の測定法とか規格についての報告やらで、開発作業よりも、文書関係の作成に手がかかり、スケジュールも狂ってしまうのが実情でした。特に無線関係を熟知した人が居ないため、回路や測定と言ったことまで説明をして、納得してもらうのが大変でした。無線関係の開発がおわり、回路図や、開発資料、それに各報告書をまとめ、元請けにバトンタッチしました。後に、発注元での担当者が、何かの本の付録か何かで、回路定数をインプットして、計算すると、設計周波数と違う値がでてしまい、回答を求められたようでした。なぜ、このような結果になったか、理解出来る方には理解出来るはずですが。

しかし、段々、受注物件が減ってしまい、会社の運転資金にも困るようになってしまいました。ここでの大失敗は、S 社長から運転資金の借り入れの連帯保証人を依頼され、引き受けたことで、あとで、ひどい目にあいました。給料も遅配となり、積み立てていた退職金をあてにして 1999 年 6 月、やむなく退職しました。ハローワークに求職と雇用保険の適用申請をしましたが、思うように仕事が見つからず。「中川通信設計」なる個人事業を立ち上げ、A 社を通じて、富士通ゼネラルの仕事をするようになりました。取引には口座が必要で、個人で開業した会社では取引口座が持てないので、売り上げの回収は A 社を通じて行う様になりました。そんな訳で、雇用保険を受け取ることなく、また就職先

写真 48 アスコットイノーバ

が決まれば、雇用保険の残額に応じて支給される”支度金”も、起業した場合は適用外で受け取れなかったのです。

A 社を退社後も、仕事は A 社を通じて、細々と進めていましたが、私の売り上げを A 社は勝手に運用してしまい、私の手元に入らなくなりました。結局 A 社社長は、会社の始末をしないまま、自己破産してしまい、私には運転資金に借り入れた負債が残りました。債権は銀行から信用保証協会に移り、そちらに対して支払い義務が生じてしまいました。後に、弁護士の費用がなく、私自身で破産宣告して、免責裁定が下るまで、約半年の月日が必要でした。所有していた自家用車、”アスコット・イノーバー”も手放してしまったのはこの頃でした。

１３．３ 逝ってしまった母

2000 年 2 月の節分の日、母が 90 歳でなくなりました。母親の事は兄夫婦に任せっきりで、帰省の機会も少ないまま、母は逝ってしまいました。仕事で、出かけていた私に姪が、携帯電話に知らせてくれ、翌朝新幹線で故郷へ向かいました。葬儀が終わり、親不孝だったかもしれない私を非難せず、母をよく面倒みてくれた兄嫁に、感謝の気持ちを込めて「ありがとう」と伝えました。

この個人企業を立ち上げたまま、会社でのアルバイト的就業などを続けました。バッテリーメーカーの納入した非常用電源の電池の巡回保守の仕事では、必要となって、ふたたび自動者、スバル・レガシーのワゴン車タイプを中古を５０万円で購入し、各企業に設置された非常用電源の電池の保守点検に利用しました。また、母の法要の為の帰省にも利用しました。保守点検はバッテリーメーカーが締結した契約に基づいて、一定期間中に、充電装置とバッテリーの状態（蒸留水の量と比重および電圧）を検査し、記録します。他に触媒栓と呼ばれる、発生したガスを水に戻し、電解液に戻す装置の汚れを清掃する必要があります。非常用電源は通常ビルの地下に設置され、環境も良くありません。そんな、冬は冷房、夏は暖房状態の中で長時間作業しますので、一度など具合が悪くなり、それを一緒に作業した者が会社に報告してしまい、その仕事も出来なくなりました。

この頃は、UR 住宅（旧公団住宅）に住んでいましたが、その家賃も滞り気味で、預金や生命保険からの借り入れで、自転車操業の様な具合でした。UR 住宅については、家賃支払いが遅れると延滞利息が課せられるのはつらかったし、家賃も高かったので、妻の両親の住む市営住宅の元へ、許可を得て移り住む事にしました。しかし、私は、その市営住宅に同居していることにして、民間アパートを借りました。私の荷物が多かったし、同居するには、少し窮屈だったのです。それと同時、スバルレガシーは同じ団地の親しい娘さんに譲りました。

また、外資系コンピューターメーカーのパソコンのセットアップ作業（企業に、数千台納入する場合、その企業で使う OS や、アプリケーション、ネットワーク等をセットアップする）や、宅配ロッカー（マンションなどに設置し、住人の宅配物を受け取るロッカー）設置会社では、保守で、修理道具・機材をもって、電車で、マンションに設置されたロッカーを保守して回る仕事などをやりました。夏の暑い日では、汗びっしょりとなり、店で下着を購

入して取り替えさせてもらったり、つらい日々でした。後に、会社がエアコン、カーナビ付ワゴン車を購入し、その車で回る事が出来るようになり、ずいぶん楽になりましたが、ちょっと調子をくずし、患った病名がバレて、車での移動は危険と判断され、クビになりました。

宅配ロッカーの供給元の会社から、しばらくは設計・制作などの仕事をもらって、食いつないでゆきました。

１４．Movie に目覚める

2003 年 (平成 15 年)4 月 2 日、神奈川県立上郷高等学校の補助教員として、1 年間勤める事になりました。私の担当は、IT 関連の発達が著しく、高校教育に取り込まれることとなった情報 A（「情報活用の実践力」を育成することを目的としている）の教科の教育の補助をするためのものでした。

１４．１ 高校教師に

ハローワークで、求人票を閲覧していると、公立高校の募集がたくさんありましたので、何校かに応募しました。応募者も多く、かなり狭き門でして、採用にはなりませんでした。この上郷高校は、時期的にも押し迫った頃の募集だったらしく、応募数も少なかったので、ラッキーだったかな？と思いつつ、採用通知をまっていました。また、ダメかと思い、ハローワークの窓口へ求職に行くと、採用通知が届いているはず、と云われ帰宅すると、届いていたのでした。そのときは喜び勇んで、手続きを開始したものでした。

赴任当日、校長に赴任辞令をうけ、職員室へ連れられてまいりました。朝礼で、職員に紹介され、自己紹介の挨拶をして、席につきました。その後、始業式が体育館で行われ、集合した全校生徒の前で、他の新任の先生方と並んで壇上に立ち、紹介され、挨拶をさせられたときには参りました。他の先生方は慣れているでしょうが、こちとら、せいぜい、数人の前で話すことが精一杯でしたから・・・。

写真 49 華やかだったチアリーダーのダンス

補助教員としての仕事は、情報Aのコンピューター室での授業の補助であり、コンピューターの不得意な先生へのお手伝い、学校のホームページの管理などでほかに、学校新聞の発行なども行いました。コンピューター室には40台のNECPC-98シリーズパソコン（OS は Windows 2000)が設置されていますが、これらのソフトウエアのアップデートの保守も含まれていました。

赴任後、教育センターでの研修があり、補助教員とはいえ、生徒やＰＴＡから観れば教員ですから、行動や言動には気をつけなければなりません。生徒との交流、特に、セクハラに

は気をつける様にと、釘をさされました。

１４．２ Ｍｏｖｉｅに目覚める

写真 50 初めてのビデオカメラ NV-GS100K
780 x 420 ドットテープ記録式 2013 年 11 月～

学校行事のうち、特に文化祭は学校の華と云えましょう。生徒たちは、前夜祭や、模擬店、展示ブースなどに力をいれ、職員も参加しての二日間でした。　この学園祭に、友人の MK 氏を招き、楽しんでもらいました。彼は、Movie が趣味でこの行事を撮影して廻り、至ってお気に入りのようでした。私も彼を案内している内、Movie に興味を持ち、Movie Camera を購入してしまいました。そして、学校行事を撮影し、DVD を作成して喜んでいました。この時目覚めたこの趣味、現在も続いています。そのため、コンピューターや、ソフトウエアなどに、かなりの出費をしてしまいました。

この年の 10 月、60 歳を迎えました。一応、地方公務員であり、ボーナスもありがたかったし、厚生年金に加入と共に厚生年金（基礎部分）が受けられるようになり、少し楽になりました。この厚生年金制度はサラリーマン時代、ほとんど気にしていませんでしたが、この時に初めて、感謝さえする気持ちになりました。

当時の県立高校には、ALT（Assistant Language Teacher）という教員がいました。私と同じような補助教員ですが、要するに、Native な英語を話す人が英語担当教諭と授業します。その方は Angela さんといい、オランダ出身の方で、家族はカナダにお住まいのようでした。とても美人で若く、結構仲良くさせて頂き、元町の教会などにもご一緒しました。文化祭には、和服を着て、初めて”茶の湯”を経験されていました。また、授業の様子を撮影した DVD を作成し、クリスマスにカナダへ帰省されるとき、ご家族への土産として、持たせてあげました。退任後は、どうなさっているかはわかりません。

写真 51 お茶を経験する Angela 先生

１４．３ 高校を退任後

翌年、3 月 30 日付けで、楽しく勤めさせて頂いた、上郷高等学校を退任となりました。その日は、職員一同からの花束の贈りものや、歓送会を開いていただきました。退任した後も、高校野球の応援や、文化祭、それに卒業式の Movie 撮影に出かけて行きました。この 1

年間は私にとって、初めての高校生との交流であったのですが、楽しく、無事に勤め上げることができました。

退任月の 3 月は大の月で、31 日まであるのです。なぜ任期は 30 日なんでしょうか？31 日まで在籍すると、翌月の社会保険を負担しなければなりません。また、こんな事もありました。県の監査が入りました。私の通勤定期経路はバスに 2 回と JR 線を使いました。出勤は週 4 日でしたが、事務員の女性は、JR は定期代を、バス料金は現金で支払うように細かく計算して、支給してくれました。監査の結果、バス料金は全線定期券（何回でも、どこの路線で使ってもいい）を使う方が安いと判断しました。その結果、私の、通勤開始日に遡って、差額を給料から差し引かれてしまいました。私は、赴任する際、女性事務員に”全線定期代”のほうが安いと忠告したのに、後の祭りでした。

県立上郷高等学校は、平成 21 年（2009 年）同じ県立港南台高等学校と統合され、上郷高等学校の施設を使った、単位制普通科高校、県立横浜栄高校となりました。

上郷高校に勤めていた 2004 年の正月に、E 君から年賀状が舞い込みました。富士通ゼネラル時代の同僚で、年齢的には後輩と云えます。彼とは、撮影会や写真撮影旅行にいったり、飲み歩いたり、時にはスキーにもゆきました。彼は柔道をやる猛者ですが、なんだか気が合って、彼の実家にも遊びに行きました。妹さんが二人いて、「一人、俺の嫁にくれ」と言ったのですが、「それは本人と交渉してくれ」と言われました。そんな仲であった彼は、私が、米国駐在するときの、大切な Nikon の内の 1 台を買い取ってもらったのでした。私と交代要員の駐在員として米国で 1 ヶ月くらい、引き継ぎなどで、一緒に暮らしました。彼は純粋の日本人（のはず）ですが、一見外国人の雰囲気をもっており、すぐに米国になじんだようです。

私が帰国後、交代した彼は 2 年間駐在し、その後何度も米国暮らしを楽しんだようで、米国での暮らしが、彼の性に合っていたようでした。そんなとき、彼の元へ日本から若い女性（同じ会社の女性）が彼を追いかけ渡米したようでした。その女性こそ、現在の E 夫人です。

年賀状をもらい、懐かしくなって、彼の元を訪問しましたところ、彼は、私にはない、商才があったようで、ファイナンシャル・プランナーなどを独立して営んでいるようで、職探しに苦労した、私にとっては羨ましいかぎりでした。彼には、もうお孫さんがいて、でお爺ちゃんになる事は彼に先を越されてしまいました。

１４．５ ビデオカメラ遍歴

ビデオに目覚めた私はその後も、写真の趣味とともに愛し続け、現在に至っていますが、ビデオカメラは進化し続け、次々と買い換えて買い換えてしまう羽目になってしまいました。2014 年現在、4ｋビデオカメラが発売されていますが、さすがそれにはまだ手を出していません。

写真 52 2 番目のビデオカメラ HDR-HC1 ソニー1080i ハイビジョン仕様、テープ記録式 2005 年 7 月～

ここで、ビデオ関係の話を掘り下げてみま

す。　ビデオの趣味は撮りっ放しではだでめで、作品として後に観て楽しめるよう、編集して残せるようにしました。そのためには、ちょっと高級なパソコンと編集ソフトが必要です。

写真 54 3番目のビデオカメラ HDR-SR12
ソニー、1920 x 1080 ドットハイビジョン仕様、
ハードディスク記録方式、2007 年～

最初のビデオカメラを入手し、DVD を作成するため、Uliead（現 corel）を使いました。そのときのパソコンは、Windows2000 でだったとおもいます。このソフトは、カメラから映像の取り込み（キャプチャ）、タイトルやテロップをつける編集そして DVD に書き込む事がこれ一本で可能でした。それから、暫くしてカメラはハイビジョン化し、1080l（1440×1080）を扱うことの出来る、Ulead Media Studio Pro に交換しました。これはちょっと高価だったのですが、1080i の映像を編集するためでした。Windows XP が普及し始めましたが、それには非対応で、他のソフトウエアを色々さがしました。Adobe や EDIUS など試してみて、一番気にいったのが、Vegas pro （sony mdedia software）シリーズで、現在は Vegas Pro12 です。

写真 53 4番目のビデオカメラ HDR-XR550V
ソニー、1920 x 1080 ドットハイビジョン仕様、
メモリ記録方式、1010 年 2 月～

これには、DVD やブルーレイ書き込みソフトが同梱されており、米国から購入しました。ハイビジョン画像ですと、どうしてもネイテヴな編集にパソコンに負担が重くのしかかってきますが、なぜかこのソフトはプロキシファイルを使っていないと宣言していますが軽いのです。上郷高校へ招待したことのある MK 氏は、Edius を使い倒すと宣言していますが、私は Vegas を使い倒す積もりです。

写真 55 5番目のビデオカメラ ＮＥＸ-ＶＧ20Ｈ
ソニー、1920 x 1080 ドット、ハイビジョン仕様、
メモリ記録方式、ＡＰＳサイズ撮像素子、2012
年 4 月～

5 番目のビデオカメラから、映像は 60ｐ規格になり、ますます負荷は重くなってきてしまいましたが、現在のパソコン（自作：Core i7 と Windows7）で軽々とは云えませんが、難なく使えています。完成した作品は、You tube にアップしています。

写真 56 現在のビデオカメラ ＮＥＸ-ＶＧ30Ｈ
ソニー、ＶＧ-20Ｈの発展系で電動ズームとなった

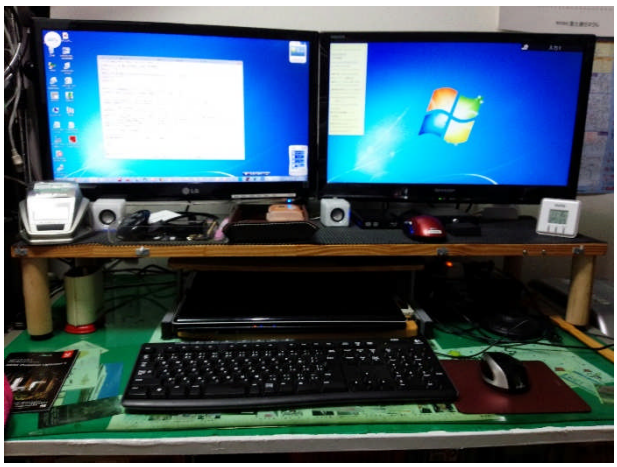


写真 57 編集環境 PC は画面外の脇に配置

１５．自己破産

上郷高校に勤めながらも、設計の仕事を時々受注していましたが、高校を退任後は、それでは稼ぎが不十分です。その仕事を受注しなくても定期的に収入がえられるよう、仕事探しを始めました。そして、都立高校の IT アドバイザーに応募しました。これは、派遣会社が東京都から受注して、募集したものでした。条件は余り良くなく、勤務も毎日ではなく、まして、通勤費も支払われないものでした。この祭、しばらく家を派慣れようと、島嶼(とうしょ)の高校を希望しました。

その頃になって、A 社の負債を銀行から引き継いだ、信用保証協会からの催促の電話や、郵便が多く来るようになりました。とうてい、割賦返済もままならないので、この負債を始末するには、自己破産するしか手がないのですが、それにしても弁護士費用なども出せません。横浜地方裁判所に行き、手続きの為の書類を持ち帰り、自分自身で色々調査して、申請書を作りました。

１５．１ 苦しかった大島での生活

2004 年 6 月、都立大島高校定時制の IT アドバイザーとして、赴任するため、小雨の東京竹芝桟橋から、東海汽船のジェット・ホイルで、大島・元町港へ向かいました。高校での業務は先生の IT 関係のサポートや、ホームページ保守、などです。出勤は、定時制なので、17 時頃から、21 時頃までで、週 4 日程度でした。

写真 58 都立大島高校

高校が夏休みとなって、大島をはなれ、家へもどりました。裁判所から、自己破産申請書類を持ち帰ったのに、提出されていないとの連絡があり、準備していた書類一式を持参し、裁判所へ出頭、裁判官と面談の上提出しました。数週間後、受理された旨の通知があり、債務者である、信用保証協会にその旨の連絡が届いたらしく、督促はなくなりました。しかし、提出した、銀行預金通帳のコピーに、定期預金があり、そのうちの 30 万円余りを弁護士費用に充てるため、裁判所に納付しろとの連絡がありましたが、月末の家賃と生活費にあてるため、出来ないと断りました。月末に支払った結果の預金通帳のコピーを提出することを条件に認められました。

写真 59 三原山

大島での生活はひどい物でした。収入は少ない為、出費を抑えなければなりませんが、食事する店とかマーケットが少ない上、営業時間も短く、購入しそびれて、ひもじい思いをしました。まして、交通機関が乏しく、歩いて 40 分

の道のりを往復しました。その後は、派遣会社から自転車が貸与され、雨の日以外は、通勤は楽になりました。それに、夕食の件も、生徒や先生の給食を利用することが出来るようになりました。また、生活面では、滞在は旅館で、朝食付でした。仕事は、夜なので、昼間は自転車で、カメラやビデオカメラを持って、撮影してまわり、それなりにエンジョイしましたが、やはり寂しさは消えませんでした。

定時制には年配の生徒を含め 10 名程度でしたが、夏の学校行事のうち、夏のリクリエーションとして、海辺でのバーベキューが行われ、それに参加させてもらいました。あいにくの雨でしたが、それなりに楽しめました。また、先生の一人が、自家用車で三原山や大島公園などに連れて行ってくれたのも良い思い出となりました。

写真 60 ジェット・ホイル　「愛号」

10 月 10 日、学校行事で私には用務がないため、休みとなって横浜へ戻りました。この日は、いつもと違い「カメリア丸」を利用しました。日曜日であったため竹芝桟橋へは横浜港を経由する便で、大島元町を昼過ぎ出帆し、夕方横浜に入港しました。4 時間の航海中、ずっと海を眺めていて、横浜港に入港近づくと、港の灯りがとてもきれいであったことが思い出されます。

秋がすぎ、冬になって、体調がおかしくなってきました。腹痛や、食欲不振の日が続き、これ以上の島での勤務は無理となり、派遣会社と相談して、年内で勤務を打ち切りたいとの要望が了承されました。島を去る日は、大島高校が冬休みに入った日で、昼のジェット・ホイルで大島を離れ、東京竹芝桟橋へ帰ってきました。

大島に赴任中に撮りためた写真やビデオを「伊豆大島」と題したビデオにまとめ、何度も何度も改編しまとめ上げて、DVD を作成し、お世話になった、大島高校の先生にお送りしたり、最終的に AVCHD に変換して YouTube にアップロードしてあります。

１５．２ 真空装置の会社に就職

自宅へ戻って、荷物を解いて、約 10 日後、ハローワークで見つけた、K 社にパートタイマーでしたが、運良く採用されました。K 社は本業は真空機器メーカで、その中の、電機関係の仕事もあり、その仕事をと思っていましたが、機構関係の組み立てなどの仕事からはじまりました。しかし、今までとは違って、社員並に働けること、そのうちに、CAD 設計の仕事も出来ると思って、がんばってみました。

顧客は、大学、理化学研究所、電力会社、有名電機メーカーなどそうそうたるもので、実験用、生産用の機器を、多品種の受注生産をおこなっており、この会社も面白い会社と云えました。

当初の仕事は、ステンレス磨きや、溶接された、ステンレス製のパーツの溶接焼けの取り

去り作業、パーツのアセトンによる洗浄でして、いやな臭いになやまされました。そのほかにも、自動者で協力工場への加工品の運送・引き取りに走り、産業廃棄物の運搬、などもやりました。そのうちに、CAD の心得や、電機の知識があるので、設計部門の仕事をさせてもらうようになりました。

年が明けた 2005 年（平成 17 年）1 月 21 日、横浜地方裁判所から”免責裁定通知”が送られてきて、負債が免責される事になりました。自己破産手続きも弁護士にたよらずとも、私のように素人でも出来るのです。

CAD は K 社では Micro CADAM をメインに使っていました。数ヶ月間使いましたが、ランセンスが不足するようになり、ほとんど使われていなかった AutoCAD を使う羽目になってしまいました。K 社でも、AutoCAD を買ったものの、使える社員がやめてしまい、余り慣れていなかった私が、マニュアルと首っ引きで格闘して、何とか使えるようになりましたが、他の社員が使う CAD とデーターの整合をとるのがたいへんでした。Micro CADAM の出力図面を AutoCAD の図面に変換するには、いったん DXF というファイル型式に変換後、AutoCAD に取り込む事ができました。逆の場合も DXF を介して Micro CADAM に取り込みました。この DXF ファイル型式は AutoCAD の開発元である、Auto
Disk 社が AutoCAD の各バージョンでのデータ互換を計るためのものでしたが、その内容が公開され、各 CAD メーカーも DXF ファイルのフォーマットをサポートするようになりましたが、完全に互換性を保てない場合もあるようです。

また、OS はというと、Windows XP の時代でした。この OS は、それまでの Winndows95 系と Windows NT（NT: New Technology の略で強力なファイルシステムを持っていた）を統合したような OS でユーザーに好評で非常に長く使われました。しかし、K 社には IBM の PC/AT 互換機（標準となった IBM のパソコンを互換機と呼ぶのは変ですが、）のパソコンによる Windows95 や Windows98 などの OS も、CAD ソフトのバージョンの関係から、まだ使われていました。

私は、パートタイマーの身で、パソコンも古いタイプをあてがわれ、それに CADAM のライセンスも不足していました。そこで自分で組み立てた、それこそ PC/AT 互換機仕様の半完成ショップブランド機に Windows XP をインストールして会社に持ち込み、AutoCAD をインストールして使用していました。

その頃に、パート女性が入社してきました。若くはありませんでしたが、気立てのいい、笑顔の可愛い女性でした。その女性に他のベテランを差し置いて、CAD を教える事になりました。ベテランは忙しくて、女性の面倒はみられなかったのでしょう。最初は、私も覚え立ての Micro CADAM を教えましたが、そのうち AutoCAD も教えました。

2006 年ころ、和光市にある理化学研究所（以後、理研と呼びます）向けの真空装置を、若い社員、I 君とタッグを組んで約 1 ヶ月半、休みなしの毎日残業で、設計、組み立て、調整などの作業を経て納入した事もありました。この仕事は、古くなった装置を更新するためのもので、私たちの K 社が受注しました。しかし、他に大物の受注があったため、そちらに人手がとられ、この理研の物件は、I 君と機構設計を開始し、製造段階で、ベテランの YH 氏が調整・検査作業に加わって進めてゆきました。この仕事は、旧型の真空装置を更新する

もので、機構設計は、運良く旧機の資料が残っていたため、その資料を参考にして進める事ができましたが、資料から読み取れない情報は、独自に設計しなければなりませんでした。この装置には、可動部分が多くあり、それを制御する電気回路も組み込む必要があり、その設計も必要でした。結局、機構設計と電気設計および組み立て配線を担当することになりました。

真空装置に使う材料はステンレス鋼が主で SUS304 と呼ばれるものがほとんどでした。ステンレスは、錆びにくく堅いもので、SUS304 は鉄(Fe)、クローム(Cr)18%、ニッケル(Ni)8%の合金で、18・8 ステンレスと云われています。この材料で、小さなパーツからチャンバー（小さな部屋という意味）と呼ばれる装置を構成する大きなパーツを設計して強力工場や、社内加工部で作成し組み立てます。真空装置なので、機密を保つ為に、溶接で組み上げたり、取り外しが必要な接合部は、高性能なパッキンを使ってボルト止めします。

真空装置に使われるステンレスですが、こんな話を聞きました。チャンバーをステンレスで作成したときの事、完成後、真空耐圧をテストするため、リーク・ディテクタという装置を使って、チャンバー内を真空にして行きますが、どうしても規定の真空度に上がらなかったのでした。正常ですと、10^{-12}(Pa・m3/sec)程度の真空度を示すのですが、どうしても上がらなく、よく調べた結果、ステンレスに気孔が発見され、そこからリーク（漏れ）して真空度が上がらなかったとのことでした。そのような気孔とか、溶接不良とか、嵌合不良などリークの発見には”ヘリウムガス”を疑われる部分に吹き付けて、真空度を監視すれば、真空度が下がるので発見できます。というのは、ヘリウムガスは空気に比べて分子が小さく気孔などを通り抜け安くなる為です。これらの話は、ベテラン管理職の YH 氏から学んだものでした。氏は品質管理に長けたかたで、普段は目立たない控えめな方でした。

理研の仕事では、I 君と YH 氏は社員ですので、残業代も無く約 1 ヶ月半の間、休日も無く作業を進めて行きましたが、私は時給のパートだったため、働けば、働いた時間だけ収入になり、そのときはかなり稼げました。

2007 年夏、知り合いだった、Q 社（富士通関連会社）の幹部の紹介で、同社の開発する機器のソフトウエア設計の仕事を個人で受注したため、約 2 年半勤めた K 社を去ることにしました。

１６．ソフトウエア開発

新しい仕事はソフトウエア開発でした。Q社は佐世保市にあり、防災行政無線システムの遠隔制御器を開発するためのもので、私は現地の協力会社の担当と二人でソフトウエアを担当しました。

１６．１ 打ち合わせ

早速、1 回目の打ち合わせのため、佐世保に飛びました。2007 年 8 月 6 日、暫くぶりの飛行機利用で、ちょっと運賃の安い、ＳＮＡ（Sky Net Asia）33 便を利用しました。この便の機長は面白い方で、エンジン始動がうまく行かず、出発がずいぶん遅れてしまった事と、

地上の電源車を使ってうまく始動できたとの事を機内アナウンスで乗客に伝えました。そして、「これから長崎空港へ急いで参ります」と付け加えました。あれ！飛行機は、そんなに勝手にスピードアップ出来るのかいな？と疑問に思いましたが、事実、長崎空港には遅れを取り戻し、定刻に近い時刻に到着しました。

写真 61 軍艦が停泊する佐世保港

開発仕様書について、ハードウエア設計担当と、現地ソフトウエア担当ほか、関係者が参加して、打ち合わせが開始されました。その内容は契約上、公表出来ないことになっていますが、ターゲットとなる CPU はルネサンス・テクノロジ社製 RISC プロセッサ SH7144SH で、開発言語は同社提供の C 言語で、同社の組み込み関数が提供されています。開発環境も同社の提供によるものです。打ち合わせ後、CPU 並びに海発環境のドキュメントおよび、回路設計図は Q 社から提供され、それらに基づいて開発をすすめて行きました。

夏の暑い中、開発仕様書、プロセッサマニュアル、C 言語マニュアルと取り組んで、自宅でプログラムを書き始めました。その中で発生した疑問点や問題点について、再度打ち合わせの会合がもたれました。

苦労した点、それは回路設計者が、ソフトウエアの事を余り知らなくて、プログラミングに負担がかかる回路になっていました。SH7144SH はマイクロコントローラとも呼ぶ事が出来るもので、当然出力、入力ポート（I/O ポートといいます）をたくさん持っています。しかし、今回の設計では、それだけでは不足で、FPGA と言われる素子を使って作成していました。FPGA は Field Programmable Gate Array の略で、現場で書き換えが出来る理論ゲートが格子状に並んでいる LSI、で通電していない時は何でもないのですが、電源がオンとなり、マイクロコントローラからの起動信号で、ROM にプログラミングされた回路を瞬時に構成するもので、デジタル IC などで構成するより、部品点数も場所も少なく出来ます。そこで、マイクロコントローラ内の I/O ポートが足りなくなっても FPGA 内に準備することが出来ます。

I/O ポートは、普通 8 個（8 ビット）単位で構成されます。たとえば出力ならば、表示ランプ 0〜7 までを、点灯（11111111 を出力する）させたり、消灯（00000000 を出力する）したりするとします。いま、0〜8 のランプが点灯しているとして、（11111111）がポートに出力されていることになります。ここで、0 番目（右から 0 番目、1 番目〜7 番目とよびます）が”0”となる（1111110）を出力すれば良いことになります。しかしマイクロコントローラ自身は、このポートがどう云う状況を保持しているかは知りません。マイクロコントローラは I/O ポートの状況をソフトウエアで読み込む事が出来るので、ポートの状態（11111111）を読み込んで、0 番目だけを”0”にする（11111110）と AND 演算を行い I/O ポートに出力すればいいわけです。このような操作を bit 演算といいますが、I/O ポートに

保持された状態をマイクロコントローラが読み込める機能が備わっています。FPGA 内に構成された I/O ポートにはその機能はありませんでした。従って、その情報を内部のメモリに保存しておく必要があり、そのメモリを確保し、出力するたびに、出力したデーターを保存するようプログラミングしましたし、担当者に改善点として指摘しました。受け留めてくれたでしょうか？

１６．２ デバッグ作業

そして、ソフトウエアの開発が、デバッグを残すのみとなった 11 月、佐世保の Q 社に出向き、デバッグ作業を開始しました。はじめて、ハードウエアに乗せてみて、約 1 ヶ月かけて作業を進めて参りました。滞在は最初はホテルでしたが、ホテル代と比較しても、マンスリーマンションのほうが経費が節約出来るとして、佐世保駅前のマンションを契約し、食事は、コンビニなどで購入、便利に過ごせました。作業の関係上、持参したパソコンをインターネットに接続する必要がありましたが、Q 社のネットワークを利用することは、セキュリティの関係で、出来ませんでしたので、Docomo の無線端末を契約しました。こんな努力も甲斐がなく、デバッグ完了まえに、現地のソフトウエア担当に後を任せ、Q 社を後にすることになりました。デバッグ作業が長引いたので、どうやら、予算がオーバーしそうということのようで、誠に残念な結果でした。契約では、仕事を順次発注する約束でしたが、口約束でしたので、その後はその気配はなく、また仕事がなくなってしまい、仕事探しを始めました。

佐世保と言えば、長崎と同じく”さらうどん”とか”ちゃんぽん”の店があり、好きで、よく食べました。また、首都圏でも見かける”佐世保バーガー”の本場であり、是非一度と試してみました。物珍しさもあって、店に入ってみました。店にもよるのでしょうが、正直にいって、川碕などの商業施設のフードコードで食べたもののほうが、美味しかった気がします。聴くところによると、”佐世保バーガー”と名乗るには認定制度があり、それをクリヤーする必要があるそうです。

話がそれますが、佐世保はこの時の訪問が初めてでしたが、長崎市には富士通ゼネラル時代、よく出張で訪れましたし、バイクのツーリングでも、訪れました。長崎には JA6AYO ほか HAM 仲間との交流がありました。出張では、長崎消防署での仕事を思い出します。あれは、無線の中継所を山頂に設置するときの事で、夜遅くなり、あたりはまっくらで、現地代理店の社長や、署員の方々と下山するのに、足下が見えず、滑って転けてしまったり大変苦労しました。そのときは、対岸の稲佐山の夜景が目に入り、きれいだったことを思いだします。

１７．AutoCAD を学ぶ

2008 年(平成 20 年)1 月 22 日、運良く横浜市の F 社に潜り込む事ができました。ハローワークから応募したもので、社長から面接に直接電話で呼び出されました。私がプログラミングが出来ること、AutoCAD も使える事で、パートでしたが、採用されました。

１７．１ 就職できたものの

この会社は、プラントに火災発生した場合の消火設備の配置や消火作業を、3 次元 AutoCAD 上でシュミレーションするためのソフトウエアを作成して、供給する事を主目的としていました。そのために、AutoCAD 上で動作するプログラミング言語、AutoLisp を使える必要がありました。そのためのプログラマも当然居て、私は学びながら、そのプログラマの手伝いをすることになりました。ですが、3 次元 CAD は初めて使いましたし、そのプログラミング言語は、いままでやってきた言語と違い、理解するのに苦労しました。

AutoCAD 上で何をやるか？ですが、通常は、キーボードやマウスから、図面を書くための座標や数値を入力してゆきますが、この場合、プラントの敷地の図面から、データーを入力して、プラントを３D で再現してゆきます。そのとき、たとえば貯蔵タンクなどを配置する場合、いくつものタンクを一つずつ書いていたのでは手間がかかりますので、直径と高さ、位置などのデータから、自動描画させるためのコマンドがあれば便利です。そのためのコマンドを Lisp で作成するわけで、消火機材や、敷地内のすべての物が作画出来るよう、コマンドを作成していました。これと平行して、三次元 CAD の習得も必要でした。

会社が入るビルは港がよく見える場所にあり、夏の花火など見物するにはうってつけの場所でしたが、花火を撮影しようと試みたのでしたが、失敗でした。窓が十分に開かないので、ガラス越しに撮影すると、内部の様子が全部写り込んで、哀れな物でした。しかし、若干、他のビルの影になることもありましたが、見るには十分に楽しめました。

ほかに、作成したシュミレーション・ソフトウエアのマニュアルも作成しました。一般的に AutoCAD は難しいと云われていまして、マニュアルは必須でした。これは Windows の HELP 作成アプリを使い、うまく作成できました。自己満足かもしれませんが。

景気の波に左右され、人員も増員したり、減らしたりで、所詮臨時雇いの身ですので、リーダー格の女性から、期限の１ヶ月まえにクビを宣言されました。それならばと、期限まえに自分から身を引きました。秋風がしみてきた 10 月のことでした。それでも、いままで経験しなかった、３D CAD を学べて、良かったと考えています。

１７．２ 開き直りも

しかし、それからが大変で、厚生年金も全額支給されるようになっていましたが、やはり、稼ぎが無いと不安で、自分の趣味の物などに手が出ませんでした。あちこち応募書類をだすのですが、面接でさえ出来ない状態が続きました。ある、日曜大工などの材料や、電子部品などを販売する店も応募しましたが、音沙汰なしでした。もう、あの店は利用するものか！と勝手に思ったりしたものでした。

写真 62 飯山白山森林公園にて

そんなとき知り合いを通して、DVD の編集の仕事を請け負いました。その方は、グループで外国旅行を楽しんだのち、撮影したビデオを編集したり、テロップをいれ、ケース入りの DVD を作成しました。これも、定期的に需要があればいいのですが、そうは行きません。

半分あきらめの状態で、親しい友人 MK 氏と NHK の映像展示を見に行ったり、撮影を兼ねたハイキングにいって、憂さ晴らしをしましたが、心から、楽しめませんでした。親しい友人 MK 氏に、山中で捕まえた”トカゲ”の尻尾をつまんで、「ほれ！」と見せたところ、まじめ顔で、私の手を振り払いました。は虫類が苦手だったのですね？私も大きい蛇はダメですが。また、彼は高所恐怖症でした。彼の暴露話でした。

考えあぐね、思いついたのが、もと勤めていた、K 社にもう一度お願いしてはどうかと。仲よくしてくれていた、幹部のかたに、恥をしのんで、お願いしてみました。数日後のち、OK がでました。私には、過去の経験から、仕事を教えなくても即戦力になると解釈されたのでした。年も押し迫りそうな 11 月のことでした。

１７．３ 再びK社に

久しぶりに K 社に出社しました。今回は、完全に設計の要員としての契約で、過去の雑用からは解放されました。収入も、時間給ではなく社員と同じく、定額制いで、残業しても、休日出勤しても、休暇を取っても同額でした。くわえて、交通費はなしでした。作業用のパソコンも、Note 型を持ち込み、ソフトは自分で調達した、AutoCAD 2010 で互換製品でした。このソフトは ZWCAD で、本家 AutoCAD よりかなり安く、私の様な資本のない者にとっては有益でした。

仕事は機構設計と云っても電気がらみで、装置を動かしたり、監視する為の制御装置の設計が主で、それらは高さ約 1700～2000mm、幅 570mm、奥行き 500mm のラックに、外部設置する装置（たとえば真空ポンプ・圧力センサー等）のコントローラや、システム全体の操作・制御部を収納するようレイアウトの設計をします。また、電気関係では、装置の外部設置装置のコントローラ、電源部などの相互間の接続や操作・制御部との相互接続を設計します。このような装置は、各ユーザーの仕様に則り、設計をしますので、同じ設計が繰り返される事はほとんど無く、毎回担当営業なり、上からの指示があります。

2010 年の秋、厚木市で「B１グルメ」大会があり、友人の KM 氏と見物に行き、会場内を歩き回り、好みのラーメンなどを楽しんできました。その翌日から左足の膝に痛みが走り始めました。通勤の為の徒歩も約 30 メートル歩くたび休憩を撮らなければならないほどで、杖に頼りながら、我慢していました。約 1 週間後、病院のスポーツ医学担当の先生にみてもらい、レントゲン撮影し、2 週間後の MRI 検査の予約をしました。MRI でも特に悪いところが発見出来ず、とうとう 1 週間ほど休みをもらって様子をみることにしました。何とか持ち直したものの、工場で、電気配線チェック中、無理な姿勢が祟ったのか、腰に痛みが走りました。翌日には再度、左足の膝に痛みが移り、数十メートルしか歩けなくなるほどでした。以前の病院のスポーツ医学担当の先生にかかりましたがおいそれと直る物ではありませんでした。痛み止めの注射や座薬を処方してもらったり、開業医を訪ねたり、はたまた気功にもかかりました。気功師は、「これは直りません」と宣言し、診察料はとりませんでした。無駄

と思いつつ温泉にもゆきましたが、会社に相談して１ヶ月ほどの休みをもらうことにしました。何かの用事で、横浜駅の構内を西口から東口方面へ歩いているとき、痛みが我慢できず、うずくまって休んでいると、若い女性が親切にも「大丈夫ですか？」と声をかけてくれて嬉しく思いました。休みを取った１ヶ月間、風呂に入って、体を十分温めて、洗い場で足踏み運動を続けたりして必死で頑張りました。ブロック注射の治療を受けようと、別の病院へ行き、まえの病院で撮った MRI 写真を、担当医に見せると、脊椎の中の神経が狭窄されている様子が見て取れ、それが原因と思われましたが、いざ、ブロック注射を実行する段になり、”同意書”が必要な処置とわかり、怖くなって取りやめました。休みが終わる頃になって、何となく痛みが遠ざかって行き、痛みは完全に取れないまでも、何とか回復しました。それからは、その痛みは嘘の様にきえてしまいました。

１７．４ 東日本大震災発生

2011 年(平成 23 年）3 月 11 日 14 時 46 分、未曾有の災害が発生しました。「東日本大震災」です。当日、私は１階の工場（通常は３階にある設計室）で作業していましたが、突然グラッときました。過去に経験のない地震でした。工場には、高くて広いシャッターがあり、それが大きな音をたて始めました。地震とわかると、外につながる扉を急いで開き、同僚の男性と閉まらないように押さえていました。長い揺れがおさまって、暫くして、停電してしまいました。携帯電話のワンセグＴＶでニュースをみて、マグニチュード 7.9 と発表（最終的に 9.0）され、大きな津波が発生し、押し寄せてくる状態を中継していました。

地震から約 1 時間後に遡上高 14-15m の津波に襲われた東京電力福島第一原子力発電所は、全電源を喪失して原子炉を冷却できなくなり、1 号機・2 号機・3 号機で炉心溶融（メルトダウン）が発生し、水素爆発により原子炉建屋が吹き飛び、大量の放射性物質の漏洩を伴う重大な原子力事故に発展しました。原発のある福島県浜通りを中心に、周辺一帯の福島県住民は避難を余儀なくされ、その避難は長期化してしまいました。

会社内は停電以外ほとんど被害はありませんでしたが、取引していた工場が津波の被害に遭ったことが、後日判明し、以降の加工品の調達が困難になってしまいました。当日は帰宅する事にしたのですが、交通機関は混乱し、ＪＲは運行していませんでしたので、バスを乗り継いでと思い、バス停でまっていましたが、何台ものバスが通過し、帰宅をあきらめ、会社で泊まることにしました。その時点で帰宅困難となり、国道を徒歩で帰宅する人の列が出来ていました。コンビニでパンとかおにぎりやお茶、ビールを買い込み、会社へもどりましたが、電車通勤の社員は覚悟を決めて、寝る態勢になっていました。翌日、自宅へ戻ると心配していた家具の転倒やパソコンのモニターは無事でしたが、タンスの引き出しが、飛び出していました。

震災や原発事故後は、電車の間引きで通勤がスムーズに出来なくなったり、計画停電では会社の仕事も不便でした。それも日が経つにつれ、被災地を訪れることも無く、段々とわすれ去る事になります。TV ニュースの報道番組では被災地の状況が克明に放送され、出来ることなら、自分のカメラでその状況を記録しておきたかったのですが、費用の面で断念しました。

１７．５ 携わった仕事

今回のＫ社での担当した物件のうち、震災の翌年、平成 12 年２月頃から始めた、Br 工業向けの仕事は良く覚えています。営業担当から、設計の内容を聞き取り、開始しました。要するに電気関係の制御装置のみで、それも、ラックに収納する装置や、外部配置する装置のコントローラがほとんど現地調達や現地での組込みとなって、レイアウト設計、相互接続設計は装置のマニュアルとか、仕様書に頼るしかありませんでした。仕様書などがあれば、現物が無くても設計は可能ですが、細かな部分が抜けていて、後で「あれ〜こんなはずじゃ！」なんてこともありました。

電気関係の設計では、コンピューターによる制御なので、その周辺やインターフェースの設計が重要となります。プログラム本体は別のベテラン社員が担当しますが、その担当の頭の中にある構想とのすりあわせが重要で、その担当が、出張などで不在気味で打ち合わせが不十分な場合は「未確定事項」として後回しになってしまいます。

コンピューターと云っても、私が過去携わってきたメソッドとは違うもので、しかも私はＫ社ではプログラムには関わっておりませんでした。たとえ関わったとしても、納入後の仕様変更・追加の対応やバグの修正には出張が必要で、パート社員の立場では対応させられないとの意向が、その理由でしたし、私にとっては、出張は敬遠したかったので、好都合でした。

過去に携わってきたものと違うプログラミングとは異なるメソッドとは、PLC(Programmable Logic Controller）と呼ばれる制御装置（コンピューター）を使用する方法でした。元来リレーで回路を構成(リレーシーケンス）したのですが、それをコンピューターに置き換えた制御装置で、キーエンス、オムロン、三菱電機などから販売されております。この装置の特徴と云えるのはプログラミング法で、いままで携わってきた、アセンブラとか、Ｃとは異種のもので、ラダー言語とも云われるもので、本来のリレーによる論理回路を記述するために考案され、記述表現がラダー（梯子）の様なのでそう呼ばれたそうです。その記述表現ルールに従って記述された図をメーカーから提供されたツールでコンパイルし、装置に転送して動作させるものです。

興味はありました。実験用に使える装置もありましたが、どっぷりとはまり込んでしまう性格なので、ツールはインストールしたのですが、ほんの一部の機能しか使わず、プログラミングはさけ、設計だけにとどめ置きました。

Br 工業向け物件は、機構組み立て作業は行いましたが、電気配線は外注工場に依頼し、取扱説明書を作成しました。工場から組み上がって来た装置を配線チェックし、一応完了し、出荷しました。ここからはプログラム担当にバトンタッチです。

現地に出向いて、営業担当と設置作業と、機器の組み込みのなかで、やはり不都合がでてしまったり、電気設計でも不備がでてしまいましたが、何とかプログラムインストール、調整・検査と進める事ができたようでした。あとで、上司でもあった、プログラム担当（Sz 氏）から、注意やら、嫌みを言われたことは言うまでもありません。

１７．６ 帰省

2000 年（平成 12 年）の母の葬儀、法要などで帰省してから 12 年後の 2014 年（平成 24 年）春、久しぶりに帰省しました。この年は古稀を迎えるので、一つの区切りとして、故郷のみんなに逢っておこうとの気持ちと、母の墓参を兼ねての帰省でした。

帰省は勿論、新幹線を利用しました。新幹線と云えば、当時でも 48 年間も死亡事故ゼロを記録していました。新横浜を出発して、岡山へは 3 時間 20 分で到着します。岡山から、土讃線の多度津まで、本四連絡線を経由して 45 分、乗り換え時間を入れても横浜から 5 時間で到着します。昔に比べ、ずいぶん速くなったものです。

新幹線の営業開始は、東京オリンピックの直前の 1964 年（昭和 39 年）10 月 1 日でした。当時の国鉄総裁や技術者の努力が叶い、この夢の超特急が実現したのでした。ゼネラルに努め始めはじめて数年後の 1970 年（昭和 45 年）3 月頃、神戸へ出張しました。そのとき初めて新幹線を利用し、現在まで、仕事に、旅行に数え切れないほど利用しました。新幹線も常に発展し続け、北海道から九州までつながるところまで来ています。これからは、リニア新幹線にバトンタッチされることになるでしょう。

１７．７ リタイヤ

そろそろ古稀を迎えるこの頃になって、何とか頑張って来たのですが、業務上でミスを犯してしまいました。設計した、パネルの加工図面の取り付けるべく部品を間違えて設計し、それを先出の Sz 氏が発注してしまいました。言い訳になりますが、Sz 氏が発注前の確認作業が十分であれば防げたと考えています。彼は瞬間湯沸かし器並みに燃え上がり、私はたえられなくなって、勤務契約を打ち切る事を総務部長につげ、了承されました。そして、２０１２年９月付けで「中川通信設計」の廃業届けを横浜中税務署に提出し、完全に仕事からリタイヤしました。

１８．さらに Movie に

2012 年 6 月 22 日、K 社との契約を解除し、毎日が日曜日となってしまいました。特にやるべき事が無い事、これが生きがいをなくしてしまったような日々でしたしこれからも続くでしょう。結構、多趣味な私でもです。やはり働くことが好きと自負していた私には、胸にぽっかりと穴が空いたような毎日で、福沢諭吉の「心訓」に書かれている「世の中で一番さびしい事はする仕事のない事です。」そのものでした。そこで、テーマを決めて活動していた Movie にさらに力をいれる事にしました。テーマと言うのは、横浜市内の名所とか、横浜初めて物語りなどを紹介する”わが街ヨコハマ”の作成です。2013 年(平成 25 年)4 月に買い換えたカメラ VG-30H を駆使して撮影し、作品として完成させ、YouTube に投稿することでした。

１８．１ 横浜市営電車

遡ること約 50 年、初めて上京してから数年後の昭和 42 年頃、横浜に下宿していた F 君をたずねたり、遊びに訪れたころの横浜市内には、市電が走っていました。しかし、昭和 47 年、トロリーバスとともに廃止されました。昭和 51 年に結婚以来、横浜・本牧に住むようになりましたが、市電は廃止されており、そのこともすっかり忘れていました。思い出したのは最近の事で、何がきっかけだったか、今なお思い出せません。写真をどこかでみて、妙に郷愁を感じ、”わが街ヨコハマ”のテーマの一つに加えたのでした。

写真 63 横浜 市電保存館

当時の市電はたくさんのルートがありましたが、私が住んでいる”本牧”を中心に取材や、資料集めを開始しました。幸いにも近くに「市電保存館」があり、訪ねました。実際に走っていた電車が、当時の面影を残しつつ展示されていました。この展示をみて、市電が廃止されたことが、諸般の事情を考慮しても、残念で、もう一度走ることができないかな？と真剣に思ったりしています。

撮影は、買い換えたばかりの、Sony VG-30H でハイビジョン 60p で行い、集めた当時の写真を元に、撮影された場所の現在の風景に対峙出来るように、「本牧三渓園前」から開始しました。そのルートには現在は市営バスが走っており、その様子を、市電になぞらえて、徒歩でカメラ、三脚を持って移動しながら、元町まで撮影して行きました。道すがら、少年に「映画の撮影してるの？」なんて声をかけられましたし、まわりからは好機の眼でみられていたかも知れません。

写真 64 本牧三渓園前にて 大谷不動産提供

編集は、Vegas Pro で、ナレーションは音声合成ソフトを使い、BGM は net 上に公開されている、著作権フリーの無料版を使わさせていただきました。数度のやり直しを経て、2013 年 5 月、YouTube に公開しました。それ以来、再生回数は 1000 回をやっと越えたばかりですが、私の作品としては異例の再生回数です。他の物は全然も見向きもされない物とか、数百回再生されれば良い方です。

１８．２ 横浜の水道など

他には、ヨコハマ始めてものがたりとして、「日本初の近代水道」をもとりあげました。これは、横浜市保土ヶ谷区にある、横浜水道記念館を中心に取材し、まとめて行きました。残念だったのは、取水源まで撮影にゆけなかったことで、これは自動車が無いと無理でした。市内あちこちの水道関係のモニュメントがあり、それらを撮影してまわり、まとめました。水道記念館に併設されている水道技術資料館も興味深い資料を展示してありました。まいったのは、水道記念館はとなりが浄水場である関係からか、小高い丘陵に有るため、勾配のきつい坂道を登らなければならなかったことで、後で、バスが利用出来る事に気がつくのが遅かったことです。

他には、市内の[山下公園」「港の見える丘公園」、「馬車道を歩く」、「山手を歩く」など市内の名所を歩いて撮影しています。また、市内ではありませんが、鎌倉の「鎌倉・小町通り」とか、鎌倉の「円覚寺」、東京の等々力にある、「九品仏」、横浜市内の「称名寺」など寺院も好きで、テーマにとりあげ、
YouTube で公開しています。

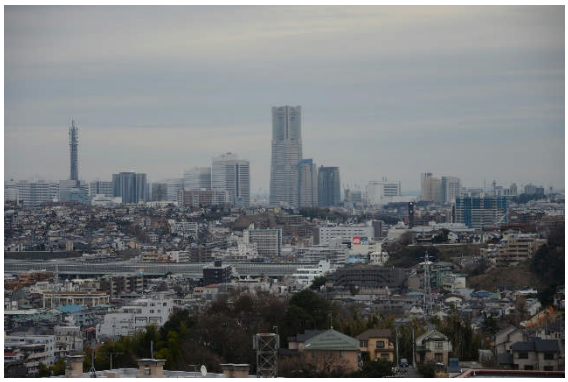


写真 65 水道記念館からの展望

写真 66 ディルプレイされた逆支弁

写真 68 水道記念館・ウオーターパール

写真 67 水道事行の貢献者の像

１９．古稀を迎えて

2012 年 6 月 22 日、K 社を退きました。古稀（満六九歳）を迎えて 8 ヶ月後の事で、せめて、満 70 歳までは働きたかったのしかたのないことでした。若いころ、自分自身が、こんな年齢を迎える事を想像できなかったし、いざこの齢になってみると、年をとったなあと、実感します。歯は、部分入れ歯のお世話になり、足下もおぼつかなく、つんのめって転けることもしばしばで、特に自転車で走る時、バランスを保つのがやっとです。

70 歳を迎えて良かった事と言えば、横浜市が発行する「敬老特別乗車証」を購入すれば 1 年間、市営バス、と地下鉄それに市内を発着する民営バスが無料で出来ることです。私の場合、収入が年金のみですので、7 千円で購入できます。また、53 歳で発病した心不全のため、毎月病院に通っていますが、診療費が 1 割負担になったことでしょうか。でもこれもどうなるかわかりません。

１９．１ 老後の生活

いつだったか、こんな映画がありました。「最高の人生の見つけ方」というもので、医者から余命 6 ヶ月と宣告された二人の男が冒険の旅に出る物語です。それに習って私も考えてみました。以下のとおりです。

１．沖縄美ら海水族館でジンベエザメをみる。
２．旭山動物園で動物を監察する。
３．立山アルペンルートを楽しむ。
４．四国八十八ヶ所を巡礼する。
５．富士山頂を征服する。
６．米国テネシー州のメンフェスへ行きたい。

１．唯一、実現したのがこれで、首里城、美ら海水族館、今帰仁城址を見学、ビデオを撮影し、編集済みです。
２．旭山動物園は、2015 年 2 月雪祭り見学をかねて実行を予定しています。
３．立山アルペンルートは開通のニュースをみるたびに、くすぐられています。
４．本来、私の故郷を巡ることですが、仕事から解放された今でこそ、可能性がでてきました。ただ、膝の故障は現在も、多少引きずっていますので、徒歩での巡礼は無理でしょう。
５．以前 5 合目までゆき、宝永山まで行きましたが、持病の心不全のため、呼吸が苦しくなっ他くらいですので、山頂征服は実現出来そうにもありません。
６．メンフェスは、エルビス・プレスリーゆかりの土地で、いつか BS テレビで見た、路面電車の走る街の様子がとても気にいりました。宝くじでも当たれば必ずゆきます。

１９．２ 自動者運転免許について

70 歳の夏(平成 26 年)、「高齢者（運転）講習会」なるものの案内が届きました。丁度 71 歳の誕生日が、運転免許の更新となるため、事前に高齢者講習を受講せよとの事であり、受講しなければ更新が出来ないとのことでした。ちなみに手数料が 5,800 円も必要で、年金生活者にとっては、捻出が容易ではない事は明らかです。もう、自家用車も保有していないし、仕事で使う事も、レンタカーで出かけることも無いだろうし、身分証の代わりくらいしか用がないのだから、この辺で、返上することも考えました。しかし、今回の更新で最後にしようと、講習会に参加しました。

講習会は一般の自動者教習所で行われました。お定まりの、ビデオ鑑賞、シュミレーターによる反応テスト、視力と視界検査そして、実技指導でした。反応テストや視力はやはり年齢とともに劣化するものでいかんともしがたいのが実情でした。実技では３人のグループと教官の４名で１台の教習車に乗りこんで実施されました。１年以上も運転する機会が無かったのですが、思い通りの通常の運転が出来ました。教習所内のコースで有ることを考慮すると、速度が少し早すぎたようで、その点を指摘されてしまいました。ゆっくり走った積もりでしたが、もっとゆっくりでいいそうでした。そんなにゆっくりでは、公道であれば実情にそぐわない気がしました。また、神奈川県公安委員会での指針では、左折車両のバイク・自転車の巻き込み事故が増えているということで、自動車が交差点を左折する場合、できる限り左に寄って、バイクが左側を追い抜けないように走行し、また信号で停止するときも左側にバイクや自転車が入れない様に停車するようにとの事でした。意地悪ですね？

一応、講習終了証をもらって教習所を後にしましたが、運転者は 70 歳で免許返上しろというか、今後運転免許は 70 才を限度とし、それ以降は再度試験して・・と言うことになるのかもしれません。

１９．３ シルバー人材センター

公益財団法人 横浜市シルバー人材センターへいってみました。登録説明会に参加してみて、誠に残念で、がっかりとした気持ちで帰途についたのでした。このところ、家にいて、趣味の世界を楽しんではいるものの、やはり外で働き、いくらでもいいから小遣いを稼ぎたいと考えました。募集チラシなどで、応募するもすべて、ダメで、ならばとシルバーセンターで話を聞いてきたのでした。

結論は、70 歳をすぎるとほとんど依頼が無いとの事でした。確かに力仕事は若い人にはかなわないが、何か役に立つ事はあるはずだとおもうのですが、それが甘かったようです。人材センターが頑張っても、企業のニーズがないと何とも仕方ないことです。老後を生きて行くためには、国からの経済的な支援は望みませんが、せめて働く場所を何とか出来ないものでしょうか？

２０．気になる政治・経済

2012 年（平成 24 年）の第 180 回国会において、内閣総理大臣・野田佳彦（民主党代表）

は”税と社会保障の一体改革を巡る消費税増税法案”の採決に際して、近いうちに国民の信を問う、つまり衆議院を解散し、総選挙を行うことを条件に自由民主党・公明党の協力を取り付け、法案を成立させたのでした。しかし、解散されることはないまま、79 日間延長された会期を終えました。

２０．１ 安部政権誕生

2009 年（平成 21 年）8 月 30 日、麻生内閣の時代の総選挙で自民党は大敗し、下野することになったのですが、9 月の自民党総裁選挙で谷垣禎一氏が自民党総裁に選出されました。野党時代の続く中、2012 年の自民党総裁選挙では、石原伸晃幹事長が立候補を表明したため「執行部を含めて党内を掌握できなかった責任を取る」として、谷垣禎一氏は再選出馬を断念せざるをいなくなり、結果として 9 月 26 日に行われた自由民主党総裁選挙では、石破茂氏・安倍晋三両氏による決戦投票により、安倍晋三氏が総裁に就任することになったのです。次の総選挙で与党となれば、安部氏を総理にと考える自民党の画策だったのでしょう。

同年 10 月末に第 181 回国会が召集されましたが、それ以降も解散が遂行されず、11 月 15 日に開かれた衆議院議院運営委員会の理事会を開催し、11 月 16 日に衆議院解散を宣するための本会議開会を決定し、11 月 16 日、日本国憲法第 7 条の規定によって衆議院が解散されました。日本国憲法施行後、総選挙の投票日が 12 月に設定されるは、1983 年（昭和 58 年）の第 37 回総選挙以来 29 年ぶり 5 回目の「師走選挙」となりました。その結果、自民党が圧勝し、第 96 代内閣総理大臣に安倍晋三が推挙されたのでした。安倍政権が誕生し、アベノミクス”三本の矢”の基本政策がうちだされました。この安倍総裁の考えや言動は、どこかヒットラーによく似ていると思うのは私だけでしょうか？

２０．２ 日本国憲法と集団的自衛権

日本国憲法について、改正の是非が論議されています。安倍総理は祖父の時代から、憲法改正を主張していて、総理もその考えを引き継いでいるようです。自民党の憲法改正草案が発表されていますが、それを読んでも、よくわからないのが事実ではないでしょうか。憲法九条の二項をは、戦争を放棄するが、自衛権の傘の下で、戦争が出来ると解釈出来そうです。

集団的自衛権の憲法解釈の変更による行使を閣議決定で行えるようにしたいとの考えを発表。夏の米軍の地位協定うちあわせ？のための対策とみられる。とメディアの報道がありました。この憲法解釈について、法制局に対する質問に対し、安倍首相は自分が責任者であるから、答弁すると言明しました。

結局、この問題は閣議決定されてしまいました。

問題は、閣議決定するとういう姑息な手段を使わず、憲法改革が必要ならば国民投票にゆだねるべきであろう。首相は国民投票を実施したときに、反対票が多数となると見込んでいるのではいか？まして、憲法九六条に規定にある、「各議院の総員の三分の二以上の賛成で、国会が、これを発議し、国民に提案してその承認を経なければならない。」をまず半数以上に変更し

て、憲法改革の賛成を得たい考えのようであるとの報道も耳にしました。
2014 年 10 月現在、日本が尖閣諸島を国有化したことにより、中国との関係がぎくしゃくとしてきています。航空自衛隊のスクランブルの回数も半端ではないとの報道もありました。また、小笠原諸島付近での中国漁船の赤珊瑚の密漁がはげしくなった様子が報道されており、一蝕即発が危惧されます。

２０．３ 特定秘密保護法

特定秘密保護法案の審議が、2013 年 12 月 6 日の臨時国会で強行裁決を重ねるなかで成立しました。法案は、『防衛、外交、スパイ防止、テロ活動防止の４分野で、安全保障に支障を来す恐れのある情報を「特定秘密」に指定することが柱とされ。指定された情報は公開されず、その秘密を漏らした公務員や民間業者らには最長で懲役 10 年の罰則を設けている。指定期間は一部例外を除き「60 年を超えることができない」とした。』つまり、「特定秘密」と指定されれば知る権利が阻害され、秘密のベールに包まれることになります。何が何だかわからないうちに、秘密を漏洩してしまった場合になど、処罰対象となってしまう恐れがあり、怖い物になります。
自民党は、秘密保全の」法整備に積極的でしたが、国会で機運が高まったのは、2010 年 9 月に尖閣諸島付近で起きた中国漁船と海上保安庁巡視船との衝突事件が契機でした。海上保安庁職員が船上で撮影した映像をインターネットで公開したことから、民主党政権の当時の仙谷由人官房長官が、秘密保全法制を早急に検討するとの姿勢を指名していて、2011 年 8 月に有識者会議が「秘密保全法制を早急に整備すべきである」とする報告書をまとめ、当時の民主党政権が国会提出をめざしていたのです。

２０．４ 原発問題 終息と輸出

原発は大きな問題を抱えていると考えます。使用を終えた核燃料の放射性廃棄物核の処理問題です。使用済み核燃料は、再処理されて取り出されたプルトニュームは加工工場で核燃料として再利用されますが、他の高レベル放射能廃棄物（核のゴミ）は地層処分施設で保管されます。現状ではこの施設は設置する場所も決定しておらず計画中なのです。放射性物質の半減期（放射能の強さが、元の半分になるまでの時間）は、物質によって異なりますが、施設での管理期間は数万年と気の遠くなるような時間が必要となります。原発が稼働すると、核のゴミも日々増えて行き、これらのゴミを孫子に残すことになります。ある評論家は、将来の、知恵者によって処理法の開発を気対すしかないと言明していました。
東北大震災で受けた被害は甚大でした。原発から受ける恩恵も大きいのですが、いつ危険の物になるやも知れない原発を、安倍総理は輸出する考えを持っており、さきの外遊でトルコ政府と会談し、輸出する合意を得たようでしたが、それでいいのでしょうか？
原発の経済効果を言明する、経団連会長、や商工会議所会頭、それに有識者は、現在の日本の稼働を呈ししている原発の再稼働を強く望んでいるようです。東電福島原発が無残な事故に遭い停止した当初、電力不足が叫ばれて、計画停電などの処置がとられました。一時期、確かに混乱しましたが、現状では電機メーカーの省電力化設計があいまってか、再生可能エ

ネルギーの取り組みの効果か、我ら一般市民は電力不足を感じていません。

ちょっと話がそれるかもしれませんが、再生可能エネルギーについてですが、図８は拙宅の東京電力からの電気料金等振込取扱票です。この中に「再エネ発電賦課金」と言う項目があります。一般家庭や施設の再生エネルギーの発電を、東京電力が買いとります。これは、再生エネルギー発電促進賦課金として、一般家庭が負担する制度ですが、これはなぜ負担しなければならないのでしょうか？ちなみに負担額の算出は、2026 年度は、使用電力の 1kWh あたり 0.75 円となります。東京電力の案内センターの介川 緑（すけがわみどり）さんにお伺いしました。

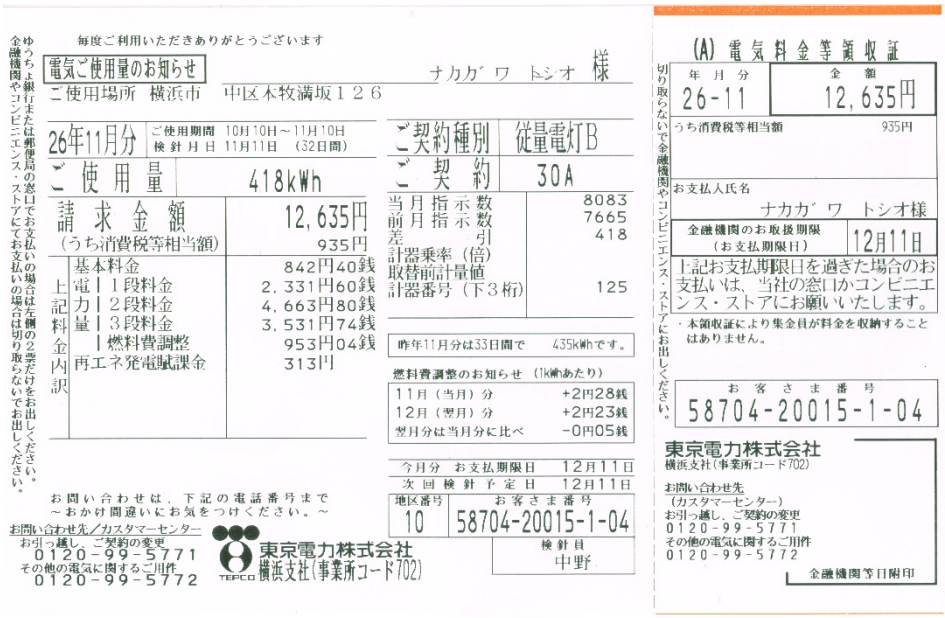

毎度ご利用いただきありがとうございます
電気ご使用量のお知らせ
ナカガワ トシオ 様
ご使用場所 横浜市 中区本牧満坂１２６
26年11月分 ご使用期間 10月10日～11月10日 検針月日 11月11日 (32日間)
ご使用量 418kWh
請求金額 12,635円
(うち消費税等相当額) 935円
上記料金内訳
基本料金 842円40銭
電力量 1段料金 2,331円60銭
電力量 2段料金 4,663円80銭
電力量 3段料金 3,531円74銭
燃料費調整 953円04銭
再エネ発電賦課金 313円
ご契約種別 従量電灯B
ご契約 30A
当月指示数 8083
前月指示数 7665
差引 418
計器乗率(倍)
取替前計量値
計器番号(下3桁) 125
昨年11月分は33日間で 435kWhです。
燃料費調整のお知らせ (1kWhあたり)
11月(当月)分 +2円28銭
12月(翌月)分 +2円23銭
翌月分は当月分に比べ −0円05銭
今月分 お支払期限日 12月11日
次回検針予定日 12月11日
地区番号 10
お客さま番号 58704-20015-1-04
検針目 中野
東京電力株式会社 横浜支社(事業所コード702)
(A) 電気料金等領収証
年月分 26-11
金額 12,635円
うち消費税等相当額 935円
お支払人氏名 ナカガワ トシオ様
金融機関のお取扱期限(お支払期限日) 12月11日
上記お支払期限日を過ぎた場合のお支払いは、当社の窓口かコンビニエンス・ストアにお願いいたします。
・本領収証により集金員が料金を収納することはありません。
お客さま番号 58704-20015-1-04
東京電力株式会社 横浜支社(事業所コード702)
お問い合わせ先 (カスタマーセンター)
お引っ越し、ご契約の変更 0120-99-5771
その他の電気に関するご用件 0120-99-5772
金融機関等日附印
ゆうちょ銀行または郵便局の窓口でお支払いの場合は左側の2票だけをお出しください。金融機関やコンビニエンス・ストアにてお支払いの場合は切り取らないでお出しください。
切り取らないで金融機関やコンビニエンス・ストアにお出しください。
お問い合わせは、下記の電話番号まで ～おかけ間違いにお気をつけください。～
お問い合わせ先／カスタマーセンター
お引っ越し、ご契約の変更 0120-99-5771
その他の電気に関するご用件 0120-99-5772

図 9 電気料金等払込取扱票

２１．おわりに

２１．１ 最後の帰省かもしれない

2026 年 10 月 20 日のこと、四国へ帰省しました。四国には兄ふたりが健在ですが、高齢であり、いつ何時、どんな事があるかわからないので、兄弟３人で”老人会”を開こうということで、5 日間の予定で帰省しました。私には”老人会”の他に母校訪問とか、お寺巡りをもくろんでいました。交通を含む費用は３万円程度しかなく、夜行バスをと思っていましたが、何気なく閲覧したホームページで、東京～高松間の航空運賃が 22,000 円で足りると云うことがわかり、バスとあまり変わらなく、楽に旅が出来ると、早速予約しました。

到着したその夜は、二人の兄と、兄嫁そして、孫達を交え、食事や酒をくみかわし、昔話の花を咲かせましたが、その兄達はすっかりできあがってしまいました。でも「良い酒だった（楽しく酒が飲めた）」と喜んでくれました。

翌日は、二日酔いで寝込んでいる兄の自動者を拝借して、母校をたずねました。母校は当

時は詫間電波高校でしたが、詫間高等専門学校をへて、現在は香川高専詫間キャンパスとなっていて、母校と云えるかどうかわかりません。丁度、通りかかった福永先生を捕まえて話を聞き、校内をめぐって見ました。当時は海軍航空隊の木造の施設や兵舎をそのまま使っていましたが、その当時のシンボル的存在であった大アンテナとともに一新されていました。今は鉄筋コンクリートの校舎の屋上に建てられたアンテナも、教科の関係で余り使われないかもしれません。

写真 69 かつて詫間電波高校の正門だった

また、私が通っていた当時はなかったのですが、正門の並びに、詫間海軍航空隊の記念碑が建立されていました。それによると、ここからも特別攻撃隊が出撃していったようです。

写真 70 卒業生が書いた当時のスケッチ

写真 71 詫間海軍航空隊の埠

私の実家から、徒歩でゆける範囲に、二つの八十八ヶ所霊場があります。子供の頃は遊びがてら良く行った物ですが、たぶん約 50 年ぶりでしょう、お参りに行ってきました。その一つ、曼荼羅寺には「不老の松」という銘木がありましたが、数年前松食い虫によって枯れてしまったそうで、当時の写真のみが展示されていました。また、出釈迦寺は昔とは参道が変わってしまったようでした。このお寺の裏手の山は我拝師山（がはいしさん）といい、その中腹に奥の院というべき、捨身ヶ嶽（しゃしんがたけ） 禅定（ぜんじょう）がありますが、そこまで登る気力はありませんでした。

また、弘法大師生誕の地と云われる善通寺も久しぶりにお参りしました。あいにくのあめでしたが、子供の頃は、境内に市がたって、サーカスや見世物小屋が、そして露店が賑やかに並んだ風景がみられましたが、いまはその面影もなく、シンボルの五重の塔がひっそりと建っているだけでした。ちょっと足をのばして、県境の山の上にある雲辺寺へも行ってみました。ここは初めてのお参りでした。

写真 75 善通寺の五重塔

写真 74 曼荼羅寺の当時の不老の松

写真 73 雲辺寺のおたのみなす

写真 72 出釈迦寺 捨身ヶ嶽禅定

２１．２ 親友Ｆ君のこと

気になっていたＦ君に会ってきました。私の中学からの友人で、現在は千葉県に奥様とお住まいです。

11 月、横浜発アクアライン経由で袖ヶ浦バスターミナルまで行き、奥様に自動者で迎えに来てもらいました。久しぶりに会った彼もすでにリタイヤしており、悠々自適の暮らしをしているかと思いきや、寄る年波で、体にガタが来たとのことでした。一番やっかいなのは、目が衰えて来たことでした。白内障から、網膜から脳への神経に異常があるようで、たぶん私の顔もはっきり見えないようでした。そんな訳で、出歩く事もままならず、足腰もおとろえてきたようでした。

お互い年をとって、酒を酌み交わし昔話も余り出来ないまま、お互い愚痴をこぼすのみで、つくづく年はとりたくないとと認識しました。帰り際、しっかりと握手しながら、「もう会うことも無いだろうな！」と言葉を交わし、バスターミナルまで送ってくれた二人と別れました。

２１．３ おわりに

生まれてから、最近までの私の歩んできた道を思い出し、過去の古い写真を引っ張りだしながら、書き綴ってみました。なぜ、このような自伝を書くことを思いついたということは、技術の発展をこの目でみて、経験してきたこと、少しは世に貢献できたかもしれない思いなど、良いにつけ悪しきにつけ、諸々の思いを書き残しておこうと思いついたからでした。それに、何より感銘を受けた話を聞いたからでした。

それは約 20 年も前になりますか、A 社に勤めていた頃、ひとりの社員が話した内容を思い出します。、その頃は父親をすでに亡くしていました。彼は亡くなった父親を非常に尊敬していたようです。その父親は、低学歴ながら、独学で地道に努力して、会社での立場をあげていったそうです。その事実を彼は尊敬の念でみていたようです。たその父親が亡くなったときのこと、父親の功績は本人がなくなってしまったら、誰にも引き継がれることがなく、功績やその事実はリセットなのだと彼は嘆いたといいます。

私が過ごして来た人生経験で、功績があったかどうかは別にして、過去を書き綴ってあれば、私の人生の経験が後進に役立つ事もあろうかと思うしだいです。

これからも科学技術は発展し突き進んで行くでしょう。2020 年には、再び東京オリンピックが開催されます。好むと、好まざるにもかかわらず、私の人生で２度もオリンピックを見ることが出来れば、やはり幸せな事なのでしょう。

＝ 完 ＝

誤字訂正

'15/3/20 R2	P81: 楽しく酒がのめた	->	楽しく酒が飲めた
	P82: 良く云った物ですが	->	良く行った物ですが
	P83: ガタ餓鬼他との	->	ガタが来たとの
	神経に以上	->	神経に異常
	ことも内	->	ことも無い
	P84: はべつにして	->	は別にして
	あろうかとおもう	->	あろうかと思う
	み科学技術は発展は	->	も科学技術は発展し
	P７：1・1　行を詰める		
'15/3/23 R2	サブタイトル変更		